

279.6  
12



0036519-000

279.6-12

集団勤労作業の精神

長屋喜一・著

目黒書店

昭和15

AGF



279.6

12

官學教育部文

一喜屋長

# 神精の業作労働團集

編會究研學教亞興



書新學教

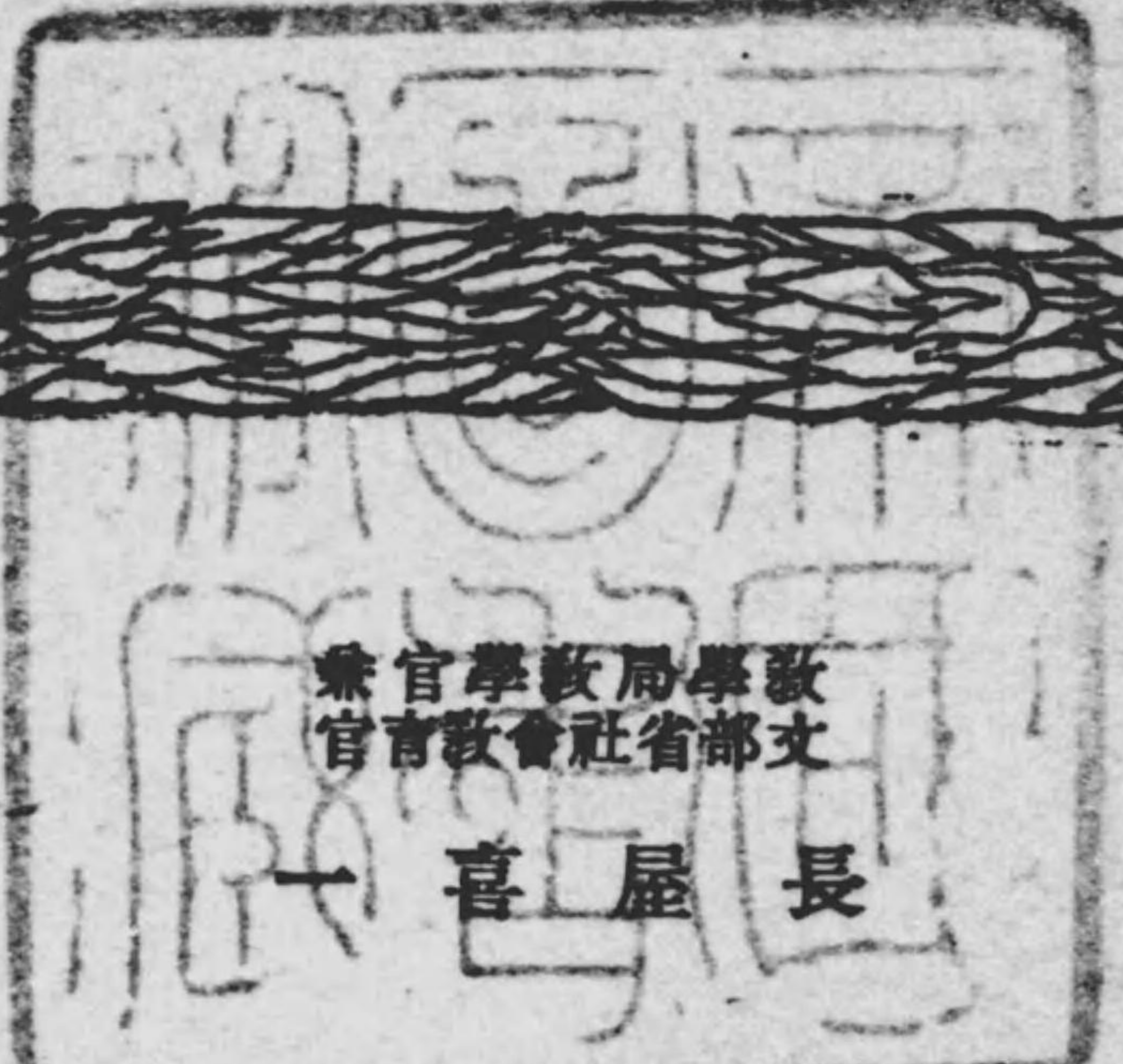
— 12 —

店書黒目









兼官學教局學教  
官言教會社省部文

一喜屋長

神精の業作勞勤團集

書新學教

— 12 —

店書黒目





279.6  
12

## はしがき

新東亞を建設し、新文化を創造すべき秋に當り、此の世界史的使命を達成すべき皇國民の教養を高めんがために、こゝに本新書を刊行する。

本新書は主として教學局主催各大學高等專門學校の文化講義並びに各府縣に於ける國民精神文化講習會の講義中より選擇せるもので、本書は、教學局教學官兼文部省社會教育官長屋喜一氏の昭和十四年度文部省主催の大學・高等專門學校及び中等學校の集團勤勞作業指導者講習會に於ける「集團勤勞作業の教育的意義」或は「教學刷新と集團勤勞作業」なる題目の講義に、同氏の補筆を煩はして上梓せるものである。

昭和十五年十二月

興亞教學研究會



目次

緒言	1
一 序言	1
二 集團勤勞作業の趣旨	4
三 教育刷新の方向	6
第一講 實踐の世界(一)	10
一 西洋的立場	10
二 東洋的立場(一)	14



目	三 東洋的立場 (一)	二二
	四 日本的立場	二六
次	五 實踐の場	三一

第二講 實踐の世界 (二) ..... 三五

- 六 心身一體 ..... 三五
- 七 物心一如 ..... 四〇
- 八 精神の一如 ..... 四九
- 九 日々是好日 ..... 五五
- 一〇 新科學精神 ..... 六〇

第三講 集團勤勞作業の諸問題 ..... 七〇

目	一 實施上の諸問題	七〇
	二 指導上の諸問題 (一)	七九
	三 指導上の諸問題 (二)	一〇八
	四 作業教育と集團勤勞作業	一二六
	第四講 獨逸勞働奉仕團制度	一三五
	一 アルバイトデーインストの精神	一三五
	二 アルバイトデーインストの組織	一五一
	第五講 集團勤勞作業の精神	一六一
	一 集團勤勞作業の日本的性格	一六一
次	二 興亞勤勞報國隊	一六八



目 三 興亞教育の根本義…………… 1pt

次

目 次 終

集團勤勞作業の精神



昭和十三年の夏季休暇は我が國教育史上特筆すべき時期であつたと思はれます。それは全國の大學・高等専門學校・中等學校の學生生徒が總動員されて、集團勤勞作業が行ぜられ、而もその實施通牒が休暇間近に發せられ、その趣旨にしてもその方法にしても又それに対する心構へにしても必ずしも徹底してゐなかつたにも拘らず、實施の結果は豫期以上の好成績を擧げたことであります。その參加概數延人員だけを見ましても、文部省教育調

精神の作業勤勞圖案



査部の統計によると、官公私立合して大學に於ては十萬六千六百六十五人、その他の高等諸學校にあつては男子三十四萬五千七百三十七人、女子九萬一千七百九十二人、右總計約五十四萬人、なほこれらの諸學校に於ける參加教職員數は男女合して實數約十萬人に及び、中等學校にあつては參加生徒數約七百五十六萬人、そのうち男子約四百六萬人、女子約三百五十萬人、參加職員數は實數約五萬人であつて、而も全國同一精神の下に師弟一體となつて行ぜられたのであります。兎角抽象的な觀念の末に趨り偏知主義的個人主義的自由主義的に流れ、拱手傍觀して冷淡な高踏的批判に墮し勝ちであつた我が國教育界としては實に劃期的な革新的な出來事でありました。

その作業の内容を見ましても、眞夏炎暑の中、日頃不慣れた河川・道路の修理、埋立工事土砂の採取運搬、植林・間伐・下草刈、公園・運動場・飛行場等の地均しや建設、學校内の土木作業、開墾・農耕、或は應召家族の家事手傳、傷痍兵の衣服の洗濯・裁縫、その他軍役奉仕作業、或は神社・寺院・陸軍基地の清掃、學校内外の清掃等各種の作業に互り、

豫想された不安や困難を見事克服し、その眞摯なる作業振りには教職員が先づ驚嘆し感激したのであります。而して此の運動は青年團・青年學校・小學校にも影響し、更に昨年即ち昭和十四年夏には飛躍發展して興亞青年勤勞報國隊となり、約一萬の學生生徒及び一般青年が指導教官と共に海を越えて滿洲國及び北支の大陸の天地に働いたのであります。

これらの勤勞奉仕作業は實に我が國民の劃期的歴史的な行であつて、その解釋や理論付けは第二義的なものであり、我が全青年學徒が心を一にし私を空しうして唯黙々と働くことが最も望ましいことであるのは勿論であります。唯此の運動は何處迄も一つの具體的な國民教育運動であり、所謂國民鍊成の最も適切なる一方法である以上、その精神を出來るだけ觀念的理論的にも明らかにしてかゝる必要があると思はれます。これ此處に拙文を草して蛇足を添へる所以であります。



## 二 集團勤勞作業の趣

文部省は昭和十三年六月九日此の運動實施に關し次官通牒を發してゐますが、その直轄諸學校長等宛の中に「集團的勤勞作業運動ハ實踐的精神教育實施ノ一方法トシテ現時ノ教育刷新上大ナル示唆ト意義トヲ有スルハ勿論特ニ現下ノ時局ニ處シ極メテ緊要ナルコトト認メラルルニ付テハ本年夏季休暇ニ於テ別紙要項ニ依リ地方ノ實情ニ應シテ之ヲ實施シ其ノ教育的効果ヲ十分ニ收ムル様格段ノ御配意相成度」と述べて居り、同地方長官宛の通牒にも同様の文句が掲げられ、又同官公私立大學長宛の通牒にも「本件ハ學生々徒ノ實踐的精神教育ノ一方法トシテ現下極メテ緊要ナルコトト認メラルルニ付テハ貴學ニ於テモ右ニ準シ實施セラルル様十分御配意相成度」と謂つてゐます。而して右通牒の別紙要項の専門學校等に對するものの中には「要旨」として「集團的勤勞作業運動ハ實踐的精神教育ノ具體的實施トシテ學生生徒ヲシテ勤勞作業ノ體驗ヲ通ジテ團體的訓練ヲ積マシメ依ツテ心身ヲ

鍛鍊シ國民的性格ヲ練成スルヲ以テ趣旨トスルコト」と述べてあり、これは中等學校に關するものに於ても殆ど同様に述べられてあります。更に文部省は昭和十四年三月三十一日直轄學校長・公私立の高等學校及び専門學校長宛次官通牒を發しその中に「一、本作業ノ實施ニ當リテハ昨夏通牒ノ要旨ヲ徹底センガ爲一層禮節規律ニ留意シ彌々盡忠報國ノ精神ヲ以テ心身ヲ鍛鍊シ集團的勤勞ニ依リ不撓不屈生成發展ノ氣魄ヲ培ヒテ實踐的精神教育ノ實ヲ舉グルコト」と述べて居り、これは同地方長官宛通牒にも載つて居り、又同官公私立の大學長宛の通牒にも「本件ハ漸次之ガ恆久化ヲ圖ラントスル次第ニ有之貴學ニ於テモ右ノ趣旨ニ準ジ其ノ實施ニ付一段ノ工夫相成度」と述べてあります。

右の各通牒に示されたる如く、集團勤勞作業は實踐的精神教育の具體的方法として單に中等諸學校のみならず大學・高等専門學校にも課せられたことは明瞭であり、而もそれは教育刷新上且又時局對處上重要な意義を含むことも亦右通牒中に明らかであります。故に私は以下「實踐の世界」の本質を解明することによつて、集團勤勞作業の精神を明らか



にし、同時に教學刷新・時局認識の問題にも若干の光を與へ度いと思ひます。

### 三 教育刷新の方向

さて實踐の世界の本質的考察に入ります前に吾々の課題たる教育刷新の方向を一應反省して置きます。前に引用せる通牒中に「實踐的精神教育」が反復強調されてあるのみならず、昭和十四年度以來行はれてゐる集團勤勞作業指導者講習會に於ける文部大臣訓示中にも「國家公共ニ奉仕スルノ態度ヲ實踐的ニ深メ」とか或は「之ヲ要スルニ集團勤勞作業ハ教育ヲ行的ニ發展セシメ、團體的訓練ヲ施シ、身心ヲ鍊磨シ、勤勞公ニ奉ジ克ク國家ノ生成發展ニ參與スル皇國民ヲ鍊成スルヲ以テ主旨トナス」と曰はれて居ります。更に溯れば昭和十一年十月二十九日附の「教學刷新評議會答申及ビ建議」中には「學校ヲ以テ國體ニ基ク修練ノ施設タラシメ、……夫々校風ノ下ニ媿・修練ヲ重ンジ、紀律ヲ守リ志操ヲ緊實ニシ、徒ニ自由ニ流ルルコトナク奉公ノ精神ヲ旺ナラシメ、實踐躬行ヲ主トスルモノタラシムルコ

ト肝要ナリ」とあり、又昭和十三年十二月八日教育審議會第十回總會に於ける國民學校・師範學校・幼稚園に關する特別委員長報告要領中にも「教育ハ本來知識ト實行、精神ト身體トヲ一ニシテ肇國以來ノ道ヲ行ズルモノデナクテハナリマセン。諸々ノ知識、諸々ノ動作ハ道ニ依ル實踐ヲ通ジテ始メテ克ク人格ノカトナリ、眞ニ國民鍊成ノ素材トナルノデアリマス。人格ノカトモナラズ國民トシテノ實踐ニモ關リナキ抽象的知識ノ詰込ヤ精神ヲ伴ハザル單ナル身體的動作ノ如キハ道ノ修練ヲ旨トスル我が國教育ノ本義ニ副ハザルモノデアリマス」とあるのであります。又同審議會昭和十四年九月十四日第十一回總會に於ける中等學校及び高等學校に關する特別委員長報告要領中、中等學校に關する要綱説明中には「從來教育ガ動モスレバ、全體の統一ヲ缺キ断片的知識ノ傳達ニ終リ全一ナル人格ヨリ離レ、信念及實踐トノ關聯ヲ失フ傾キナシトシナカツタノデアリマスガ、之ガ根本的改善、刷新ハ既ニ委員會ガ國民學校ニ關スル審議以來一貫セル精神デアリマス。然レバ、中等學校ニ於テハ一層身心ヲ一體トセル實踐鍛鍊ノ教育ヲ重視シ、質實剛健、勤勞愛好ノ氣風ヲ



作興スルト共ニ實踐的國民性格ノ鍊成ヲ致サナケレバナリマセヌ」とせられ、同高等學校に關する要綱説明中には「皇國ノ道ヲ修メシメ、精深ナル高等普通教育ヲ爲シ、他日國家ノ指導的地歩ヲ占ムルニ遺憾ナキ一般教養ヲ有スル有爲ノ人物ヲ鍊成スルコトガ目的デアリ、之ヲ其ノ使命トスルモノデアリマス」又「人物鍊成上重要ナル作用ヲ有シマスル身心一體ノ鍛鍊ニ依リマシテ文ヲ修ムルト共ニ武ヲ練リ、高邁瀟灑ノ氣宇ヲ養ヒ、強健ナル體軀ヲ練磨スルコトヲ肝要トスルノデアリマス」とあります。尙又來年（昭和十六年）度より實施される國民學校に於ても「皇國の道に則れる國民鍊成」が根幹となることは、前述の報告要領より見ても、その他國民學校案として世に知られたるものより推しても明白であらうと思ひます。

固より教學刷新の根本義は我が國體を明徴にすることには言ふ迄もない事でありませんが、同時に以上の當局の意圖によつても、又現時我が國の教育界其他一般に國民精神の動向より見ましても、現代要求されてゐる教育の刷新、延いては國民生活の革新は、そ

れが實踐化或は行的鍛鍊にあると約言しても過言ではありません。そして國體明徴と教育の實踐化とは本質的な聯關があるやうに思はれます。そこで問題は實踐或は行の本質如何といふことにあるやうに思はれるのであります。私は先づ此の問題を若干究明する爲に是迄の學問・教育其他所謂西洋近代文化の根柢をなしてゐる物の見方・取扱ひ方の缺陷から觀て行かうと思ひます。そしてその病弊を救ふものとして、東洋的更に日本的なるものとしての行或は實踐の本質に觸れて見たいと思ふのであります。



## 第一講 實踐の世界(一)

### 一 西洋的立場

明治以來の我が國の思想一般殊に教育や學問は、合理主義的であり抽象的であるとか、或は實證主義的であり個人主義的であるとか云はれ、それが西洋十八世紀以來の啓蒙思想或はその延長としての思想の影響であるとされてゐますが、西洋近世思想のかゝる性格は西洋文化の二大源泉と云はれるギリシヤ及びユダヤの思想によつて規定されてゐるのでありまして、實踐よりも理論を重んじ、例へば競技をする人よりもそれを觀る人の方を優れた立場であるとするギリシヤ殊にアリストテレスの主知主義が今日迄支配してゐますし、又ユダヤ思想の二元的な世界觀が今日の思想に決定的な影響を與へてゐるのであります。

近世科學の精神だといはれる物を客觀的に即ち冷たい態度で數學的精確さを以て分析的に見るのが最も正しい物の見方であるとする精神も、所謂ユダヤ精神であるとされてゐます。然し物から離れて眺める理論的な立場、そして理性によつて考へることを最も高い立場とする合理主義、まして分析的な科學の分別知の立場、さうした態度や見方で果して宇宙の眞相に徹したり人間本然の生き方が出来るでありませんか。否それのみならず眼前に生じし來る個々の現象すらも理解出来ないのではないでせうか。合理主義や實證主義が、従つて西洋の思辨哲學や實證科學が、人生に光を與へこれを救濟する事が出来ないのみか、却つて迷ひと鬭争と苦悶とを招來し、現代の破綻を醸したとも見えないでせうか。何れにしても根本的な反省と徹底的な方法を講じなければ、此の病弊から脱する事が出来ないやうに見えます。我が國に致しましても明治以來西洋流の思辨哲學や實證科學及びそれらに基づく百般の文化技術は發達し最近殊に格段の進歩をなしつつあるにも拘らず、否却つてその爲に、國民の生活全般に深刻な惱みが齎されつつあるのであります。勿論現代苦惱の原



因は種々複雑にあるのでありませうけれども、物の見方考へ方がその主なる根柢をなしてゐる事は人間の特性上必然な事だらうと思ふのであります。

一體物を見るにしても考へるにしても又實證するにしても、種々の立場があり、人種や民族の相異によつて本質的な相異のあることは、最近學者の間にも注意され來つた點であります。處で前述の様な西洋の古來一貫せる立場の缺陷を救ふものが東洋殊に日本にあるといふことも今日一般に認められて來つゝあるのであります。そしてそれを要約すれば、西洋流の物の見方考へ方は、兎角物を世界を二元的多元的に分割して取扱ひ、實證するにしても差別的な分析的皮相的な點に於てなす傾きがあつたやうです。かうした根本的な缺陷に對して歐洲に於ても、最近全體主義の思潮が勃興して來たのであります。又其の他に合理主義・主知主義に對して直觀主義・情意主義が強調され、抽象性に對して具體性が尊重され、普遍主義や個人主義に對して歴史主義とか民族主義が叫ばれて來たのであります。要するに所謂西洋的な立場は、兎角見る者と見られる者自分と對象とを切り離し、更に對

象の世界を差別的に分割し、そしてかく分離し分割されたものが各獨立して存在するかの如くに考へ、而もそれが最も具體的な物の見方であり眞理を明らかにする唯一の方法であると信じて來たのでありまして、それが所謂近代思想の特色であり、それに對して一方ギリシヤ以來の合理主義が差別の相を輕視した所謂抽象的な普遍主義として愈々弊を深刻ならしめたのであります。それ等を救ふものとして最近東洋的な立場が主張されるのであります。それは古來、一即多とか平等即差別と云ふやうな語で端的に云ひ表されて來た物の觀方であります。かゝる觀方をする爲には唯單に、情意を排した知だけで考へるとか、或は身體を離れた精神だけで考へるとか、或は物を自己から切り離して置いて眺めたり、或は自我中心で考へたりしてゐたのでは始まらないのであります。今日實踐とか行の立場の主張される様になつたのは、かゝる根本的な問題が本質的に關聯してゐるのであります。尤も現代人は唯拱手して眺めたり考へたりばかりしてゐるのではなく、寧ろ朝晩齟齬して働き通してゐるのが現状であるとも云へるのです。だから人は、現代人は活動人であり従



つて極めて實踐的であり行的であると云ふかも知れない。然し此の動き廻つてゐる人間がやはり前述した近代人或は西洋流の立場に墮してゐるのでありまして、非常に専門的になつて知識的にも技術的にも大いに進歩した譯でありますが、それでゐて根本的な缺陷があるのです。従つて今日求められてゐる實踐的とか行とかはかゝる立場のものとは本質的に異なるものであるのみならず、寧ろその病弊の根本救済になる性質のものなのであります。

## 二 東洋的立場 (一)

元より合理主義の哲學も實證主義の科學も、そして亦それ等に基づいた社會運動等の實踐も機械的技術も、それ／＼認識として行動として何等かの眞理と價値を有することは否定出来ませんし又そこに西洋文化の非常な特長があるのであります。而して又それが人類唯一無二の高い文化であると白人種は誇つて高慢になつてゐた所以でもありません。而して有色人種中獨り日本だけは此の種の知識・技術、一般に彼等の文化を至上のものとして夢

中になつて攝り入れる事によつて、今日世界の列強に伍し且又歐米文明國と對等の地位に立つ事が出来るやうになつた譯です。そして此の方向の進歩は今後も輕視したり中止してはならないのであります。のみならず我が日本人は此の方面にも卓越した能力を持つてゐることは十分に示されて居り、吾々は十分に自信が持てるのであります。従つて今日教學刷新と云ひましても明治以來の傳統を悉く廢棄して了はうと云ふのではない事は勿論であります。教學刷新の立場を頑迷な反動思想の様に誤解してゐる人がまだある様ですが、それは自己の迷執による無理解だと云はねばなりません。

然らば是迄通りの態度で研究を進め技術を進歩させ、そして後進にそれを受け繼がせてゆけばよいかといふと、其處に大きな問題があるのであります。此の點に於ては歐洲殊に獨逸あたりに於ても既に反省と革新が着手されてゐますが、東洋獨自殊に日本特有の立場を古來持ち續けて來た日本としましては、特に一大反省と刷新が求められてゐるのです。それは合理主義や實證主義の立場からだけでは具體的な生きた全體としての世界、人間、



其の他一切の物事の真相に徹することが出来ず、従つてそれ等に對する正しい處理も亦人間としての本然の生き方も出来ないものでありまして、その結果が現在世界を覆つてゐる禍なのであります。

前述の事態を一般に理解して戴く爲に、私は極めて卑近な例を以て比論的に申上げて見ませう。少し冗長の様ですが極めて具體的に明らかにして置かなければならない點と信じますので敢へて申述べます。

例へば私のこの體を一つの全體と見ることとします。固より私のこの體は空間的・時間的に天地と連なり、萬物殊に生きとし生けるものや民族と切つても切れぬ關係に於て生き、祖先と一體でありますが、今假にこの體を一つの全體として見ることとしまして、今これに關して如何に理想的な體系的な理論を以て述べて見ましても、又如何にこれを全體的に眺めて見ましても、心身一體としての生きた私の體は理解されず、又さうした態度では眞によく生かし働かすことは出来ないであります。ましてこれを精神と肉體即ち心身別々の

ものとして考へ、更にそれを頭は頭、手は手、足は足といふ様に切り離し、更に又それを眼・耳・鼻或は指・爪等と切り離して如何に緻密に觀察して見ましても、それが全體の聯關に於て觀られ、其の上に其處に生きてゐるものは單に心でもなければ身でもなく、まして單なる頭でも手足でもなく又それ等の總和でもなく而も又それ等を離れて在るものでもなく、實にそれ等すべての中に生き且それ等すべてを生かしてゐるといふことが直觀され體驗されない以上は、其の各々の真相に徹することは出来ないものでありまして、まして切に分析したものを如何に巧妙に組み立てても生きた體としての働きはしないのであります。これは極めて明白なことなのであります。所謂西洋流の學問は、それが哲學であらうと科學であらうと、精神科學であらうと自然科学であらうと、それが社會科學であらうと物理・化學であらうとその他それ等の應用科學であらうと、この明らかな誤謬に陥つておはしないでせうか。尙又その他に見たり考へたりする者と見られ考へられる者との關係も考慮に入れねばならぬだらうと思ひます。現代の哲學や科學の缺陷、従つて又その根



本的な刷新が世界的に問題になつて來つゝあるのも當然であると云はねばなりません。

そこで歐洲に於ても全體主義が主張される様になつて來たのでありますが、唯それが全體を民族と見、従つて時間的・空間的に限定されたものを全體と見てゐる様であります。それでは徹底した全體觀とは云へますまい。眞の全體といふものは一切を包容して餘す處無きものでなければなりません。見る者も神も一切がその中に含まれなければ眞の全體ではありません。此の點ナチスの世界觀等で全體を民族と見る様な低い見解に比して、吾の祖先例へば伊藤仁齋先生が「聖人以天地爲活物。異端以天地爲死物。此處一差千里之謬。……唯天地一大活物。生物而不生於物。悠久無窮」(童子問卷之中第六十七章)、「惟聖人能識天地之一大活物而不可以理字盡之」(同第六十九章)と喝破し又「蓋天地之間。一元氣而已。或爲陰。或爲陽。兩者只管盈虛消長往來感應於兩間。未嘗止息。此即是天道之全體。自然之氣機。萬化從此而出。品彙由此而生。聖人之所以論天者。至此而極矣。可知自此以上更無道理。更無去處」(語孟字義卷之上)と達

觀されてゐるのが如何に高い見地であるかに驚かざるを得ません。而してかゝる世界觀の根柢には實踐性が働いてゐる事は勿論であり、又此處に日本民族の性格が明らかに現れてゐるのでありますが、それらの問題には今立入らないこととしまして、唯此の際吾々が十分注意しなければならぬ事は、如何に理想的な全體觀的な理論や哲學が考へられ述べられたとしても、それでは所謂繪に畫かれた餅も同然であつて、飢を満たさない處か香も味もなく、それでは畢竟吾々の生活の力にはならないのであります。而もそれ處か理論的な觀想的な立場からは到底生きた全體と云ふものは具體的には擱めないものでありまして、さう云ふ立場では如何に十全に把握したと思つても、結局抽象的な皮相的なものに止まるのです。此處に觀想的立場や理論理性の限界がある譯です。

處が吾々が實際に生きて行ふとなると抽象では濟まないのは勿論のこと、世界や人間を全體的一體的に擱まなければならぬのであります。吾々の日常生活即ち所謂行住坐臥著衣喫飯一として天地・社會との全體的聯關なくしては行はれず、又吾々が草花一つ咲かせ



るにしても大根一本作るにしましても、天地の生命力と離れては行はれないのであります。實に吾々は天地宇宙と共に呼吸し共に行じてゐるのであります。かくて吾々が最もよく實踐せんとすれば、一事一物に向つて切り離されたものとして對し、亦個我としての自己中心に動いてはならない即ち所謂執著してはならないのであります。それ故に古來「天地と一枚になる」とか、「無念無想」とか、「無念の念」とか「無相の相」とか、「心身を空する」とか「一切を空する」とか、「空々寂々」とか云はれる様な境地が、最も優れた實踐的な立場（無立場的立場）だとされる所以であり、「靜座」とか「無」をよく唱へる禪等が然も機に臨んで變じ活潑潑地に働いて融通無碍なる至上の實踐の境涯である所以であります。これ即ち東洋的な立場でありまして、恐らく人類の到り得又到る可き最高の境地だと信じます。此處迄向上しなくては人生は迷妄であり執著であり、眞の全體的世界觀も具體的な如實な物の認識も不可能なのであります。而してかゝる境地に到る爲には行が不可缺でありまして、それ故に實踐の優位といふことは、唯單に吾々が生きて行く上や價值の上から

だけでなくて、認識の上からも云はれることであります。

### 三 東洋的立場（二）

處で前にも一寸申しました様に、現代人一般は決して抽象を好む觀想的な人間ではありません。主知主義とか偏知主義とか觀念論とか抽象主義とか非難されるのは、唯是迄の學者や教育者の世界の傾向であり、所謂インテリと云はれる一部の人間の病弊なのであります。世間一般の人間は寧ろ動き過ぎる人間であつて、機械を使つて働き、そして結局は機械に使はれてゐるのが現代人の姿なのです。此の點からすればもう少し落付いて考へる様に要望したくなります。而もそれ等の人達に對しても、行とか實踐を求めるとは如何なる意味なのでせうか。

此處でも私は前に觸れた如く、近世以來の所謂西洋流の態度に對して、東洋的立場を強調しなければならぬのです。それは即ち、西洋近世の知識の型はシェーラー等の云つて



ゐる如く支配知でありまして、自然を、そして又人間をも、支配せんとする根本動機から發してゐるのであります。従つて勿論近世科學に基づいた實踐は征服とか支配の形をとるのであります。即ち人は自然と對立し人間同志とも對立して他を自分の生活の都合のいゝ様に利用しようとするのであります。結局廣い意味の利己主義なのです。即ち前述の眺める場合と同じく行ふ場合に於ても自分と相手或は對象を切り離し、相手や對象も亦切れ切れのものとして見做し取扱はんとする。自分自身も又獨りで存在し働く様に考へる。かくて自分獨りで仕事が出来、一切を自分勝手に支配せんとする。かうした態度に對して吾々が優れてゐるとする東洋的實踐と云ふのは、一體的に物を見るのみならず一體的に行するのであります。吾々は自然や人間其他一切萬物を自己と離れた別箇の存在とは見ない。「萬物同根」と云ふ様な語もあります様に宇宙萬物を一生命と見る。従つて吾々の働きも亦天地の働きであり、見るものも見られるものも、働くものも働きかけられるものも別物ではないのであります。故に東洋的實踐とは「天地の生成化育に參する」ことなのであ

ります。決して人間が、まして自分が、創造するのでもなければ、況や征服したり支配したりするものではありません。若しさういふことが出来ると思ふ人があるとすれば、迷妄の甚だしいものであると云はなければなりません。現代人はそんな大それた思ひ上つた事を考へてゐるからこそ、自分の造つた機械に何時の間にか逆に支配され、征服されてゐるのです。

かうした例へば自然に對して吾々人間が對立するといふ立場は、又西洋の神に對しても云へるのであります。ユダヤの世界觀にも表れてゐます様に神と人とは一體的な關係に無い。即ち神は人を造り罰し支配する。愛するとしても直接神が人と一となるのではない。まして人間が神になることは絶対に出来ない。神は絶対であると云つても結局神と人とは二元的である。「衆生本來佛なり」とか「神人合一」とか云ふ様な吾々の神觀とは天地の差がある。その他此の世或は地上と彼の世或は天國とは一つにはならない。「娑婆即寂光土」とか「當所即ち蓮華國」とか「大日本は神國なり」とは到底ならないのであります。



固より科學に基づいた西洋近世文化や機械文明は知識としても實踐としても大なる長所を持つてゐるのでありまして、その爲にこそ歐米のみならずそれを學んだ現代の日本が世界の文化國であり強國であるのです。それ故にこそ我が國が今日教學刷新を行ひつゝ一面に又科學及びその應用の進歩に力を注いでゐるのでありまして、文部省としましても豫算困難の事變下毎年三百萬圓の科學獎勵費を支出し且本年は専門學務局に科學課を新設したのであります。かつては東洋文化の先進國であつた印度や支那が今日の現狀に陥つたのは、この西洋近世文化の攝取をしなかつた點にあることも明白であります。唯此の文化は更に深い地盤の上に綜合され、非常に高い見地から光を與へられないと、人類に幸福を齎すものにはならないのです。これ東洋的立場が求められる所以であります。

が然し此處に非常に重要な問題があるのであります。それは、禪等の「萬法歸一」の「一」に歸つて、そこから特殊な法則を見、個物の理を知り、又「無」や「空」の境地に立つて個々の技術に巧みであればよいであらうか、今日の文化の病弊を救ふ爲には前述の

東洋的實踐の立場に歸ればそれで十分なのであるか、眞の行や實踐は「無」とか「空」の境地に到り得ればよろしいのか等の問題であつて、これは今日吾々が是非明らかにして置かなければならない點なのです。

固より東洋的無は測り知れざる深奥な立場であります。前に私がこれを「無立場的立場」と申しましたのは、これは「立場が無い」と云ふ意味ではなくて「無の立場」とも云ふべき高い深い立場であることを示さうとしたのであります。此の立場は前述の西洋的迷妄から脱却する爲には是非確保しなければならぬ立場なのであります。今日課せられてゐる東洋の使命の最も根本的なものが其處にある様に思はれます。然し此の東洋的無と、而してそれと全く趣を異にせる西洋文化とをその儘直接結び付けることは困難でもあり、又それによつては吾々の求めてゐる實踐や行は得られないのです。即ちまだそれだけでは抽象の域を脱せず、是迄の東洋の缺陷である空虚な無爲に陥るか、或は西洋流の差別に囚はれた我執に墮して、大乘的な實踐には徹しられない。それは何故でありませうか。



吾々は此處で何故に東洋の日本のみが西洋文化の攝取によつて今日の隆盛を來したのみならず又今日世界文化刷新の使命を持つて立上らねばならなかつたかを反省して見ませう。

#### 四 日本的立場

世界無比な日本的なるものは勿論我が國體である、即ち萬世一系の 天皇の無窮にしるしめす國家である。此の國たるや神の産み給ひし國であり、しるしめさるゝ 大君はその神の最も尊き直系にましまして千代萬代に變ることなく、畏れ多くも御心身共に神の御系統を嗣ぎ給ひ、かくて現人神として代々光明と生育を本質とし給ひて一切萬物にその所得しめ給ひ、その生を完からしめ給ふ。而も又此の御恵みに浴する吾等臣民、其の他國土草木一切萬物が又同じ神の産み給ひしものであり、従つて吾等御民のみならず我が國の一木一草一石一塊の土に到る迄神の御末ならざるものなく、それ故にこそ我が國は神國であり、一切の生成發展は 大御稜威によるのであり、而してすべてのものをしてその所を得

しめ給ふ 大御心は廣大無邊にして、その御本質上單に我が國家内に限定されずして廣く世界を光被し給ひつゝあるのでありまして、これ即ち八紘一字の大精神であり聖業なのであります。

かく我が國は神の産み給ひし國であり、又その神の御子孫が無窮に世々しるしめす國であり、一切の生成の力は 大御稜威の働きであるが故に、神と人との對立もなく、人と物との對立もなく、精神と自然との對立もなく、一切の生成が自らはれ、而もそれはすべて神業なのであります。それ故にこそそれは惟神の大道であり、大日本は神國なのであります。而もそれは時空を超越したイデアの世界や地上とかけ離れた天國ではなくて何處迄も此の地上の國であり、而もそれが「中今」といふ言葉によつて表されてゐる如く過去・現在・未來を一貫して即今眼前に無窮の生成發展を遂行してゐるのであります。それ故にこそ我が大日本は、東洋の無の立場に立ちながらも所謂靜寂や虚無に墮せずして現實の世界に具體の國家的・歴史的發展を遂げて止まないものであり、而も一方西洋流の人間本位・



分析本位・利用厚生本位の近代文化を攝り入れても我執に囚はれて個人本位・功利本位に流れる様なことがないのであります。唯然し異國の文化が渡來し、その思想や世界觀に眩惑された時この我が國固有の立場が曖昧になつたことはありましても、我が國民精神はそれを一契機として昂揚し來つたのであります。合理主義的個人主義的功利主義的色彩を帯び殊に我が國體と相容れない禪讓放伐の思想に立つ儒教の影響を受けながらも、その名分論によつて日本固有の君臣の大義が明らかになりましたし、又非現世的隱遁的空寂的にして又個人主義的非實踐的に流れ勝ちな佛教が國民の信仰界を風靡して日本的なる世界觀が覆はるゝことがあつても、結局は佛教特有の無や空の世界觀を攝取して、生死に超越して御國の爲　大君の爲に一切を捧げて行する、眞に實踐的な日本國民の眞面目しんめんめくを發揮したのであります。無の立場に徹して國家的歴史的實踐を行ひ來つたのであります。而して明治以後に於ては古來の東洋文化とは本質的に異なる西洋文化を取り入れつゝも、それを國力發展の素因としたのであります。唯然し西洋文化には東洋固有の文化とは本質的に異なるものがありまして、その點に於てかつて亞細亞大陸の東洋文化が相反するものを含みつつも我が國民精神を培つたのと異なり、極めて危険なものを持つてゐる様に思はれるのであります。此の點に於て吾々は現代特に東洋的な無の立場の復興を強調する必要がある様に思ふのであります。近時禪の修行や禪的な藝道の尊ばれる所以も其處にある様に思ふのであります。而して固よりかゝる徹底的な無の修練とも稱すべき鍛鍊は極めて必要なことであります。それは一朝一夕に達せられるものでなく絶大な氣根と相當の年月を要するものであります。そしてそれは現代人にとつて極めて大切なことであります。唯吾々日本人は世界無比な恵まれた國體に生を享けてゐます爲に、今日如何に所謂西洋的な世界觀の影響を受けたと申しましても、あらゆる層の國民が一致して何の困難もなく謂はゞ無雜作に日本的な立場に歸り得るのであります。それは何かと申せば、神宮や宮城の遙拜でありまして、吾々日本國民は假令ラヂオを通して合圖されただけでも全國民が、貴賤男女老若を問はず一舉にして億兆一心、「日本的無」とも申すべき境地に歸一する事が出来るのであ

るものがありまして、その點に於てかつて亞細亞大陸の東洋文化が相反するものを含みつつも我が國民精神を培つたのと異なり、極めて危険なものを持つてゐる様に思はれるのであります。此の點に於て吾々は現代特に東洋的な無の立場の復興を強調する必要がある様に思ふのであります。近時禪の修行や禪的な藝道の尊ばれる所以も其處にある様に思ふのであります。而して固よりかゝる徹底的な無の修練とも稱すべき鍛鍊は極めて必要なことであります。それは一朝一夕に達せられるものでなく絶大な氣根と相當の年月を要するものであります。そしてそれは現代人にとつて極めて大切なことであります。唯吾々日本人は世界無比な恵まれた國體に生を享けてゐます爲に、今日如何に所謂西洋的な世界觀の影響を受けたと申しましても、あらゆる層の國民が一致して何の困難もなく謂はゞ無雜作に日本的な立場に歸り得るのであります。それは何かと申せば、神宮や宮城の遙拜でありまして、吾々日本國民は假令ラヂオを通して合圖されただけでも全國民が、貴賤男女老若を問はず一舉にして億兆一心、「日本的無」とも申すべき境地に歸一する事が出来るのであ



りまして、これは又縦にも悠久の神代以來の吾々の祖先の心と一になるのであります。國體・日本精神の自覺に立つた今日、吾々が一致して事を成さんとする時、國旗の掲揚や宮城遙拜の行事から先づ始められることは實に意味深きことであり、而も吾々には實に自然な日常の事として而も極めて嚴肅に行はれるのであります。此處に吾々日本人の優れた立場があるのであります。唯吾々の精進すべきことは、この行を單に式の際とか一朝事ある時だけではなくて、日々の行住坐臥、各自の身分職業に應じて行すべきでありまして、鐵を握るにも算盤を撥じくにも機械を廻すにもペンを執るにも、常に此の境地に於てなすべきであります。吾々の教育も吾々の修養も常にかゝる立場に立つて働き得る様に心身を修煉することの外にはない譯です。これ即ち「皇國民の鍊成」であり、かくて各人各、自己の分に立つて皇運を扶翼し奉る、これを日本的行の立場と申しませう。かゝる立場は西洋の立場では勿論、所謂東洋の立場でも、容易に理解し難いのでありまして、ましてその實踐は到底思ひもよらぬことであります。

## 五 實踐の場

前節に於て吾々は、東洋的無の立場に歸りつゝ西洋的有の世界に生きる、即ち平等に徹しつゝ差別の諸相に即應して行することの必要を考へ、而もそれが具體的に行はれる爲には國家的・歴史的立場が必要であることを説き、其處に日本の優れたる行の立場があることを述べ來つたのでありますが、然し眞に此の立場に國民全體が一體になつて實踐する爲には、尙各種の協同社會の立場が必要です。即ち個人は國家に於て生き、國家の歴史に於て行するのではあります、其の際、個人は何等の媒介なしに直接に國家やその歴史と一體になることは出来ないであります。即ち其處に各種の協同生活の段階が必要なのであります、此の點に於ても、近世の西洋の見方は觀念的でありまして、個人主義の對立として人類主義が唱へられ、又は階級を勞資二階級に抽象化して而もその對立闘争から遂にプロレタリア獨裁の社會を空想したのであります。今日歐洲に於て國家主義・民族



主義・全體主義が提唱されますのは、かゝる抽象主義の病弊から脱しようとしてゐるのであります。然し眞の具體的な全體、眞の一體的な國家として生きる爲には、更に有機的な組織が必要なのであります。此の點吾々の人格に頭や胴や手足があつてそれが心身一體的に働くことが必要なのと同様であります。近時教育方面に於ても、家庭教育とか郷土教育とか或は學校の生活化とか其の他各種團體の訓練が重要視されて來ましたのも、眞に國家的な實踐的な人物を養成するには、もつと教育を社會化しなければならぬことが自覺されて來たからであります。

其の際、見落してはならないのは、かゝる社會に於ける時間的な統一、傳統的な精神の一貫性であります。即ち吾々は家庭や學校は勿論郷土に於ても其の他各種の團體に於てもそれ〴〵その傳統的精神即ち吾々の祖先や先輩の遺業の尊重繼承が必要なのであります。これなくしては健全なる社會や國家や文化の發展向上は望めないであります。即ち吾々は吾々の祖先や先輩の遺訓を體し、その心を心として、これを後世に榮えしめることに心

掛けねばなりません。此の點に置きましても近世の社會は、進歩や變遷が目まぐるしかつた爲に、又個人主義・自由主義の思潮が盛であつた爲に甚だ輕薄であつた様であります。これは即ち時間的な一體性、歴史の意味を理解しない生き方であつた譯です。此の點に於ても今日根本的な反省刷新が必要なのであります。教育を實踐化するといふ場合に於ても此の點に大いに考ふべき問題がある様に思はれます。今日躰が重んぜられ禮儀が尊ばれ、隨順の徳や和の精神が強調されますのも、郷土の神社中心の生活が重んぜられたり學校の行事が重要視されますのも同じ精神の現れだと思ひます。要するに各種の協同社會の傳統に生きて而もそれ等をあらしめてゐる地盤とも云ふべく、それ等の歸一點とも云ふべき國家及びその歴史に生きることが大切でありまして、此の點に於ても我が國には非常に優れた組織が存在して居たと云へませう。今日五人組制度等がやかましく云はれるのもその爲でありませう。何れにしても眞に日本的實踐がよく行はれます爲には、此の點に就いての國民の一層の組織化と修鍊が必要であります。問題を教育に限つて考へて見ましても、唯



教室で観念的な知識の授受だけを行つてゐたのでは実践的な人間は養はれないのでありまして、周囲の社會の生活と一體となり、又師弟及び學校全體が一つとなつて生きなければならぬのであります。寮や塾や農場等の合宿生活が教育として最も基礎的な役割を演ずることが認められて來たことは慥に刷新的な喜ぶべき傾向であります。

## 第二講 實踐の世界(二)

### 六 心身一體

人間の生活や行や實踐が重んぜられる時當然その身體が重んぜられます。歩くには足を以てし仕事するには手を以てします。勿論行ふものは人間の精神であります。身體なき精神は實踐的精神ではありません。人間は思惟し理解するにしても身體を以てします。「頭で考へる」「胸に手を當てて考へる」とか「呑込む」とか「腹に遣入つた」とかいふ様な通俗的な表現にもその間の消息がよく窺はれます。然るに観念的抽象的な主知主義は、理性は身體なくして思惟し、身體は理性、否精神一般の牢獄であるかの如くに考へて來ました。従つて思惟するにしましても全心身を打込んで考へるといふ様な實踐性即ち行とし





ての思惟ではなくなつて、所謂觀念の遊戲、議論の爲の議論、空理空論となり、人間の具體的な精神を高め日常の生活を向上せしめる事と縁のない所謂「學問の爲の學問」に墮落したのであります。此の點に於て近時身體性が問題になり高く評價される様になつて來たのは、世間一般殊に是迄流の知性尊重者が考へる様な皮相な問題ではありません。固より今日教育一般に互り、初等・中等教育は勿論、高等・専門・大學教育に於ても、體育、否身體の鍛錬が強調されるに到つた直接の原因は國民體位の低下にあるには違ひありませんが、然し身體の鍛錬の問題はもつと根本的な精神的な人格的な問題であります。そしてそれは認識の問題、知性の問題にも根本的な關聯があるのです。即ち眞に一體的な具體的な認識、眞に實踐的な知性、眞に人間生活を高める様な智慧は、身體から遊離した單なる觀念的なものではありません。それは身を以て考へられ身を以て實證される知識です。それ故にそれは所謂主知主義的な態度では徹することの出來ない知です。今日知行合一が唱へられるのもその爲でありまして、教學刷新の立場に於て求められてゐる東洋的な學問や教育の特

長は正にそこにあり、觀念的な西洋の學問に深さと生命とを與へる爲には此の點に就いての徹底的な反省が必要なのであります。古來東洋殊に日本に於て教へ學ぶ場合に日常の生活が最も重視されたのはこの爲であり、それ故に吾々の祖先は儒學にしろ武道にしろ佛學にしろ、其の他一技一藝に到る迄、その神髓を傳授せんとする時、その日常生活が極めて大切でありまして、精進潔齋即ち「身」を淨めてかゝつたのでありまして、それは直ちに同時に「心」を淨めることであつた譯です。そして又その學び得たものも日常の生活即ち「身」の持ち方こなし方に現れて來なければ眞に知つた解つたとは云へないのであります。即ち體得しなければなりません。即ち徳は得なりで身に付かなければならず、即ち學徳圓滿でなければならなかつたのであります。かくなければ「學者」ではなかつた譯です。それが如何に今日の所謂「學者」とその性格その在り方に於て異なつて居るかは、殊に吾々日本人には明らかであり、眞に尊敬されるのはどの種の學者であるかも明白であらうと思ふのであります。



要するに具體的な生きた眞理は身を以て學び身を以て證すべきであります。即ち知る爲、學ぶ爲にも行は不可欠な方法であります。知的であり形而上學的であり理論的體系に於ても優れてゐる佛教等に於きましても、戒定慧の三學が必要であり、而も慧に徹する爲に戒と定とが極めてやかましく學び行ぜられねばならなかつたのだと思ひます。六祖大師法寶壇經の定慧第四には「我此法門以定慧爲本。大衆勿迷言定慧別。定慧一體不二。定是慧體。慧是定用」とさへ言つてあります。今日かうした根本の問題、根本の態度を忘れて東洋の學問を研究することには大きな疑問があるのであります。忌憚なく云へば邪道であります。而もその邪道を最も批判的な學的態度と考へるに到つては、迷妄の甚だしいものと云はねばなりません。知識に於て既に然りでありますから、まして實踐に於ては行的に鍛へなければ融通無碍に活潑潑地に働く様にはなれません。そしてその鍛へ方は既述の如く無的宗教的な立場に歸り、そして又國家的歴史的な地盤に於てなさるべきは勿論であります。眞に具體的な生きた實踐人即ち人物を養ひます爲には、心身一體として

の身體を整へ正し鍛錬する必要があります。國民鍊成が問題となる時、國民精神の昂揚が問題となる時、身體の鍛錬が強調されるのは當然と云はねばなりません。此の意味に於ての體力尊重の精神が教育界にもつと徹底すれば、入學試験の問題等も刷新の線に従つて、もつと心を一にして解決出来るのではないかと思ひます。

然るに主知主義と實證主義は此の點に於ても抽象に陥つて、その代表的なものを一二擧げて見ましても、近世主知主義の祖であり代表者であるあの有名なデカルトの様な優れた思想家でさへも精神と身體を切り離した結果は、結局心身を無關係にすることは具體的生活に於て許されない爲に、兩者の關係する場所を腦の一部松果腺に置く様な見地に等しい考へ方をしなければならなくなつたのでありますし、一方又現代の醫學等に於て人間を肉體の方面よりのみ觀察し且取扱つて、従つて精神によつて生きる具體的人間の病氣の治療が出来なくなり、又醫者其の者も精神的修養に缺けて心身一體としての人間を醫する事が出来なくなり、その爲に非科學的邪教の跋扈する一因をなしてゐる有様です。實踐理性



の優位を唱へたカントさへも肉體の慾望、一般的に云へば感性を理性と對立させて、而も惡の原理と見てゐる點は、やはりギリシヤやユダヤ以來の主知主義的・二元論的偏見を脱することが出来なかつたのであります。そしてかゝる思想傾向は我が國の現代の學界・教育界をも依然として支配してゐるのであります。然し具體の世界に於ては身體を離れた精神とか手足の働きと絶縁した文化等と云ふものはあり得ません。従つて常識的な直觀に於て擱める眞理即ち「健全なる精神は健全なる身體に宿る」と云ふことは、逆に又「健全なる精神無くして健全なる身體なし」とも云へるのであります。心身二者は相即不離であつて、觀念的な抽象的な分析をなさない限りこれを切り離すことは出来ないものであります。恰も立派な花を咲かせ充實した實を結ばせる爲には莖や幹を榮えしめねばならぬと同様であります。人或は特別な例を擧げて身體は虚弱でも優れた學者や天才があるではないかと云ふかも知れませんが、そして特別な例外的な現象はあるかも知れませんが、然しそれはやはり身體なくして生きて働く精神の存在の證明にならないことは勿論、病弱な身體

は病弱な精神の働きを爲す事の反駁にもならないと思ひます。まして民族や國民の精神、具體的精神が存續發展し活動する爲には民族や國民の生命が絶對に必要であり、従つて各人の健全な身體は缺くべからざる大切なものであることは自明なことであります。又假に精神の特殊な一能力に於て優れた者があつたとしましても、實踐の領域になれば病身では何も出来ないのですし、偏知教育の犠牲として多病な才子が多いのを見、青い顔の無能力な理窟ばかり云ふインテリを見る時、これ等の青年がもつと身體的に鍛へられたならば、國家の御用に立ち、又優れた文化活動も出来るだらうにと残念に思はれるのです。

右の様に申せば誰でもそんなことは分り切つてゐると云ふに違ひないのですけれども、實際に當つて見ますと、青少年の教育に従事してゐられる人達でも案外それが分つて居らないのであります。是迄試験地獄と云はれる様な準備教育が行はれ、又大學生諸君の中には身體の鍛鍊處か不攝生極まる生活を續けて、それで大いに修學してゐると信じてゐる有様です。そののみならず例へば最も教育的に研究されて模範的な教育が行はれてゐると



云ふ有名な附屬小學校等を見ましても、先づ第一は姿勢が悪いこと驚くばかりで、給食等もカロリーとか栄養とかいふ様な點では大いに研究してあつても、それを戴く心身の態度が全くなつて居らない場合が多いのです。又一方中等學校以上になると晝食の栄養價等は考へて見たことすらない學校が多い。これで 陛下の赤子たる將來の國民を教育してゐると云へませうか。一般に厚生施設と云へば精神を忘れ、精神と云へば厚生方面を没却する。よく／＼抽象の亡靈に取つ憑かれたものです。一寸度し難いといふ憾さへ致します。

尙抽象的な精神が外へ表れますと粗雑な言葉となり、亂雑なだらしない身なりとなり、不作法な舉動となります。かゝることは誰でも分つてゐることなのですけれども、今日最高の學府に學んで最も教養あり將來文化の指導者となるべき學生諸君を見ても、又人の師と仰がれ國民鍊成をその職としてゐられる小學校や中學校の先生のみならず校長さん方の生活振り身の持ち方を見ても、姿勢も悪ければ御飯の戴き方一つ出来ない人が相當に多い様です。そしてそれは精神の根本に關する問題であることに氣付かない。それでゐて教養

があるとされてゐる。それが更に上級の學校になると益々甚だしくなる傾向がある。一體高等とか上級とか云ふことは精神の高さを表す言葉ではないのでせうか。大學の先生や學生ともなれば人格に於ても國民的行に於ても世の手本とならなければならぬ筈です。唯概念を讀んだり喋つたり書いたり出来るといふことは、人間の教養にはならず、精神が高いことにはなりません。かうした分り切つた事に對する反省もまだ不徹底の様です。

精神が眞に具體的に養はれ向上すれば、それが身體に於て表れ働くことは勿論ですが、それは更にその周圍その延長に於て表れ働きます。それ故に精神は住居や持ち物に表れ、道具や機械に於て働く。道具を「手足の如く」處か「手足として」、更に「魂として」、大切に自在に使ひ得る人こそ眞の實踐人です。「手腕がある」とか「腕利き」だとか「遣り手」であるとか云ふ表現はその人の精神の働く範圍の廣さに関係がある様です。かくて實踐の世界に於ては殊に物心一如です。かうした精神も現在の觀念的抽象的な修學や教育では實に迂濶千萬に取扱はれてゐます。今一々の實例を擧げる暇がありませんが、心が如何



に身や物に表れ又逆に物や身の在り方が如何に心を規定するか、お互に此の點嚴密に具體的に反省する必要があります。要するに吾々は天地と一體となり、國家の行を行として生き働くのでありますが、その際、心身一體の境地に立つて無心に三昧に道具や機械を手足として働かす修練が必要でありまして、國民鍊成と申す場合も此の點を十分に明らかにしてかゝらねばならないと思ひます。尙國運の發展と科學教育の振興の問題等も此の點から考へて見なければなりません。

身體性が問題となるのは、更に個人主義の立場に對する批判が含まれてゐる事を忘れてはならないのでありまして、此の點は一見矛盾してゐる様に見えますから最後に一言付け加へて置きます。即ち普通に身體と云へば個人の立場の様に理解され易いと思はれますが、それも抽象的な考へ方でありまして、身體髮膚これを父母に受けたのであり、吾々の身體は祖先の身體であり、吾々の血潮は祖先の血潮であり、日本人の血である。爪の先から毛一本に到る迄日本人であり神の末であり公のものであつて、一として個人だけのものはな

いのです。そしてそれが國家の歴史的行を遂行して行く主體なのです。要するに各自の身體に於て國家の精神・民族の生命が最も具體的に表れ働くのであります。それが實踐の立場であり、國民教育に於て身體性が強調されその鍛鍊が肝要な所以であります。それ故にこそ吾々は身を持ち崩したり身を輕んじてはならないのは勿論のこと、個人々々の身體を個々に鍛鍊するに止まらず、團體訓練が絶対に必要なのでありまして、所謂「足竝を揃へる」ことが肝要であります。その際、歩調を合せるといふことは身體の問題であることは勿論であります。それが同時に又根本的には、國民精神の問題であり、國家の體制全體の問題であります。是等の諸點を十分考慮に入れての國民の鍛鍊が必要なのであります。

## 七 物心一如

心身一體の立場が失はれる位ですから、まして物心一如の見地に到つては現代人に縁遠いのであります。然し既述の如き一體觀及び前述の心身一體の境地に生き得れば、當然吾



吾の到り得且徹しなければならぬのは物心一如觀であります。實踐の立場、心身一體の立場からの物心一如性には既に觸れましたからそれ以上立入らないこととして、此處には宇宙一體觀に立つて今少し一般的に物心一如に就いて附言して置きます。即ち東洋的「無」或は「一」の立場からも日本の神話に表れた世界觀から見ましても、萬物一であり一切は神の末でないものはありません。即ち「悉有佛性」であり「大日本は神國なり」であります。もつと親切に言へば「佛でない山川草木なく」又「山川草木でない佛なく」、「神でない山川草木なく」又「山川草木でない神はない」のであります。故に曰く「庭前之柏樹子」であり、「凡そ此世中の事は、春秋のゆきかはり、雨ふり風ふくたぐひ、又國のうへ人のうへの吉凶キキアツシき萬事みなことごとくに神の御所爲ミソトツダ」(本居宣長 直毘靈)であります。二宮尊徳翁は「世界、人は勿論、禽獸蟲魚草木に至るまで、凡天地の間に、生々する物は、皆天の分身と云べし、……佛道にては、悉皆成佛と説り、我國は神國なり、悉皆成神と云べし、……生前佛にて、死して佛と成り、生前神にして、死して神なり」(二宮翁夜話)と曰はれ、

又「世の中は草木もともに神にこそ死して命のありかをぞしれ」とよまれてゐる。これ一體觀に立つた物心一如觀です。處が所謂資本主義は物を物として豊富に生産し贅澤に消費する習慣を國民に滲透させたのであります。此の點からも國民の物の見方取扱ひ方を非常に唯物的に墮落させたのであります。そのみならず精神的に物を見、物の精神的見方を養成しなければならぬ教育者さへも同じ傾向に墮してゐると見なければならず、最も精神的指導をなしてゐると云はれる小學校でさへも、物の取扱ひ方が極めて亂雑であり、教科書其他學用品の取扱ひ方から實驗や手工や作業の道具に對する態度迄が一向に教養されて居りません。即ち現代人は分析して物を見る様子のみに育てられた結果、物の理を究めたつもりで實は物を殺し物の生命も本質も見失つて了つた觀がありまして、従つて物質は物質としてのみ見且取扱つて、吾々の心とか精神とかとは別な縁のないものとするのみならず、具體的な物を空虚な心や抽象的な觀念よりも輕んじ蔑視するかと思へば物に心を奪はれて物の法則に支配される。何れも東洋の心や日本精神とは縁の遠い心の持ち方であ



ります。かくては一切萬物をしてその處を得しめ給はんとする。大御心に副ひ奉り、八紘を宇と爲し給ふ皇運を扶翼し奉る事は出来ないのであります。吾々はもつと物に即して心を鍊り、物の世界に心を生かさなければなりません。「隨其心淨。則佛土淨」(維摩經、佛國品第一)。心を養つてこそ吾々は物の眞に徹することが出来るのであります。かうした心に立つてこそ吾々は眞の新秩序を建設し日本精神を以て世界を光被することが出来るのであります。處が物を粗末にする心は又人を粗末にし、否、それ處か自己自身の體を粗末にし心を粗末にするのです。さうした態度では「衆生濟度」とか「以慈眼視衆生」とかとは正反對に「殺生」ばかりしてゐる淺ましい有様です。最近物資の缺乏から物を大切にすることが唱へられてゐますが、然しその根本精神を覗いて見ますと、前述の様な心を大切にするとか、宇宙一體とか萬物同根とか云ふ様な徹底した世界觀に歸つたのではなくて、物を物として粗末にし浪費したその同じ立場に立つてゐるのを見るのであります。これでは物資が豊かになれば又物を粗末にし浪費するに違ひありません。それでは衆生の

恩に感泣したり、滾々と湧いて盡きざる泉の邊ほとりに住んで水に不自由することなくして而も水一滴も粗末にしない佛者の生活振り等とは、雲泥の差があることを三省する必要がある。まして、吾々の祖先は眼に一丁字無き一介の百姓と雖も、一粒のお米をも「勿體ない」として大切にし、粗末にしては「罰が當る」と信じて生活したのを思ふ時、頭が下るのであります。

## 八 精神の一如

廣く放つた吾々の考察を更に吾々の心の問題に轉じて見ませう。すると此處に於ても分析的抽象的思惟は一つの心一つの精神を、例へば知情意に分析し、又それに基づいて知情意をばら／＼に教育する。さうした結果は精神を弱めるか殺す結果になります。固より吾々の心には知・情・意と名付けられ得る様な特色をもつた作用があることは事實であり、従つてそれをそれ／＼別箇に考察し又養育することも必要でありませうが、唯それは便宜上



の問題でありまして、實際に於て知情意三者が別々に存在し、その三者が集つて一つの心をなしてゐるのでないことは自明なことでありませう。處が具體的な人間を相手とし具體的な心を教育してゐる筈の教育者自身が、方便上分けた知情意を何時しか別々に取扱つて、知育とか情操の陶冶とか意志の鍛鍊とかを別々にやつたり又はその何れかを偏重して他を顧みない。これでは精神の一貫した人格、三昧境に入つて働く眞の實踐人は養はれないのでありまして、現代の青年は、或は知性が發達して理論に優れて居り、或は情操が洗煉されて繪畫や音樂に通じ又巧みであり、又相當に我慾が盛な恣意の強い者にも必ずしも事缺かないが、その何れかに偏したり、又は人格としての統一を缺いて、従つて實踐力ある人物に乏しいのみならず、又人格の根柢が缺けてゐるが爲に、即ち精神が一として鍛へ養はれて居らず、又各個の人格が民族や國家の精神に歸一し、更に深く全く己を空しくした境地に立つてゐない爲に、知情意各々の働きも淺く小さくか弱い。従つて小才が利き我を張ることはしても、偉大な文化を産み出したり、首が飛んでも節を曲げない様な頼むに足る

人物が見當らない。これが現代人の、殊に教養ありと自他共に任ずる人間の通弊であります。これ皆、心身を切り離した上更に又知情意を分離させた結果であります。然るに本來心身一體であると共に知情意即ち心は一である。それをその様に養ひ鍛へなければ、「心は萬境に従つて轉ず。轉處實によく幽なり」といふ様に生きて働かないのであります。それ故に古來精神を學び精神を修め而して人の師として人物を養成した眞の學者教育者は、その學問や研究や教育に於て常に全心を以て學び全心を以て教へたのであります。一例として吉田松陰先生の教育振りを「松下村塾零話」によつて舉げて見ますと、「先生門人に書を授くるに當り、忠臣孝子、身を殺し、節に殉ずる等の事に至るときは、滿眼涙を含み、聲を顫し、甚だしきは、熱淚點々書に滴るに至る。是を以て門人も自ら感動して流涕するに至る。又逆臣君を寤ますが如きに至れば、目眦裂け、聲大にして怒髮逆立するもの如し、弟子亦自ら之を惡むの情を發す」とありまして、これこそ明々白々たる生きた識見であり、正に全心身を以てする教育でありまして、吾々が具體的な精神を學び、生きた精神を教へ



る態度そのものであります。これ實に全心を以て學び全心を以て教へるものであり、それは必ず又既述の如く全心身を以て學び全心身を以て教ふる態度となります。これこそ眞の實學であります。眞理を學ばんとするものは先づそれを敬し、學ぶには何處迄も明らかならん事を期し、學んでは何處迄もそれを實行せんことを期するのであります。而して敬するが故に居を改め襟を正しますし、又明を期するが故に躬行に於て實證せんとするのであります。即ち知情意一となつて學び、更に心身一となつて學ぶのであり、従つて又それ等が教へる態度であります。かくてこそ學ぶことも教へることも行であり生活であります。即ち知行合一であり學徳は又一であります。これが東洋的殊に日本的な教學の立場であります。

此處で吾々は、主として心の働きの方向に向けて居た眼を放つて、心の所産の方を眺めて見ませう。するとこの方面に於ても現代人はやはり分裂に陥り抽象に墮してゐる事に氣付くのであります。即ち現代の文化が如何にばら／＼であり、従つて又如何に片輪な薄つて

らなものであるかに驚かざるを得ません。即ち廣く文化の領域を眺め渡して見ますと、宗教・道徳・政治・經濟・軍事・學問・教育・藝術等が何れも分離し抽象化致しまして、例へば宗教は政治・經濟と遊離し、政治や經濟は又宗教や道徳と縁がなくなり、遂には彼は政治家だから或は商賣人だから宗教や道徳に反してもかまはないと殆ど公然と許されるに到りました。藝術家は藝術家でそれ／＼専門の技巧の出来ることのみが尊ばれ、藝術家と云へば人倫の道に反し國民道徳を破壊し社會の醇風美俗や家族制度等を亂しても咎められず、却つてそれだけ天才であるかの如くに崇められる傾向さへあつた様です。學者の場合に於ても同様でありまして、唯理論や體系のみが尊ばれまして、遂には身教職にあり且國家の高い官吏であることすら忘れた大學教授があり、而もそれが人氣がある様な事も皆無ではなかつたのです。かくては健全な文化でないことは勿論、高い文化として後世に残る様な優秀さもあり得ないのであります。即ち低級な文化であります。而もさうした文化を至上の價値と考へ、文化至上主義を謳歌して自分の國家が亡びようと自分自身が蝕まれよ



うとおかまひなしと云ふ驚くべき文化人教養人が輩出したのであります。「祭政一致」や「祭政一致」が唱へられますのも、此の點に於て我が國古來よりの健全な常道に歸らねばならないことに對する反省なのです。これは單なる反動でもなければ又單に昔の單純さに返さうとするのでもありません。固より今日の如く分化發達した文化を神代の昔に返すことは出来ない相談です。然し現在の様な根柢のない文化の爲の文化、殊に分裂してつた文化は、人類や國民を養ふことも出来なければ、ましてそれが人類や國民の存在や活動の究極目的だと斷ずることは出来ません。

かゝる墮落した文化を救ふ爲にはこれに地盤と統一を與へる必要があるのであります。その爲には宗教が根柢に位しなければならず、それも國民的生命に基づいた一貫した活動として營まれなければなりません。教育に於きましても、宗教的情操が尊重され、國體に基づくべきことが主張され、國民精神の發揚が叫ばれますのは皆かゝる意味に於てでありまして、これは獨り國民教育の問題だけではなくて、文化一般即ち宗教・道徳・

政治・經濟・軍事・學問・藝術等一切がかゝる意味に於て刷新され結合されねばならないのであります。文部省が昭和十一年九月八日日本諸學振興委員會を設け、教育學・哲學・國語國文學・歴史學・經濟學・藝術學・法學等の諸學會を開催して來ましたのも、右の如き精神に立つて居るのであります。明年から實施される國民學校に於ける教科の統合にも、又綜合大學に於ける綜合の精神が近頃強調されますのにも、すべて唯單に兒童の精神を統合的に教育するとか、大學生に総合的教養を與へるとかだけの問題ではなくて、もつと根本的な大きな問題が含まれてゐる様に思はれます。そしてそれは現代文化の病弊を救済する爲のみならず、將來創造さるべき新文化を健全に成長させる爲に極めて重大な問題だと思ふのであります。

### 九 日々是好日

心身が分離し對立し、精神の諸作用が分裂跛行し、又精神が創造し關與し從事する對象



の世界、文化の世界が統一を缺き相矛盾する結果、吾々の日々の生活はその目標に於てその活動に於て一貫性を失ひ、爲に今日の仕事と明日の仕事に精神生命の生きて通ふものがなく、各自の分擔せる仕事に有機的な血の通ふ様な聯關がない。従つて肉體の仕事には精神が悦ばず、精神の活動には肉體が従はない。又、昨日の仕事は今日に發展せず、今日の仕事は明日の日を待望しない。所謂「お座なり」となる。又自分の仕事は他人の仕事や全體の仕事と切つても切れぬ生きた繋がりにある事を忘れるが故に、出来るだけ城壁を設けて自分の仕事を最小限度に限り、出来るだけ要領よく纏め上げる、所謂「骨惜しみ」をする。所謂使用人根性である。かくては心身の調和も精神の調和も社會國家全體の調和もなく、従つて幸福もなく樂しみもない。何處に大和の姿があるでせう。かくて来る日も来る日も不平と不満と倦怠の連續である。と云ふよりも寧ろ切れ／＼の「その日暮し」である。趙州の所謂「日々是好日」(碧巖集第六則)どころの騒ぎではありません。それ故に自分の仕事自分の職業は給料を得る爲の手段に過ぎず、學生生活と雖も學業はかゝる手段獲得の

又一手段に過ぎなくあります。それ故にそれは苦痛であり、従つてそれは出来るだけ胸口に切り抜けて、即ち骨身を惜しんで最小限度の勞力に止めて、他に出来るだけ樂しみを求めんとする。仕事と樂しみが一でなくて、仕事は仕事、娛樂は娛樂と別々となる。さうして娛樂が大きな問題となる。固より疲勞を醫し精神を淨め高める様な音樂其の他の娛樂は、人生に於ては勿論、學校生活にも必要であり、従つて又もつと眞劔に批判し指導し、獎勵し施設しなければならぬに違ひありませんが、然し現代の様に仕事と娛樂とは全く範疇を異にした或點相反する性質のもの様に考へられ取扱はれるのは邪道であります。學校に於て、殊に精神が發達し専門の研究に従事すべき大學生活に於て、娛樂機關の問題がどうかすると第一に取上げられ、而もそれが不備であることを以て、學生が然も非常時下喫茶店や麻雀や撞球場其の他民衆娛樂機關に走ることに辯護となすが如きは、大學や高等専門學校の學生生活として此の上もない侮辱であり大いに耻づべきことであります。眞に専門人であり、學業に勤しみ研究に身を委ねる學徒であるならば、學問研究そのものの



中に心身を没入して、所謂寢食すら忘れて、三昧境に楽しみさへも忘れなければならぬ筈です。名利や肉體的な官能本位の娛樂等を超越して、精神に生き道を楽しみ、各自の分を守つて國家の歴史的行に参加することを無上の愉悅とする底の人でなければ、大學生とか高等の教育を受けた教養ある人とか云ふことは出来ずまい。此の點に於て學徒たるものはもつと謙虛な心と同時に高い矜持を保たねばなりません。一般國民を鍊成する場合も同様でありまして、東亞の盟主として東洋の心を以て新秩序を建設し新文化を創造すべき皇國民を鍛鍊し育成するのでありますから、日々の各自の職業を通して皇運を扶翼し奉ることを無上の光榮と感じ且至上の喜びとし楽しみとする根本精神を養成することが最も肝要であります。人或はそれは夢の様な理想であつて現實には到底望めないと云ふかも知れませんが、これこそ日本人に課せられた使命であり、國民鍊成を主眼とする今後の我が國教育の根本方針である筈ですし、又學校及び社會の教育を此の根本方針に立つて絶えず生活的に行的に鍛へて行けば、今日の主知主義的・個人主義的・自由主義的な觀念の教育では

不可能な事も、必ずや貫徹出來ると信じなければなりません。

以上のことは又人を使ふ立場の人も亦教育に従事する人も同様に心得て置かねばならぬことでありまして、今日吾々が根柢から考へ直してかゝらねばならないことは労働や職業の意味であります。個人主義・功利主義に立つて、出來るだけ少い勞力で出來るだけの所得を得、又出來るだけ少く支拂つて出來るだけ多く働かさうと云ふ様な觀念を一掃しなければならぬのであります。使ふ者も使はれる者も唯々 大君の爲國家の爲に仕へまつる心掛けで働かねばならぬ筈です。それが日本人であり皇國民であります。かくて「使ふ」のではなくて「使はせて戴く」のであり、「使はれる」のではなくて「使つて戴く」のであり、結局「皇運を扶翼させて戴く」事に歸するのであります。行住坐臥一切の生活が此處より營まれ、此處に歸一する人間を作るのが我が國の教育であり、その境涯が淨く高くそして専門的な知識技能に於て行はれる人こそ高等の教育を受けて高い教養のある指導的人物なのであります。大學や高等専門學校の刷新も此の線に沿つて行はるべきであり、



其の點國民學校の精神の徹底化専門化に過ぎません。此の地盤を忘れて上級の教育が行はれる時、學問や教育は國家や國史と遊離し抽象に墮して、進めば進む程國家を危くし國民を不幸にし、文化そのものをも墮落させ殺して了ふ結果を將來します。高等の教育を受け専門の研究に従事する人は此の點一度徹底的な反省をする必要に迫られてゐるのであります。

### 一〇 新科學精神

前々節に於て吾々は文化の統合の問題に觸れましたが、それは私は道德や宗教の層から統合されねばならぬと存じます。それは祭政一致とか祭政教一致とか云ふ端的な表現によつても示唆されてゐると存じます。然し此處では私はそれ等の問題に立入ることは略しますが、唯此處で今日問題になつてゐる科學に就いて若干考察して置くことは極めて必要であると存じます。

さて近世科學の精神は世界を支配せんとするにあり、従つてそれは支配知であると謂はれます。即ち科學は各對象領域の理法を知る事によつて、それ／＼の領域の事象を豫知し豫測し豫定する事が出來ます。従つてそれ等を支配する事も或點迄出來る譯です。勿論吾々の立場は既述の如く支配するのではなく隨順するものであり、對立し敵視し鬭争するのではなくて歸一し親和し參與するものでありますが、併し世界や自然に隨順しその生成發展化育に參する爲には、吾々は世界の各領野、各事象の構造や理法をよく知らなければならぬのです。此の意味に於て吾々が既述の如く實踐する爲には、科學的な認識、科學的な研究、科學的な把握が必要であると申さなければなりません。即ち吾々は自然界の理法のみならず人間界のあらゆる領域の理法、従つて自然科學のみならず社會科學其の他人文科學一般、従つて歴史學も政治學も經濟學も教育學も生理學も心理學も、一般に科學的な人間學も極めて必要なのであります。それ故にこそ、肇國以來繼承し恢弘し來つた日本の大使命、即ち東亞の新秩序を建設し、八紘一字を實現せんとする世界史的課題の遂行が現實の



切實な問題となつた今日、科學の振興或は日本科學の樹立が焦眉の問題となり來つたのであります。要するに自己を知り對象を知りそれ等の關係を知り、而もそれ等を精密に知らなければ、正しき對處や實踐による創造は期し難いのであります。唯その場合分別知に囚はれて分析に墮し差別の相に偏り執著し頑なになり思ひ揚り、或は抽象的な一般的な理論に走つて現實や實用を蔑視してはならないのであります。何處迄も素直に敬虔に如實に物を觀、我を張らずその理に隨順し、無私な謙虛な誠實な心持を養つて行かなければならないと思ひます。即ち科學と道德や宗教が一體となり、科學によつて知性が、精神が磨かれ、科學によつて實踐が廣められ深められ精密になり、皇國の道が愈々周到に行ぜられ、萬物愈々その所を得その生を完うし彌榮えに榮え行かなければならないのであります。その爲には是迄の様に見る者と見られる者が分離し無縁となり、世界が種々な領域に分析され孤立されたり又無差別な惡平等に抽象されてはならないのであります。何處迄も本來一體的な生命の通へる全體として直觀され體認され、その種々の領域の相として理法と

して認識され判断されねばならないのであります。そしてそれは何處迄も日本精神の働きとして行ぜられ、それによつて八紘一字の大理想が精密に確實に實現され、かくて皇運扶翼が如實に的確に確實に遂行されねばなりません。かくてこそ日本精神の働きとしての科學精神であります。吾々が今日刷新振興を要望してゐる科學の性格は以上の如きものであります。これ即ち科學の日本化であり、此處に到つて科學により衆生は濟度され、西洋文化の東洋精神による刷新が行はれる譯であり、かくて又吾々は西洋に對して明治以來受けたる恩恵に酬ゆることも出来るのであります。そしてこれこそ行としての科學、徳性としての科學であり、科學と道德と宗教との一致と申すことも出来るのではないかと存じます。明年實施される國民學校案に於て理數科の目的を「事物現象ヲ正確ニ考察シ處理スル能ヲ得シメ之ヲ生活上ノ實踐ニ導キ合理創造ノ精神ヲ涵養シ國運ノ發展ニ貢獻スルノ素地ヲ養フコト」となさんとし、又理數科教授の方針として、

(一) 我ガ國ニ於ケル科學ノ進歩ガ國家ノ興隆ニ貢獻スル所以ヲ理會セシムルト共ニ皇



國ノ使命ニ鑑ミ文化創造ノ任務ヲ自覺セシムルコト

(二) 數理及自然ノ理法ヲ推究スル態度ヲ養フコト

(三) 分析的論理的ニ考察スル力ヲ養フト共ニ全體直覺的ニ把握スル態度ヲ重ンズルコト

(四) 觀察實驗ヲ重ンジ實測・調査・作圖・工作等ノ作業ニヨリテ理會ヲ確實ナラシメ發見工夫ノ態度ヲ養フニカムルコト

(五) 國防ガ科學ノ進歩ニ負フ所大ナル所以ヲ知ラシメ國防ニ關スル常識ヲ養フコトとなさんとしてゐるのも同一の精神であると存じます。此の事は唯に自然科學のみならず文化科學或は人文科學一般に就いても妥當し、又國民學校や中等學校のみならず高等專門學校、大學、其の他一般の研究所に就いても、そしてそれが如何に進んだ深い専門の理論的研究に就いても妥當すると信じます。

さて以上の如き根本的態度ヲ定まつた時、吾々が自然科學から學ぶべき科學精神は實證

性と精密性と誠實性であらうと存じます。但し此の何れもがその近代自然科學に於ける偏頗性・固陋性から脱却し解放されねばならないと思ひます。即ち先づ實證性に就いて見ますのに、自然科學の強みである此の實證性が非常に偏狹に流れ、而も一切のそれぞれ對象を異にし性格を異にせる諸科學を一様に律せんとした處に近代科學の破綻の一因があつたと思ひます。然るに吾々が自然科學から學ばんとする實證精神とは現代哲學の精神である所謂「事物そのものへ」到り、事實に即して物の本質や理法を知り、従つて抽象的な理論よりも具體的な事物そのものを尊ぶ精神であります。而して各存在領野には各、その性格を異にせる事實やその理法とか道理とかがあるのでありまして、従つて實證すると申せば、それぞれの領野の理法や道理を把握し、それを各、その領野の事實に於て證明するのであります。一般的に申せば對象的理論はその對象の世界の事實に於て實證し、主體的な道理の如きはその主體の實踐や體驗に於て實證すべきであります。換言すれば自然科學に於ては、物理學は物理の世界の、生物學は生物の世界の各事實によつて實證すべきであり、精



神科學に於ては心理學は人間心理の事實に於て、教育學や道德學や宗教學は又各、それぞれの世界の事實に於て實證すべきであります。それを怠る時にはそれ等の學問は科學ではなくて勝手な論理の遊戯であり所謂空理空論に墮するのであります。此の點何處迄も吾々は虚心に各、の世界の事實に聽き、理論よりも事實を尊重しなければなりません。これが囚はれざる意味に於ける實證精神であらうと存じます。

次に私が自然科學から學ぶべき精密性とは、如何に精神的な深奥な事柄であつても、その研究に當つては何處迄も事物を正確に綿密に探究する精神なのであります。従つてそれは勿論數學的精密性だけを唯一最高の精密性だとして尊重しようとするものではありません。要するに研究すべきそれぞれの領野をそのそれぞれの性格に應じて精密に把握しようとするのであります。従つて宗教は宗教の、道德は道德の、教育は教育の、經濟は經濟の、各、その性格を異にせる精密性があるべきだと思ひます。要するに性急な獨斷や大ざつばな空想に走らずに、何處迄も誠實に忍耐強く綿密に、所謂如實に物を見る、或は物の眞に

迫ることあります。ですから其處に又自然科學から學ぶべき誠實性がある譯です。

西田幾多郎博士はその著「日本文化の問題」に於て「何處までも物の眞實に行くと云ふことには、科學的精神と云ふものも含まれてゐなければならぬ。それは己を空しくして物の眞實に従ふことでなければならぬ、言學せぬとは、我見を張らないと云ふことでなければならぬ、眞實の前に頭を下げると云ふことでなければならぬ。それは唯考へないとか、妥協するとか云ふことであつてはならない。物の眞實に徹することは、何處までも己を盡すことでなければならぬ」と述べてゐられますが、結局何處迄も良心的に物に聽き物に隨順する謙虛な無我の精神が科學精神であると申すことも出来るのではないかと存じます。私が科學の實證性・精密性・誠實性と申したのもそれでありまして、かゝる精神は、精神科學一般殊に哲學等の研究に於ても肝要な精神であると同時に、又今日の自然科學者自身も大いに反省し徹しなければならぬ精神だと存じます。然らざれば無前提とか實證的とか申しながら實際は觀念的な戲論に流れたり、「科學的獨斷」とでも呼ばなければ



ならない科學の假裝をした獨斷が横行し人を迷はすに到るのであります。實踐が要求され、精神の具現が叫ばれる今日眞の意味の科學精神が大いに養はれなければならぬ所以が其處にあると存じます。かゝる意味に於ても學問・教育の刷新が大いに必要なのであります。但し科學的認識には大きな限界があり、今日の物理學等に於ても認められてゐる様に、科學的認識は科學的認識操作によつて規定されるのでありまして、顯微鏡で見られた世界は畢竟顯微鏡に映つた世界である事は恰も物の鏡に於ける映像の如くでありまして、物理學によつて認識された物理學の世界は、物その者の姿ではなくて人間の認識従つて又或民族の或時代の認識に依據してゐると云はなければなりません。従つて吾々は科學を尊重し科學を大いに振興せしめると同時に又、科學は、自然科學にあつても、世界その者の一切を、その眞の姿の儘に認識し處理出来る等と思ひ揚つてはならないことを十分自覺して居なければならぬと思ひます。従つて無とか空とか一とか佛とか天とか神とか呼ばれる様な無底の根源の宗教的體驗・直觀・信念に立つて、無私・純眞・誠實・隨順等の道德的心境に

あつて、殊に歴史上實證され來つた國民道德的眞理・信條との正しき秩序に於て、科學研究が尊重され振興されねばなりません。もつと一般的に申せば文化の一如的な姿を取り戻し建設すると同時に、吾々は諸文化活動、諸文化財の正しき秩序とその正當な限界や價値を常に見誤らない様に心掛けねばならないのであります。特に科學特に自然科學の振興が各方面から強調される今日、以上の點は一層反省され且徹底されねばならないと存じます。「教學刷新評議會答申及建議」には「自然科學並ニソノ應用ノ學問ニツイテハ、精神諸學ニ對シソノ任務ト分擔トヲ明ニシ、益、ソノ進歩發達ヲ圖リソノ研究施設ヲ獎勵スベシ」「理科系統ノ學部ニ於テモ、國體・日本文化ニ關スル教養ニ留意スルヲ要ス」「大學ニ於テハ、學問研究ニ關シ國家的指導精神ノ下ニ綜合ノ實ヲ學ゲ、又各科ノ研究ノ緊密ナル連絡ヲ圖リ」「自然科學的學科目、實業的學科目ニツイテハ、益、ソノ發達ヲ圖リ、正確ナル知識ノ涵養ニ努ムルト共ニ、自然界ノ深奥ナル意味ヲ認メ、敬虔ノ念ヲ以テコレニ對スルコト必要ナリ」とあります。是等の答申を翫讀し具現しなければならぬと信じます。



### 第三講 集團勤勞作業の諸問題

#### 一 實施上の諸問題

以上私は實踐或は行の本質を考へて日本的行の意義を明らかにし、主知的即ち非實踐的な今日の教育の刷新の精神に觸れ、且又日本の行の、世界に向つての實踐としての時局の意味を反省して來たのでありますが、集團勤勞作業は上述の意味に於ての實踐的精神教育の一つの適切な方法なのであります。従つて教育刷新上大なる示唆と意義を有し且現下時局に處し極めて緊要なのであります。其處で私は以上述べ來つた處を顧みつゝ集團勤勞作業實施上留意すべき諸點を擧げて、その精神を幾分なりと明らかにして置き度いと存じます。その爲に私は便宜上昭和十四年十月文部省教育調査部發行の「集團勤勞作業の概

況」(九六—九八頁)中に示された大體の標準を引用して見ることに致します。

「集團勤勞作業の概況」には、集團勤勞作業の標準として次の十三項が擧げられてをります。即ち

- (一) 實施期間ハ一年ヲ通ジ凡ソ二十日トシ其ノ内五日乃至十日ハ夏季又ハ冬季休業中ニ於テ實施スルコト
- (二) 作業時間ハ一日凡ソ三時間乃至六時間ノ程度ヲ標準トシ學生生徒ノ心身ノ發達情況、作業ノ種類等ニ依リ適宜之ヲ伸縮スルコト
- (三) 作業ハ集團的ナルコト
- (四) 作業ハ鍛鍊的ナルコト
- (五) 作業ハ成ルベク國家公共的ナモノ特ニ時局的ノモノヲ適當トスル
- (六) 作業ハ努メテ自然ト國土トニ親シマシムルコト
- (七) 作業ニ當リテハ盡忠報國ノ精神ヲ涵養シ禮節規律ヲ重ンジ、協同、努力ヲ尙ビ困



苦缺乏ニ克チ生成發展ノ氣魄ヲ培フ等ノ訓練ヲナスコト

(八) 作業ニ當リテハ特ニ行事ヲ重ンジ、又用具ヲ大切ニセシムルコト

(九) 作業ニ當リテハ師弟相共ニ勤勞シ、成ルベク宿泊訓練ヲナスコト

(一〇) 作業ハ學生生徒ノ心身ノ發達情況及性別ニ適應セシメ、其ノ實施ニ當リ豫メ身體  
 検査ヲナシ、作業前後ニ於テ準備運動竝ニ整理運動ヲ行フ等保健衛生上適切ナル  
 方法ヲ講ズルコト

(一一) 作業ハ日程、作業種別、班別、分擔及指導者ヲ定メ組織的ニ計畫ヲ樹ツルコト

(一二) 作業ニ關スル一般的知識、作業ノ方法、順序、作業用具ノ取扱方等ニ涉リ豫メ基  
 礎訓練ヲ施スコト

(一三) 作業ハ成ルベク同一學生生徒ニ付テ數日繼續實施スルヲ立前トシ、特ニ夏季又ハ  
 冬季休業中ノ實施ハ五日以上ノ繼續ト爲スコト

さて右の各項に就いて些か註釋を加へてその趣旨を明らかに致し度いと思ひます。

(一) 實施期間ハ一年ヲ通ジ凡ソ二十日トシ其ノ内五日乃至十日ハ夏季又ハ冬季休業中

ニ於テ實施スルコト

集團勤勞作業は決して現在の學校教育の附録なものではないのでありまして、教育刷新の  
 極めて基本的な具體的な方法なのであり、現代の教育に生命を吹き込む最も重要な意義を  
 有するのであります。現代の教育は上は大學から下は幼稚園や家庭に到る迄根本的な刷新  
 が必要なのであり、これは上諭を拜した教育審議會に於ても明らかに決議してゐる處であ  
 ります。然し全面的な刷新は一舉に實行出來難いのでありまして、漸く明年度即ち昭和十  
 六年度から國民學校の實施に着手する程度なのです。而も世界の趨勢、日本の使命は教學  
 の全面的刷新を徒らに遅延させることを許さないのでありまして、其處に何等かの適切な  
 方法が講ぜられねばならないのです。集團勤勞作業は正にその方法として世に問はれたの  
 でありまして、時局を達觀することの出来る具眼の士ならば、それが現在の學校教育に於  
 て占める重要な地位を覺るべきであります。従つてそれはお役目的に附けたりに行ふべ



きではなくて、或點に於ては正科以上に重んずべきであります。唯然し現在の制度にあつては此の(一)に示した程度の日數しか一般的には實施出來難いのであります。が然しこれは最小限度の日數であり、而も此の日數に於て所期の成果を擧げる爲には、以下述べる様な諸點を十分熟慮翫味して本作業の精神をよく生かす様に努力しなければならぬのであります。而して其の際出席を嚴にすること及びこれを授業日數に入れることは勿論であります。處が未だ主知主義的・個人主義的舊弊に囚はれた教育者がありまして、集團勤勞作業の爲に學校教育が妨害されることを訴へるのに出會ふのであります。それは現代の精神も時局の意味も全く分つてゐないと云はなければなりません。是迄のいきなりに何か一二附け加へる位のことと刷新出來たり切り抜けられる時代ではないのです。尙夏季や冬季の休業に就いても、國民の鍊成を主眼とする今日の教育に於ては根本的な觀念及び取扱ひの革新が肝要でありまして、古人が何れの専門に於ても人物を養ひます際に、酷暑や嚴寒即ち土用や寒中にこそ大いに子弟を鍛へたのでありまして、是迄の様な老婆が孫を甘



やかす様な消極的な休暇の取扱ひ方では、到底東亞の天地に、更に全世界に、皇國の道を行する力量のある大國民は養成されないのであります。夏季冬季の休暇こそは心身鍛鍊の絶好の時期だと覺らねばなりません。

(一) 作業時間ハ一日凡ソ三時間乃至六時間ノ程度ヲ標準トシ學生生徒ノ心身ノ發達情況、作業ノ種類等ニ依リ適宜之ヲ伸縮スルコト

集團勤勞作業は實踐的精神教育の方法であることは常に忘れられてはならない根本義であります。固より觀念的抽象的に流れ、非常時の具體的な國家生活から離れてお祭り騒ぎになり遊び半分になつてはならないのは勿論であります。然し精神が没却され、教育であることが忘れられることは絶対に許されないのであります。従つて、勿論働く時には一切を忘れて所謂三昧に眞剣に働き続け、其處に具體的な仕事の成果を實現する様に努めねばなりません。然し心身の發達途上にある青少年であり勞働を通して心身を鍊磨育成するのであるといふ主眼點に立つて常に指導さるべきであります。従つて一日中過激に過ぎ



る労働を強ひることも、又その反對に一日中だらだらと巫山戯させて放つて置いてもならないし、又一時間や二時間でお茶を濁させてもならないのであります。大學や高等専門學校の學生生徒、中學でも上級生になれば、十分の訓練を経た時に於ては終日専門の勤勞者にも劣らないだけの労働が出来なければならないのですけれども、そして現在に於ても師範學校や實業學校等の生徒の労働力は一人前以上の實績を示してゐるのであります。一般的の現状にあつては、三時間乃至六時間程度但し精魂を打込んで働くべきであります。唯此の際自餘の時間を如何に教育的に有効に用ふべきかを指導者は研究工夫しなければなりません。其の點で私は右に擧げてある十三の標準に、「精神ヲ純化シ向上セシムル如キ音楽・映畫等ニヨリ士氣ヲ鼓舞スルコト」及び、「國體・日本精神、時局、精神修養、世界情勢等ニ關スル講話ヲナスコト」、其の他、「作業ヲ始ムルニ當リテハ一同ノ心構ヘヲ整ヘ意氣ヲ盛ナラシムル如キ訓示ヲナシ、作業ノ終ニハ其ノ日ノ全般ニ互ツテ批評シ反省セシムルコト」等の注意を附加したいと思ひます。要するに指導者は常に本作業によつて國民

教育に魂を吹き込み、生きた精神教育の實績を擧げることを目目としなければなりません。固より物心一如であつて、作業の結果作り出される物的なるものと作業によつて養はれ發揚さるゝ精神とは二ではありませんが、作業の結果よりも精神を養ふことが究極目的であることを見失つてはなりません。だからと云つて飼料の増産とか木炭の生産と云ふ様に現今課せられた具體的な生産的課題の遂行がどうでもよろしいと申すのでは勿論ないのであります。これ等具體的な仕事を通してこそ時局にも對處出來、具體的な實踐精神、日々の生活即奉公てふ精神も養はれるのであることを繰り返して申上げて置き度いのであります。此の點どうも物心二元的に考へられ取扱はれて困ります。

### (三) 作業ハ集團的ナルコト

作業が集團的でなければならぬことは申す迄もないことであります。個人主義・自由主義を克服し、己を空しうして一致協力、無窮に生成發展する皇運を扶翼する國民を鍊成するのでありますから、單なる個人だけとしての仕事力や個人としての功績を目標とし



てはならないのであります。此の點に關しても私は「他ノ學校及ビソノ他ノ團體ト協力シ、一團トナツテ協同作業シ所謂億兆一心即チ國民全體ノ一心一體一力ヘト指導養成スルコト」及び「作業ハナルベク祖先先輩ノ遺業ヲ繼ギ又後輩子孫ニ繼承セシムル底ノモノヲ先トスルコト」等の項目を加へたい。日本國民が男女の別、年齢の差、階級や素養の違ひ等を超越して眞に一體一心となつて働く様に教育することが、集團勤勞作業の目標であると信じます。否それに止まらず、更に進んで東亞の諸民族と提携して新秩序の建設、新文化の創造、永遠の平和の確立が、而して更にそれによつて世界人類の平和や文化を建設するのが我が大和民族の使命であり、時局の意味であり、それが即ち八紘一宇の大精神であり、日本的行であり、その大任にふさはしい大國民の鍊成が日本國民教育の眞諦であることは言ふ迄もないことでありまして、それ故にこそ集團勤勞作業の精神は作業實施の翌年即ち昭和十四年度に於て既に一大飛躍をなして、一萬の學生生徒及び一般青年が興亞青年勤勞報國隊として海を渡つて滿洲國及び北支・蒙疆に勤勞作業を行つたのであり、今年も更に

大陸各地に於て勤勞作業に従事したのでありまして、これ實に我が國教育史上は勿論我が國史上のみならず世界史上にも會つて無かつた一大聖業なのであります。一校一學級が作業を爲すに當つても正に此の精神此の氣宇をやつて戴かなければならないのであります。尙此の機會に一言注意致して置き度いと思ひますのは、「團體訓練は大切であるが、個性を無視されては困る」といふ非難であります。これはやはり全體と個體とを對立させることから來る偏見だと存じます。即ち社會的集團を形成し、集團的に活動させることは個人における全體精神の覺醒と實現との不可缺條件であります。そして全體精神の覺醒と實現、即ち全體を個人に發動せしめ個人を全體に歸入せしめることのほかに、教育はあり得ないのでありまして、集團は教育の不可缺條件であります。即ち集團的に行動することによつて個人は全體精神を自覺し、その全體精神は個人を引きしめ力づけます。集團的に行動することによつて、個人は全體の分枝としての自己の地位を自覺し、それに即する自己の責任を自覺し自己の務めを自覺します。集團は個人を壓迫せずして却つて鼓舞激勵し、



個性を蹂躪せずして却つてます。發揚させます。集團によつて人は初めて社會的存在として自己を知り、又同時に社會が自己に依存することを知り自己の任の重大なるを覺ります。かくの如き個人をつくることこそ眞の教育であります。故に眞の教育は集團教育のほかにあり得ないとさへ云ひ得る譯であります。

(四) 作業ハ鍛鍊的ナルコト

此の書の初めに引用しました要項の中にもありました様に、本作業は「心身ヲ鍛鍊シ國民的性格ヲ鍊成スルヲ以テ趣旨トスル」のであり、又同次官通牒にもありました通り「彌彌盡忠報國ノ精神ヲ以テ心身ヲ鍛鍊シ……不撓不屈生成發展ノ氣魄ヲ培」はねばならないのであります。従つて假令低學年でも又女子であつても、勿論年齢・性別・健康状態・仕事の難易を考へねばなりませんけれども、心身の鍛鍊を目指さなければならぬのであります。今日の觀念的な情弱な軟教育打破の上から云つても徹底的に鍛へる方針で臨まなければなりません。興亞の精神を叩き出す底の氣合ひで大いに積極的にやつて戴きたい。

その點から見ても、土用や寒中は絶好の季節であります。

既に字義の上から云ひましても、「勤」は「骨折り、精出す義」とあり、「つとむ」とか「はたらく」とか「心を盡し力を盡して怠らず」とありますし、「勞」は「つかる」とか「くらしむ」とか「はげし」とか「力を用ふる」と甚だし、「骨を折る」とあります。又「勤勞」は「つとめくるしむ」の意であります。従つて樂な遊び半分の勤勞はない譯であります。

尙鍛鍊といふ點から云ひますれば、都市の學校等にありましては二三里或は數里歩いて行つて作業し又歩いて歸らせる事も一方法かと思ひます。都會には適當な作業がなくて困るといふ人の中にはかうした工夫をした事のない人があるのではないかと思はれます。

(五) 作業ハ成ルベク國家公共的ナモノ特ニ時局的ノモノヲ適當トスル

作業が國家公共的・時局的のものであるべきは、國民的性格の鍊成、時局對處等より見て當然のことであります。尤もどんな些事をやるにしても、日常自分達の教室の掃除をするにしても、それがやはり皇運扶翼の具體的道であることの自覺に徹する様に指導しなけ



ればならないのでありまして、従つて集團勤勞作業は雑巾がけや庭の草取りでは駄目だと云ふことにはならないのでありますが、一般的に云へば未熟な人間を指導するには、作業は出来るだけ國家公共的・時局的であることを要します。従つて何れの作業がより、國家的であるか時局的であるか、そしてその點より如何に急を要するかを絶えず考慮する必要があるのでありまして、決して行き當りばつたりにやればよいのでありません。唯固より何一つとして國家公共的・時局的でないものとはなく、極めて日常手近なことを通して御奉公するといふ高い境涯を養はねばならないことは勿論でありまして、此の點に於ても現代の觀念的抽象的教育は足が土に着いてゐないのであります。此の點から云へば「作業ハナルベク日常生活化シ且恆久化スルコト」の一項を加へたいのであります。

(六) 作業ハ努メテ自然ト國土トニ親シマシムルコト

自然から離れ國土から離れ勝ちな現代人殊に知識人にとつては、従つて現代教育にとつては、大自然の中に、國土を踏んまへて立つことが第一に必要であります。これ實に心身

共に健全なる國民の不可欠な立場です。殊に商業や工業の様に大地や自然からかけ離れ勝ちな學校其他大都市の學校に於ては、出来るだけ大自然の中に歸り自然の生命に抱かれ天地の恩を知り、又直接にその化育に參じ同時に農山漁村民の生活を理解することの出来る生活の機會を作ることが大切であります。此の點兎角各自の専門に立つた作業が強調され勝ちなのは反省の要があります。然しこの點に於ても吾々は都會の眞中、教室の中、工場の一隅に居ても天地の恩を感じ、我が家庭、學校の運動場も國土であることを忘れない處迄指導することが必要であります。

(七) 作業ニ當リテハ盡忠報國ノ精神ヲ涵養シ體節規律ヲ重ンジ、協同、努力ヲ尙ビ困苦缺乏ニ克チ生成發展ノ氣魄ヲ培フ等ノ訓練ヲナスコト

本作業が國民鍊成の具體的方法であることは屢々述べた通りであり、従つて主知主義・自由主義・個人主義等を克服して日々盡忠報國の精神で働く國民を鍛へるのであり、勞働すると云つても大國民としての禮節と規律のある、而も和の精神を體し刻苦勉勵よく國家



の生成發展を擔ひ、以て天業を翼賛し奉る氣魄ある教養のある人物を養ひ上げねばならぬことは申す迄もありません。殊に現代の青年に足らないものは氣魄だと思ひます。その點齋藤拙堂が「それ國は士あるをもて立ち、士は氣あるをもて立つ。士の氣強からざればはじみ董の辛からざるがごとし。何の味かあらん。かゝる士のみにては、士なきと同じ。國、何をもて立たんや」(士道要論)と喝破してゐるのを味ふべきであります。と同時に又現代學徒の缺點は禮節規律に乏しい憾があることでありまして、かゝる氣風の刷新上集團勤勞作業は適切な具體的方法だと申さなければなりません。

(八) 作業ニ當リテハ特ニ行事ヲ重ンジ、又用具ヲ大切ニセシムルコト

行事を重んずる所以は、吾々が心身共に日本人本然の立場に立つことが一切の業の始であり又終であるからであります。殊に國旗掲揚、宮城遙拜、神社參拜、默禱等は嚴肅に行ふべきであります。天候や仕事の都合上時間が無いからといふやうな理由で行事を粗略にするが如きことがあつては、根本精神に悖るものであり、修養途上にある者にとつては斷

じて許すことは出来ません。それと同時にその根本精神が吾々の手足を通し、道具を通して働くのでありまして、従つて用具は即ち魂であるのでありまして、武士が刀を魂と云ひ且尊んだ態度が本作業に於ても學ばれ實行されねばなりません。故に用具は最も綿密に精神を籠めて取扱はれねばなりません。此の點に於ても現代人の精神は、學校に於てさへも、非常に低いと云はねばなりません。従つて特に此の點も強調され留意されねばなりません。

(九) 作業ニ當リテハ師弟相共ニ勤勞シ、成ルベク宿泊訓練ヲナスコト

共に働くのみならず共に寝、共に食ふことは具體的な生きた人間を教育するには絶対必要であります。而も現代の教育が如何に此の本道から離れてゐるかを思ふ時、人物が養はれないのは當然だと云はなければなりません。従つて教育刷新の具體的方法として國民を鍊成せんとする以上、本作業は宿泊して働くことが又絶対必要なのでありますが、唯設備等の關係から「成ルベク」としか云へない状態なのですが、然しその意義の重大さの分つ



てゐる學校では一切の障碍を排して宿泊訓練を行つてゐるのであります。即ち寄宿舍の施設のない學校では講堂、演武場、裁縫室、作法室等を之に當て、又は神社や寺院や小學校に分宿し更に修練道場や兵營等を利用したのもありまして、場所の選定よろしきを得れば、學校から離れて新しい氣分の下に、而も専門的な指導者の監督の下に嚴格な規律節制ある訓練を受け、大なる教育的効果を收めてゐるのであります。昭和十三年度夏季集團勤勞作業に於て宿泊訓練を実施したのは全國の中學校に於ては一千三百十七校で文部省が調査した學校總數二千七百六十五校の四割八分に當り、大學高等專門學校の男子に於ては調査校數二百五校の約三割二分の六十六校、女子に於ては四十五校の約二割二分の十校が之を行つてゐるのであります。私の知つてゐる東京市内の私立商業學校等も習志野の廠舎で合宿致して作業を行つてゐます。然し唯宿泊すればよろしいのではないのであります。何處迄もそれが訓練的に行はれねばなりません。従つて直接指導に當る人の日頃の修養が絶對的に必要であります。指導者が到つておませんと、共に働き共に寝て被指導者と接觸

すればする程惡結果が生ずることは申す迄もないことであります。此の點現代教育刷新に於て先づ教育者自身の修養鍛鍊殊に合宿訓練が必要なのです。そして寝るにしても御飯を戴くにしても清掃をするにしても風呂に入るにしても、便所へ行くにしても所謂行住坐臥すべて如法に修せられねばなりません。そしてそれは勿論單なる身體の取扱ひだけの問題ではなくて、如何にして精神を綿密に入念に絶え間なく養ひ磨くかの問題です。然るに今日の學問や教育は科學的であり精密であることを標榜して居ながら、かゝる點極めて粗雑でありまして、機械器具や計算等を如何に緻密に正確にして見ても、それを取扱ふ人間が心身が正されて居なければ實踐は勿論認識も正鵠を期することは出來ず、まして人の心を正すことは出來ません。それ故に殊に指導者の講習會に於ては心の綿密な修練が必要であり、それも心の根源に溯り徹することが必要であり、所謂己を殺して無に歸り天地の心を心とし國家の精神を精神とする境涯に到達することと心掛けねばなりません。これ宗教的行や修練が必要な所以でありまして、神社に參籠したり寺院に宿泊して潔齋や坐禪や其



の他勤行を爲す事が大切な所以であります。かくて指導者は淨められ磨かれた心身を以て先達者として率先垂範すべきであります。かゝる心身の準備なくしての合宿訓練は却つて弊害を伴ふことのあることを慎重に考へてかゝらねばなりません。二宮尊徳先生が三週間断食參籠された精神の偉大さに吾々は今更ながら打たれると共に、それは又名も無き吾の祖先が事を成す場合の心構へであつた様に思ひます。此の點に於ても現代人の精神の低下が感じられます。こゝに體位の低下以上重要な心位の低下とも云ふべきものを感じるのであります。吾々が合宿訓練を提唱するのはかうした精神に於てであります。かうした精神で寢食を共にしてこそ師弟間の切磋琢磨も徳化も行はれるのであります。これこそ眞の人格教育であり人物の育成であります。尙一方、生徒との合宿に於ては青年の心理を理解し、思想的のみならず情操的に師弟の心が觸れ合ひ親和し融合する様に愉快な空氣の中に於て導く工夫が又必要であります。

(一〇) 作業ハ學生生徒ノ心身ノ發達情況及性別ニ適應セシメ、其ノ實施ニ當リ豫メ身

體検査ヲナシ、作業前後ニ於テ準備運動並ニ整理運動ヲ行フ等保健上適切ナル方法ヲ講ズルコト

- (一一) 作業ハ日程、作業種別、班別、分擔及指導者ヲ定メ組織的ニ計畫ヲ樹ツルコト
- (一二) 作業ニ關スル一般的知識、作業ノ方法、順序、作業用具ノ取扱方等ニ涉リ豫メ基礎訓練ヲ施スコト

これ等に就いての一々の説明は蛇足だと思ひますが、要するに是迄の教育界はあまりにも抽象的な觀念論に趨り、概念的註釋や學說の批判や理論的體系的敘述に憂身をやつし過ぎた様です。その結果教育の實踐が宙に浮き勝ちです。従つて作業の様な最も具體的な行を實施するに際しては、それが實情に即して何處迄も具體的に科學的に組織的に綿密に計畫を立て準備工作や基礎訓練をしてかゝらなければなりません。凡そ實踐に於ては、己の力量を知り、働く準備をしてかゝり、仕事の對象の的確な認識その着手點及び遂行上の分量及び順序等の考量、道具や機械の運用等技術上の工夫及び修鍊が必要でありまして、即



ち何處迄も「科學的な處理」が行はれねばなりません。それを缺いて唯抽象的な精神や無計畫な、従つて無謀な力委せの活動は作業の實績も擧らなければ、鍛鍊にもならず、徒らに心身を消耗して却つて心身を害する結果に終ります。ですから作業の終をも又慎み、用具の取り片付け方又心身の納め方迄も入念に處理しなければならず、殊に本作業に於ては参加者の心身を一にしての團體訓練が大切なのでありますから、班別や分擔や指導者を定めて全體が有機的に一體となつて働く様に指揮することが必要であります。本作業實施情況視察の結果から見ましても、計畫が粗雑であり、指揮方法に拙く、基礎訓練を缺くものが多いのであります。此の點一層の工夫努力が必要であります。

(二三) 作業ハ成ルベク同一學生生徒ニ付テ數日繼續實施スルヲ立前トシ、特ニ夏季又

ハ冬季休業中ノ實施ハ五日以上ノ繼續ト爲スコト

本作業に於ては團體の一體的訓練が大切であり國民精神の心身一如的鍛鍊が必要でありまして、個人の訓練や單なる個人の精神の鍛鍊に終つてはならないことは既述の通りでは

ありますが、然し結局訓練や鍛鍊は團體の成員であり國民の一員である各人の心身が徹底的に鍛へられねばならないのであります。それ故に假令或學校或團體が一週間乃至十日間連續して相當猛烈に身の入つた作業を遂行したとしましても、その成員が絶えず交代して各員一個としては一兩日しか働かず又は一日一時間や二時間しか從事しなかつたのでは、お茶を濁した程度のことであつて、鍛鍊の目的は達成されず、それでは作業の結果として大きな仕事が其處に産み出されても、本作業の究極目的たる皇國民鍊成の目的が達成されないであります。故に此の目的達成の爲には是非各自が一日數時間宛繼續して働かなければ駄目であり、殊に時日の許す場合又寒暑烈しくして鍛鍊上最適の夏季や冬季の休業中に於ては、各自が少くとも五日間、出来れば一週間は連續勞動することが必要であります。三日以内では勤勞の苦しみのみを知つてその楽しみを味ふに到らず、又心身一如的な鍛鍊に迄到らないのであります。又あまりに長期に失する時は過勞に陥るか倦怠に流れて心身の消耗障礙を來すか、或は弛緩荒廢に終る危険性があるのであります。それ故に古來



修行即ち行的鍛錬をなすに當つては七日間が常道であつた様でありまして、萬止むを得ない場合でも最小限度五日間は連続鍛へる必要があります。鍛錬とか錬成を唯單に言葉の遊戲に終らせることなく本氣になつてやらうと云ふのならば、大いに氣合をかけ全員の士氣を鼓舞して徹底的に鍛へる必要があります。その爲には時には炎天下或は嚴寒の時、飲食や睡眠を節して迄も働き続けさせねばなりません。これ實に國民錬成の立場です。その爲には勿論前述の様な周到な用意が必要ですが、愈々やるとなつたら生優しい氣持を一擲して、師弟一丸となり全身心を投げ出して働くべきです。正にそれは戰でありまして、かくてこそ觀念論や個人主義や自由主義や功利主義が克服出來、それ等一切の根源である「我」が殲滅されるのです。これこそ「死而後已」とか「七生報國」とか云はれる日本人の實踐態度であり、かくてこそ天地と一枚となつて八紘一字の皇國の理想を世界に宣布し遂行するに足る高い精神と旺盛な氣魄と強靱な身體とが錬成されるのです。それ故にこそ集團勤勞作業は興亞教育の具體的な適切な方法なのであります。

## 二 指導上の諸問題 (一)

集團勤勞作業は「團體的訓練ヲ積マシメ」「國民的性格ヲ錬成」し、以て非常時のみならず常時に於ても眞に一心一體となつて公に奉ずる實踐的皇國民を鍛へ出すのが目的でありますから、これが指導をなすものは此の「團體的訓練による國民錬成」てふ目的の達成に常に萬全の意を用ひなければならぬことは言を俟たない所であります。然るに屢々指導がうまく行はれないのを見聞致しますので、いさゝか老婆心に過ぎ重複の嫌ひがありますが、指揮し指導する上に於て留意すべくして而も實際に於ては甚だ缺けてゐるとされる若干の點を指摘して置きたいと存じます。

一、目的の完遂 集團勤勞作業實施上の根本的な缺陷の一つは、指導者が各作業に際しその各々の作業を通して達成すべき目的を明確に把握して居ないこととその目的完遂の熱意が不足してゐるといふことです。其の中本作業の目的ですが、一般的な抽象的な目的は



勿論誰でも分つてゐる筈ですけれども、それぞれの具體的作業を実施致します際に、その各々の作業に於て何を狙ふかと云ふ點に於ての認識が不足してゐるのです。本作業の實施によつて達成されるべき教育的目的としての價値や徳目を一寸列挙して見ましても枚舉に遑が無いでせう。例へば、教學刷新・盡忠報國の精神の鍊成・團體訓練・國防訓練・體位向上等々。それでは一般的抽象的に過ぎるといふならば、皇國民の自覺・敬神崇祖・勤勞奉公或は勤勞報國・時局認識及び對處・感恩及び報恩或は報本反始・國策即應・國土愛敬等々があり、其の他吾々が前の「實踐の世界」に於て述べた様な諸徳や又は本作業に關する文部省の通牒や文部大臣訓示等に明示されたる教育目的等を擧げて見ますれば、天地と一枚になること・天地の化育に參すること・物心一如觀に徹すること・心身の一體的鍛鍊・自然や國土との親和・個人主義、自由主義、功利主義、主知主義、觀念論等の克服・勞働倫理の革新・英靈や傷病將士への感謝等々があり、更に諸徳目等を心に浮ぶ儘に列挙しましても、禮節規律・和衷協同或は團體精神・勤勉努力・堅忍持久・服從・隨順・自律・默

行・質實剛健・率先躬行・情操陶冶・生成發展の氣魄・創造の精神・物を大切にする或は物資の愛護・責任感・決斷力・勤勞の愛好尊重・無功德・意志力活動力の鍛鍊・同僚共勵・師弟同行・眞劍・頑張り・進取・自發性・氣宇高邁・明朗闊達等々があります。更に一般に、奉仕の態度養成・傳統の尊重及び繼承・郷土の愛護・指導者精神の涵養・國民各層或は青年各層の理解融合・農山村等の生活の理解等や又は職分の恪勤・行解相應等々があります。

要するに右の如く心に浮ぶ儘を雜然と列挙しただけでも作業によりて達成さるべき教育目的は無數にあります。従つて指導者たる者は常に、一作業を實施するに當つては何れの目的を（それが一目的にしる數目的にしる）達成せんとするかを確定し、又は此の目的を達成するには如何なる作業を如何に實施すべきかを明確にしてかゝらねばなりません。唯漫然と作業を行つただけでは實績は擧がらないでせう。故に先づ目的を確立することが大切であります。而して目的を立てた以上は、殊にそれを明示した以上は何處迄も完遂せず



事行前業作及備準業作				順 序	要 領	場 所	服 裝 携 行 品	特 ニ 水 筒 、 手 袋 等 ノ 用 意	時 間
基本教育	作業前行事								
要否、誰ガ如何ナル方法ニテ實施スルヤ	3 (何班)	2 (何班)	1 (何班)	作業地ノ偵察 作業場ノ整備	作業地ノ再偵察ノ要領、 作業實施ヲ容易ナラシムル爲ノ 作業場ノ整備ニ關スル件等	作業前行事ノ實施ノ場所方法等ノ大要			
分何	分		何						

んば止まないといふ熱意決心が必要であります。即ち言つたことは必ずやるのが大切であります。けだし實踐といふ以上は目的を實現しなければ嘘であります。

二、周到な計畫と準備 實踐は道を踐んで目的に到達することだといへませう。従つて作業に當つては、何處へ向つて如何なる道を如何に何處から何處迄行くべきかを十分綿密に研究し、十分の用意をしてかゝらねばなりません。此の點に於ても各學校や團體に於てまだ缺ける處が多い様に見受けられます。故に例へば別紙の様な計畫書を研究立案作製して十分に綿密に具體的に準備してかゝる事が極めて必要であると存じます。

集團作業計畫 (一例)			年	月	何日	某
目的	精神的ノ訓練目的ヲ主トス					
日	時	作業用具	素質人員			
		使用シ得ル器具若シクハ準備スベキ器具ノ總數	職員以下ノ總數			



考 備	事行後業作	施 實 業 作
一、救護、休養ニ關スル件	一、後始末、點檢、講評、作業後ノ行事	各班ノ作業場所、着手ノ順序方法、作業要領、主要着眼、作業上ノ注意、休憩交代
	分 何	分 何 時 何

三、基本教育の徹底 一般に器具の使ひ方等の基礎訓練が缺けてゐます。訓練なくしては實踐は行はれない。故に次の項「指導上の諸問題(二)」を参考として十分の訓練を施され度い。而してこれは出来るだけ綿密に而も極めて實際的に反復徹底させることが肝要で

あります。

- 四、其の他の諸注意 今心付いた點を若干列記して見ますれば、
- (イ) あらかじめ各種の指導者を選抜養成して置くこと。
  - (ロ) 宣誓式等は嚴肅に必ず行ひ、それ等行事の精神を作業中及び生活全般に持續し生かすこと。
  - (ハ) 器具は武器の如く尊重し、昔の武士が刀を魂と見たると同様の精神にて取扱はしむること。
  - (ニ) 終日黙々として働きて文句不平を言はぬこと。此の態度は殊に指導者に肝要なり。
  - (ホ) 鋏一つの取扱ひ方も集團的に行ひ各人勝手にやらぬこと。洗面や便所へ行くにも食事するにも然り。一切が團體的行である様に訓練すること。
  - (ヘ) 機械を出来るだけ活用し、精神的に而も科學的に作業せしむること。
  - (ト) 鍛錬と養護と救護衛生とが相伴なつてゐること。



- (チ) 指導者たる者は小部隊を使ふ時には體を使ひ大部隊の時は頭を使ふこと。
- (リ) 全體の各員をよく見てやること。そして適切な講評をすること。尙細かい二三の點を付け加へるならば、
- (ヌ) 器具掛を活用し、指揮者及び各掛は作業前に現場に付きて配慮準備して置くこと。
- (ル) 班長等には或點の責任を分擔させること。
- (ヲ) 器具は餘分に持つて行くこと。沓や車は倍数用意して置くこと。
- (ワ) 作業場に於ける整理、即ち例へば最小限二歩乃至最大限八歩間隔を取らせるとか、又人數を分ける場合は六・七人乃至十五・六人とすること等。
- (カ) 計畫を正確にし指導よろしきを得て自ら黙々として働かざるを得ざる様にする事。
- (ヨ) 天候が悪くなるとか事故が起るとかの場合を豫め考へて細心な用意をしてかゝり、豫定の計畫を妄りに變更や中止せぬこと。但し止むを得ざる場合は臨機應變に決断すること。要は活きた教育が行はれる様敢行することが必要なり。

- 尙氣付いた點を追加すれば、
- (タ) 作業場は教室なり、道場なり。
  - (レ) 班は三十名以下たること。尙参考迄に指導する場合の人數の標準を擧げれば、寮等で訓育する場合一人の指導者が世話し得る人數は二十名迄。生死を預る場合は十・二・三名、即ち軍隊の分隊。聲や目で意の如く動かし得る最大限の人數は千人、即ち軍隊の大隊。
  - (ソ) 作業によりては五分間位にて交代せしめ、それも三交代等にする事。尙例へば四交代にするとすれば五十人分の器具にて二百人が作業出来る譯なり。
  - (ツ) 指導者は指導者としての使命を遂行して範を示すべし。生徒と同じ事をするのではない。但し全員が一致して作業する様になれば弱い處や遅れた處に入つて作業するもよろし。然しその際にも絶えず全體に氣を配ること肝要なり。即ち自分の指導者としての任務を常に忘れざること。



(ネ)命令には絶対に服従すること。

(ナ)命令は必ず明確に復誦せしむること。

(ラ)生徒の健康状態には特に常に注意すること。

以上當然注意さるべくして而も兎角行はれない諸點を重複を厭はず列記して見たのであります。尙文部省が集團勤勞作業指導者講習會等に於て参考として配布致しました「作業指揮ノ参考」及び教學局が昭和十五年度興亞學生勤勞報國隊内地訓練に際し参考にしました「作業指揮及基礎訓練ノ参考」なる刷物中より先づ作業指揮に關する部分を左に採録して御参考に供することに致します。

作業指揮ノ参考

第一 部隊指揮ノ要訣

一、指揮官ハ部隊指揮ノ中樞ニシテ又團結ノ核心ナリ。故ニ常時正道ヲ踐ミテ事ヲ律シ熾烈ナル責任觀念、鞏固ナル意志ヲ以テ其職責ヲ遂行スルト共ニ高邁ナル徳性ヲ備ヘ態度

ヲ嚴正ニシ恩威並ビ行ヒ部下ノ心服ヲ得、其尊信ヲ受ケサルヘカラス

二、指揮ノ要訣ハ部隊ヲ確實ニ掌握シ明確ナル企圖ノ下ニ適時適切ナル命令、號令ヲ下達シ其行動ヲ律セシムルニ在リ

「註」指揮トハ自己ノ意圖ヲ明示シ實行ヲ要求シ之ヲ監督スルヲ謂フ

三、指揮官ノ意圖ハ命令若シクハ號令ニ依リ告達ス

號令、命令ハ堅確ノ決意嚴肅ノ態度ヲ以テ下スヘシ。而シテ號令ハ明快ノ音調ヲ以テ發唱シ、命令ハ發令者ノ意志及受令者ノ任務ヲ明確適切ニ示シ且受令者ノ性質ト識量トニ適應セサルヘカラス。而シテ發令者ハ實行ヲ監督指導シ、受令者ハ常ニ實行ニ關シ報告スルノ着意ヲ必要トス

第二 作業指揮

其一 要則

一、作業ハ之ヲ通シテ常ニ學徒ヲ薰陶化育スルノ着意ヲ忘ルヘカラス



二、作業ノ目的精神ヲ明ラカニシ其部署ヲ適當ニシ監督指導宜シキヲ得ルト作業規律ノ嚴肅ナルトハ作業指揮ノ要訣トス

「註」作業規律トハ命令號令、示サレタル作業ノ方法ヲ嚴守シ至誠作業ニ従事スルヲ謂フ

三、作業ハ爲シ得ル限り適切ナル計畫ノ下ニ十分ニ準備シタル後之カ實施ニ着手スルモノトス

四、作業ノ實施ニ方リテハ萬難ヲ排シ計畫ヲ遂行スルヲ可トス是計畫ノ一部ノ變更ト雖モ廣範圍ニ影響ヲ及ホスコト多ク又徒勞ヲ生シ作業進捗ヲ遲緩シ作業ノ倦怠ヲ招クモノナリ

其二 準備

一、作業ヲ行フニハ所要ノ偵察ヲ行ヒ之ニ基キ作業計畫ヲ定メ所要ノ器材ヲ整備セサルヘカラス

初歩者ニ對シテ豫メ基本教育ヲ必要トスルコトアリ

二、作業計畫ニハ實施スヘキ作業ノ種類ヲ定メ使用シ得ヘキ人員及素質、器材並時間ニ應ジテ作業ノ程度方法着手ノ順序並人員（班ノ區分）器材ノ配當ヲ決シ要スレハ給養衛生ニ關スル事項ヲモ計畫スルモノトス

三、作業ヲ連續實施スル場合ニ在リテハ主トシテ作業力ヲ保持スルコトヲ顧慮シ要スレハ交代作業ヲ實施スル如ク部署スルヲ可トス

休憩ヲ如何ニ實施スヘキヤハ狀況ニ依リ異ルト雖モ軍隊ニ於テ經驗セル一例ヲ示サハ一意土工ヲ繼續シ得ル時間ハ概ネ十五分乃至二十分ナリ

其三 實施

一、作業計畫終レハ所要ノ命令ヲ下シ作業ニ着手セシム。而シテ命令ニハ作業ノ種類及器材ノ配當ヲ明示シ要スレハ完成時刻ヲ示スモノトス

二、作業ノ準備終リタル後作業ニ任スル部隊ヲ作業ノ位置ニ就カシメ又作業ヲ開始セシム



- ルニハ狀況ニ應シ全隊同時ニ或ハ區分毎ニ逐次ニ行フモノトス
- 三、作業手ヲ配置スルニハ作業ノ種類ニ依リ異ルト雖モ各人擔當ノ作業區ヲ定メ隣接作業手ハ彼此妨害セサルコト及作業ノ進捗ニ便ナル如ク考慮スルヲ要ス
- 四、作業手ノ配置終レハ要スレハ之ニ必要ナル指示ヲ與ヘタル後作業ニ着手セシムルヲ可トス
- 五、作業指揮官ハ各々其擔任作業ヲ迅速確實ニ完成セシムルコトニ努ムルト共ニ作業間及作業完成後共情況ヲ點檢シ上級指揮官ニ報告スルヲ要ス
- 六、作業間ハ作業手ヲシテ至誠命令指示ヲ遵守シテ全力ヲ擧ケテ作業ニ從事セシメ忍耐克己任務ノ遂行ニ邁進セシメ苟モ隣接作業手ト私語シ勝手ニ手前ヲ變換シ或ハ自己ノ工區ヲ少クスル等ノ不規律ヲ嚴ニ戒ムヘシ
- 七、作業隊ヲ交代セシムルニハ上番指揮官ハ下番指揮官ヨリ作業進捗ノ景況等ニ關シ所要ノ申送りヲ受ケ作業隊到着セハ直チニ作業ニ着手シ得ル如ク準備スルモノトス

- 八、長時間ニ互リ作業ヲ續行スル場合ニ在リテハ作業手ノ素質特ニ其體力ヲ考慮シ適宜交代休憩セシメ體力ノ恢復志氣ノ緊張ヲ圖リ作業力ノ維持ニ努ムルヲ要ス
- 九、休憩時ハ十分疲勞ヲ恢復セシムルト共ニ器具及手指ノ手入ヲ勵行シ、柄部ノ土砂ヲ拂ヒ作業ヲ容易ナラシメ且手指ノ外傷ヲ豫防セシムルヲ要ス
- 一〇、作業ヲ完了シ他ノ作業ニ移ラントスルトキハ豫メ之カ諸準備ヲ整ヘ死節時ヲ生スルコトナク新作業ニ着手シ得ルヲ要ス
- 尙器具の尊重に關して左の如き注意が致してあります。
1. 作業開始前ニ於テ器具ノ員數機能ノ點檢ヲ十分ニシ要スレハ手入ヲ行フヲ要ス
2. 作業中各自保管ノ責ニ任シ特ニ交代ノ際ハ器具ノ申送りヲ確實ナラシメ又作業中モ手入ヲ怠ラサルコト及不用器具ノ整理整頓ニ注意スヘシ
3. 作業終了後ハ器具ノ員數及機能ヲ十分ニ點檢シ手入ヲ行ヒタル後整然ト格納スルコトニ努ムヘシ



### 三 指導上の諸問題 (二)

次に興亞學生勤勞報國隊の内地訓練に際しての「作業指揮及基礎訓練ノ参考」中の基礎訓練の部を左に採録致して置きます。

#### 基礎訓練

#### 第一章 通 則

- 一、作業基礎訓練ノ目的ハ隊員ヲ訓練シテ作業上重要ナル基礎的事項ヲ修得セシムルト共ニ興亞學生勤勞報國隊精神ヲ鍊成スルニアリ
- 二、基礎訓練ニ於ケル諸動作ハ概ネ教練並ニ體操ノ指導要領ニ準スルモ指揮號令ノ特殊ナルモノニツキテハ別ニ定メタルモノニ從フモノトス
- 三、命令指示ハ明確ナルヲ要シ、且之ニ對シ正確ニ復唱報告ヲナサシムル様訓練スヘシ
- 四、班別或ハ二人以上ノ組別實施ニ際シテハ、必ス一名ノ基準生ヲ設ケ、協同動作ノ基準

タラシメ且氣合ノ合致ニ留意セシムヘシ

五、器具掛ノ動作、用具器材ノ整否點檢並ニ之カ手入ヲ訓練スヘシ

六、作業ノ始メ又ハ終リニ於ケル號令又隊員ノ動作ハ左ノ要領ニヨリ訓練スヘシ

隊員ヲ作業ノ位置ニ就カシムルニハ器具ヲ携持セシメタル後其ノ位置ヲ指示シテ左ノ號令ヲ下ス

位置ニ就ケ

隊員ハ指示セラレタル位置ニ就キ姿勢ヲ正ス

作業ヲ始メシムルニハ作業ノ方法其ノ他必要ナル事項ヲ示シタル後左ノ號令ヲ下ス

作業始メ (右 (左) 手前作業始メ)

作業ヲ止メシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

作業止メ

隊員ハ作業ヲ止メ器具ヲ携持セルママソノ位置ニ姿勢ヲ正ス



第二章 器 具

第一節 携 持

七、鏟類（スコップ、シヨベル、ホーク等）ハ立銃ノ要領ニ準シ尖凹部ヲ内方ニ向ハシメテ保持ス

擔方ニ當リテハ足ヲ曲クルコトナク上體ヲ前方ニ曲ケ左手ヲ以テ右手ノ肩巾ニトリ右手ヲ前面ニ握リ換へ上體ヲ起スト同時ニ兩手ヲ以テ鏟ヲ自己ノ身體近ク左方ニ上ケ右肩ニ擔フ

下方ニ當リテハ左手ヲ以テ肩ノ直上ノ柄ヲ握リ兩手ヲ以テ鏟ヲ上ケ上體ヲ前方ニ曲ケ尖部ヲ下ニシツツ身體ニ近ク斜左ヨリ下シ、置ク位置ニ注目シテ立銃ノ要領ニ準シ靜ニ之ヲ置ク

鏟類ノ携持ハ兩手ヲ以テスルヲ原則トスルモ、器具ノ輕重、體力ノ如何ニヨリ右手ノミヲ以テ腰ヲ曲クルコトナク擔フモ可ナリ。

八、二箇以上ノ器具ヲ同時ニ携持スルニハ通常大ナル器具ヲ右肩ニシ、他ヲ左脇下ニ、主要作業部ヲ前方ニ双部ヲ下ニシテ抱クモノトス

九、總テ器具ノ携持ハ之カ觸撃ニヨリ音響ヲ發セサルコトニ注意スヘシ

第二節 作業器具ノ使用

一〇、作業器具ノ操作ハ柄ヲ右手或ハ左手ヲ前方ニシテ使用スルニ從ヒ「右手前」「左手前」ノ操作ト呼フ

此ノ操作ハ左右一樣ニ使用シ得ル様練習スルコト必要ナリ

第一項 唐鍬類（備中鍬、鶴嘴、十字鍬等）

一一、唐鍬ノ使用ハ概ネ左ノ要領ニヨル

唐鍬ヲ用ヒ右（左）手前ニテ掘土スルニハ先ツ左（右）足ヲ約半歩後ニ踏ミ開キ、左（右）手ヲ以テ柄ノ端末ヲ右（左）手ヲ以テ左（右）手ノ前方ニ於テ略々肩幅ノ所ヲ握リ次イテ左ノ如ク操作ス



第一動 兩手ヲ以テ唐鍬ヲ高ク頭上ニ振り上ク。此ノ際柄ハ略體ノ中央ニ在リ。又體ノ各部ハ十分伸張セラレアルモノトス

第二動 眼ヲ打込ムヘキ位置ニ注キ、唐鍬ヲ振り下スト同時ニ上體ヲ前方ニ傾ケ僅ニ膝ヲ曲ケカヲ加ヘテ鐵部ヲ地中ニ打込ム

此ノ際右(左)手ハ左(右)手ニ近ク位置スルヲ可トス

第三動 兩手ニカヲ加ヘ腰ヲ張り膝ヲ伸ハシ、柄ノ端末ヲ扛起シテ土塊ヲ掘起ス。此ノ際右(左)足ヲ少シク前進セシメ右(左)手ヲ舊位ニ復スルヲ可トス

第二項 鍬類(圓匙等)

一二、鍬ノ使用ハ概ネ左ノ要領ニヨル

右(左)手前ヲ以テ掘土スルニハ投土ノ方向ニ對シ半左(右)向ケヲナシ、左(右)足ヲ約半歩後ニ踏ミ開キ同時ニ左(右)手ヲ以テ鍬ノ柄ノ端末ヲ、右(左)手ヲ以テ其ノ下方ヲ握リ、鐵部ノ凹部ヲ前ニシテ之ヲ右(左)足先ノ傍ニ立テ、次イテ右(左)足ヲ

鐵部ノ肩ニ當テ掘土ノ位置ヲ注視シツツ體重ヲ利用シテ一舉ニ鐵部ヲ踏ミ込ミ充分ニ之ヲ地中ニ没入セシム。踏込ミ終レハ右(左)足ヲ舊位ニ復シ、右(左)手ヲ移シテ鐵部ニ近ク柄ヲ握リ左(右)手ヲ以テ鍬ノ柄ヲ下方ニ壓シテ投土ノ操作ニ移ル

一三、水平投土ノ操作ハ各自ノ體格ニ應シ、必スシモ一樣ナラシムルノ要ナキモ、概ネ左ノ要領ニヨル

第一動 右(左)手前ニテ投土スルニハ第五十二ノ要領ニヨリ掘土スルヤ直チニ右(左)手ヲ支點トシ、左(右)手ヲ下ケ、鍬ノ先端ヲ稍々前方ニ推進扛起セシム。此ノ際腰ハ屈マリ體重ハ稍々多ク右(左)脚ニ掛リ且鍬ノ方向ハ概ネ投土スヘキ方向ニ指向セラルルモノトス

第二動 次イテ土ノ重サヲ利用シ、兩臂ヲ伸シタル儘、殊更ニ腰ヲ張り又ハ捻轉スルコトナク鍬ノ柄カ概ネ垂直ニナル迄、之ヲ後方ニ引ク

第三動 次イテ其ノ反動ヲ利用シタル儘自然ノ弧ニ從ヒ漸次カヲ加ヘツツ之ヲ前方ニ振



リ出シ投擲ス。此ノ際左(右)手ヲ輕ク握リ緊メ、右(左)手ヲ以テ鏟ノ方向ヲ維持シ、腰ト膝トヲ十分伸ハシ且體重ノ大部ハ右(左)脚ニカカルモノトス

投土ノ回数ハ毎分概ネ五回乃至八回ヲ標準トス

一四、垂直投土ノ操作ハ水平投土ノ要領ニ準ス

但シ鏟ヲ振り出ス操作ノ終リニ於テ兩臂ニ力ヲ加ヘ稍々深ク下方ニ彎曲セル弧ヲ描キツツ鏟ヲ上方ニ振り出シ、右(左)手ノ力ヲ抜キ土ヲ上方ニ投擲スルヲ異リトス

一五、掘土ハ通常工區ノ一端ヨリ他端ニ又前方ヨリ後方ニ及フ如ク整然トシテ實施シ、一層ノ掘取リヲ終リタル時ハ一旦散亂セル土ヲ整理シタル後次層ノ掘土ニ着手スルモノトス

又各層ハ可成鱗次形ニ掘取スルヲ可トス

土質硬キカ或ハ石礫ヲ混シアル場合ニハ豫メ鶴嘴若シクハ唐鍬ヲ以テ粗解シタル後鏟ヲ使用スルモノトス

### 第三章 運搬用具

#### 第一節 運搬用具ノ携持及使用

一七、運搬用具ノ携持及使用ハ概ネ第二章第一節第二節ニ準スル外左ノ要領ニ據ル

第一項 畚

一八、畚ニヨリ運搬スルニハ各運搬區毎ニ一箇ノ畚及其ノ運搬手ヲ配置シ積載場ニモ亦一箇ノ畚ヲ配置シ運搬手ハ往路ハ實畚ヲ歸路ハ空畚ヲ搬送スル如ク夫々擔任區内ヲ反復往復スルモノトス

一九、畚ニ物ヲ積載スルニハ通常積載手一名ヲ以テシ之ヲ地上ニ展ヘ四隅ヨリ中央ニ及フモノトス

二〇、實畚ヲ運搬スルニハ通常運搬手二名ヲ以テシ、一名ヲ基準生トシ、畚ヲ持チ、他ハ擔棒ヲ持ツ。積載終レハ積載手ハ「可シ」ノ號令ヲカケ、基準生ハ畚ノ緒ヲ揃ヘ、上端ヲ交叉セシメ、他ハ前方ヨリ之ニ擔棒ヲ挿入シ、基準生ハ擔棒ノ後方約三分ノ一ノ所ニ



緒ヲ位置ス

二一、前條ノ準備終レハ基準生ハ右肩又ハ左肩ノ號令ヲカケ擔棒ノ後端ニ肩ヲアテ兩手ヲ以テ緒各一條ヲ握リ他ハ擔棒前端ヨリ約三分ノ一ノ位置ノ所ヲ基準生ト同シ側ノ肩ニ擔ヒ肩ト反對ノ手ヲ以テ緒ヲ握リ他ノ手ヲ以テ擔棒ヲ把ルモノトス

二二、基準生ハ「上ル用意」ト號令ヲカケタル後「上ケ」ノ號令ヲ以テ同時ニ立チ「前へ」ノ號令ヲ以テ歩幅ヲ少シク縮メ、調子ヲ合セテ行進ス。積載量重キ時ハ一二々々ノ呼稱ヲナス

二三、畚ヲ目的地ニ運搬シタル時ハ基準生ノ「止レ」次イテ「下ス用意」次イテ「置ケ」ノ號令ニヨリ靜ニ置キ、前方ニ位置スル者ハ擔棒ヲ拔ク。然ル後雙方協力シテ擔肩ノ反對ノ側ノ緒ヲ握リ之ヲ引上ケツツ積載物ヲ排除ス

二四、畚ノ緒ノ長サハ通常空畚ノ一邊ノ略々中央ヲ踏ミテ之ヲ上ニ延ハシ緒ノ上端概ネ臍ノ高サニ達スルヲ以テ標準トシ、傾斜地ニ於テハ必要ニ應シテ長サヲ縮ムルモノトス

二五、畚ノ水平一運搬區ハ通常約五十米乃至七十米ヲ標準トス

第二項 擔 架(竹畚)

二六、擔架ニヨリ物ヲ運搬スルニハ第一項ニ準ス

第三項 二輪車(リヤカー、荷車等)

二七、二輪車ヲ以テ運搬スルニハ通常運搬手三名乃至五名、積載手二名ヲ配置シ、各一名ヲ基準生トス

二八、二輪車ニ物ヲ積載スルニハ通常二輪車ノ前方ヨリ順次後方ニ及フモノトス

積載時ニ於ケル運搬手ハ二輪車ニ沿ヒテ位置シ要スレハ積載手ニ協カスヘシ

二九、二輪車ニヨリ運搬スルニハ基準生ノ「位置ニツケ」ノ號令ヲ以テ前方(一名乃至三名)後方(二名)ニ位置シ後方右側ヲ基準生トス

三〇、基準生ハ「引ク用意」ノ號令ヲカケ次イテ「前へ」ノ號令ニテ前進スルモノトス、

三一、目的地ニ運搬シタル時ハ基準生ハ「止レ」次イテ下ス位置ヲ指示シ「下ス用意」次



ニ「置ケ」ノ號令ニヨリ下スモノトス

第四章 重材料ノ取扱

三二、重材料ヲ取扱フニハ常ニ志氣ヲ緊張一致シ、基準生ノ指示ニ從ヒ、協同動作スルコト緊要ナリ

三三、重材料ノ取扱ニ當リテハ常ニ之カ諸準備ヲ完全ニシ、殊ニ之ニ充當スヘキ人員及ヒ器材ヲシテ能ク材料ノ状態、特ニ重量及ヒ形状ニ適應セシメ且危害豫防ニ留意スヘシ

三四、使用器材ハ豫メ之カ機能抗力ヲ點檢スルハ勿論使用中ニ於テモ時々之ヲ點檢スヘシ蓋シ器材ハ當初完全ナルモノト雖モ使用頻繁ニ互ル時ハ漸次其ノ抗力ヲ低減スルニ至レハナリ。特ニ竹木器材及ヒ連結材料ニ於テ然リトス

三五、重材料ノ取扱ハ通常數人ノ密接ナル協同ニヨリ實施セラルルモノトス。故ニ作業手ハ班（組）長又ハ基準生ノ指示ニ從ヒ整正ニ動作シ苟クモ協調ヲ破ルコトナキヤウ留意スヘシ

數班又ハ數組ヲ以テスル作業ニ於テ班組相互ノ連繫ニ關シテモ亦同シ。同班（組）ノ者ニハ可成身長、體力相近接セルモノヲ充當スヘシ

三六、班（組）長又ハ基準生ハ位置ニ就カシメタル後左ノ號令ヲ下ス

「上ル用意」「上ケ」全員氣合ヲ揃ヘテ「腕ニ」「肩ニ」確實ニ肩ニ擔キタル後基準生ノ「前へ」ノ號令ニテ前進スルモノトス。

行進ニ際シ一二々々ノ呼稱ヲ唱フヘシ

基準生ハ動作ノ基準トナリ、且必要ナル指示ヲナスニ便ナル様位置スヘシ

三七、目的ノ地點ニ到レハ基準生ハ「止レ」ノ號令ヲ下シ、次イテ左ノ號令ニヨリ器材ヲ下スモノトス

「下ス用意」「腕ニ」「置ケ」靜ニ器材ヲ置キタル後姿勢ヲ正ス

三八、重材料運搬ニ際シテハ適當ナル肩當布ヲ使用スルヲ可トス

三九、重材料ヲ懸吊スルニハ勉メテ其ノ結着部ヲ材料ノ重心線上ニ置キ且懸吊支點ノ鉛直



下ニアラシメ、要スレハ操作網等ヲ附シ、以テ重材料ノ動搖ヲ防止スルヲ要ス  
 四〇、作業手ハ器材ノ取扱、輓曳、吊上等ニ關シテハ常ニ急激ナル力ヲ加フルコトヲ戒メ  
 以テ重材料ニ衝擊ヲ與ヘサルコト肝要ナリ

四一、操作中ニ於ケル重材料ノ下方ニハ必要以外ノ隊員ヲ在ラシメサル如ク注意スヘシ  
 要スレハ其ノ位置ヲ指定スヘシ

四二、隊長ハ常ニ全般ニ注意シ不慮ノ場合ヲ豫想シ處置方ヲ定メ、臨機ノ處置ヲ誤ラサル  
 様注意スヘシ

四三、重材料ノ取扱中ニ於テ支點ノ如ク其ノ状態ヲ變更スル虞アルモノニ對シテハ、要ス  
 レハ所要ノ人員ヲ配置シ之カ状態ヲ監視セシムルコトヲ要ス

四四、長大ナル器材ヲ授受スルニハ豫メ其ノ位置ニ助手ヲ配置シ以テ操作ヲ容易ナラシム  
 ルヲ可トス

尙「作業指揮ノ參考」の中には右の外に鋸・斧・鉋等の使用法に就いても指示してあり

ますので参考迄に次に掲げます。

一、鋸ノ使用法 山鋸ヲ以テ材ヲ挽クニハ通常先ツ右手ニ柄ヲ握リ左手ノ拇指ヲ墨線又ハ  
 挽カントスル位置ニ少シク曲ケ添ヘ鋸ノ基部ニテ之ニ準ヒ淺キ挽キ込ミヲ爲シ次イテ  
 左(右)手ヲ基部ニ近ク右(左)手ヲ後端ニ近ク柄ヲ握リ右(左)足ヲ後方ニ開キ成ル  
 可ク鋸齒ノ全長ヲ用ヒテ挽截スルモノトス

鋸ヲ進退スルハ臂ノミニ依ルコトナク全身ヲ用ヒテ操作シ特ニ力ヲ後退ニ加ヘ前進ハ輕  
 ク之ヲ推進シ以テ鋸身ヲ曲ケサル如クシ頭ハ墨線又ハ挽カントスル位置ニ正對セシメ眼  
 ヲ之ニ注キ挽截方向ノ偏倚ヲ豫防スヘシ。之カ爲墨線ニ沿ヒテ挽クニハ通常其半幅ヲ殘  
 スコトニ注意スルモノトス

挽截途中所望ノ挽截線ヨリ偏倚シタルトキハ鋸ノ背部ヲ修正方向ノ反對側ニ押當テツツ  
 挽キ切口ヲ變ヘ又尖ノ方向ヲ修正スルモノトス。挽キ終リニ際シテハ鋸ノ進退ヲ小ナラ  
 シメ稍々輕ク挽キ以テ材ノ裂損及鋸ノ先端ヲ挽截ノ餘力ニ依リ他物ニ擊突スルコトヲ避



クヘシ

二、斧ノ使用法 斧ヲ以テ材ノ右(左)側面ヲ削ルニハ通常左(右)足ヲ以テ(大ナル材ニアリテハ兩足ヲ以テ)材ヲ踏ミ支ヘ兩手ニテ柄ヲ握リ右(左)足ヲ約一步後方ニ踏ミ開キ刃部ヲ稍々斜ニシカヲ加ヘテ削ルモノトス。而シテ大キク削ルニハ通常先ツ反對方向ヨリ素打ヲ施シ置クモノトス。但粗角ヲ製作スル場合ニハ特ニ逆目ニ注意シ要スレハ反對方向ヨリ削リ且手前ノ變換ヲ行フヘシ。杭ヲ尖ラスニモ亦右ノ方法ヲ準用スルモノトス。樹幹ヲ切り倒スニハ通常中徑約一五纏以下ノモノニアリテハ斧ノミヲ以テシ又中徑之ヨリ大ナルモノニアリテハ鋸ヲ併用シ概ネ左ノ要領ニ依ルヘシ

樹幹ヲ倒サント欲スル方側ノ根際ニ深サ樹幹ノ中徑ノ約五分ノ一乃至四分ノ一ニ達スル刻口ヲ設ケ次ニ其反對側ヨリ刻口ノ稍々上方ニ於テ鋸ヲ水平ニ使用シ樹幹ノ殘部ヲ挽截スルモノトス

三、鉋ノ使用法 鉋(重量〇・八七〇斤)主トシテ中徑小ナル生樹木及細枝ノ截斷或ハ竹

割等ニ用ヒルモノニシテ概略斧ノ使用法ニ準ス

以上私は本書としては稍、詳細に過ぎる迄に器具の使用法に就いて記しましたが、これは一つには、實踐的精神は具體的精神であり、従つて實際的に働く精神であり、従つて心や身として働くのみならず器具として働く精神であり、従つて器具の使用法は精神が眞に實踐的であるか否かの分れる處であつて極めて重要であるといふ事をも同時に示さうとしたのであります。此の點よく御味ひ願ひます。

尙各種作業標準として示されたるものを、計畫を樹てる際の御參考迄に掲げますれば、  
一、掘土ノ標準

掘土量ハ一時間ノ掘土量ヲ以テ掘開スヘキ除土ノ立方積ヲ除スル時ハ之ヲ概定シ得ヘシ

掘土量ハ天候、氣象、土質、器具等ニヨリ差異アリト雖モ尋常土一人一時間ノ掘土量ハ歩兵(主トシテ小圓匙使用)ニ在リテハ〇、四乃至〇、六立方米ヲ標準トス











ない。……此の世界が淺薄な人間で満たされてゐるのは、我々の少年時代を勤勞から引き離して書物ばかりに親しませると云ふ愚な考へのお蔭である」と道破してゐるのであります。作業教育はかゝる精神に基づいて従來の學校を改革して、生徒・兒童の自發活動を中心とする行爲の學校たらしめようとし、生徒・兒童の自己活動を最も重視するものと云へませう。そしてその際作業教育に基礎を與へたのは、心理學的には運動感覺の精神生活に對する意義が確認されたこと、社會生活に於ては行動が重視され行爲と創造が最も高く評價され、實行的創造的な人間が人間の典型とされ思想の人でなく行動の人が要求されて來たことでした。そして作業は初めは身體的行動と考へられて廣義の手の作業即ち手工が重視されたのが遂にはそれが一般に教授の原理と考へられ、身體を通ずる内生活の表現が教授の根本様式でなければならぬと主張されるに至り、更に身體的な作業の主張の間から次第に専ら自由な自己活動を重んずる思想が發展し、單に身體的作業のみでなく精神作業も作業と考へ、寧ろ之を主とする主張が現れて來ました。それも遂には身體作業を顧慮せ

ず自由な精神作業を説く様になり、自己の動機に根ざし自己の力により自ら選んだ方法で自ら選んだ目的に到達するといふ様に一切を生徒自身の自由と自發性に基づけようとする生徒中心主義に迄到つたのであります。

元より右の様な作業教育は殊に獨逸等で發展した形態であり、又その中には自己の職業を通じて社會の進歩發展に貢獻する社會に有用な公民を教育するといふ精神のものもあり、更に又日本の作業教育の中にはもつと日本人の特性たる勤勞の尊重愛好の精神の涵養を目標とし、又前述した様な主知主義教育の弊害の清算を多かれ少かれ狙つた點もあつたに相違ないのですが、所謂作業教育ではそれが共同作業でありましても既述の如き教育の根本刷新の方法にはならなかつたと思ひます。それはイデオロギーと世界の大勢の相違に基づいてゐる様に思はれます。それは例へば中學校令施行規則第十六條「作業科ハ作業ニ依リ勤勞ヲ尙ビ之ヲ愛好スルノ習慣ヲ養ヒ日常生活上有用ナル知能ヲ得シムルヲ以テ要旨トス」と集團勤勞作業の要旨とを比較して見ても明瞭に窺はれると思ひます。實業教育に於



ても同様な點がある様でありまして、作業や仕事の重視は成程主知主義・抽象主義・享樂主義等の克服には役立つに相違ありませんが、如何に質實であり勤勉であり具體の世界に立つて身を以て手足によつて働きそれが又社會の爲になりましたも、それが依然として個人主義・功利主義の上に立つて行はれたのでは、集團勤勞作業の根本目標とは天地の差があるのです。殊に作業教育理論の中には、眞の人間生活とは權威と傳統との束縛を脱して、自己が自己の自由な主となる事であると考へ、自由な自我、人格の自律、理性の自發性を根本信条とし、人は自らによつて存在する獨立の全體であるとの根本思想即ち十八世紀あたりの啓蒙思想のイデオロギーが依然として支配してゐるのを見るのであります。それは又世界に一應平和のある平常時或は舊秩序に立つての説でありまして、今日の全世界が新世界觀に立つて新秩序を建設せんとしつゝある全く新しい時局に立脚してゐないのであります。然るに吾々の集團勤勞作業は既述の如き意味に於ての實踐的精神教育であり、教學を刷新して日本特有のイデオロギーに立つて東亞ひいては世界の新秩序を建設せんとする

爲の最も根本的な對策でありまして、換言すれば皇國民鍊成の具體的方法なのであります。従つて世界に於てこれに稍、類似せるものを求むれば、獨逸の民族的政治的教育だらうと思ひます。勿論その根本的理想や性格に於て其處に本質的な相違があることは既述した處からも又後述する處からも明らかであります。その方向に於て相通する處がある様に思はれます。それ故に私は獨逸の政治的教育の特徴を若干素描して参考に供したいと思ひます。

獨逸民族は戰士的鬪争的な民族であり指導と服従を離れては存在しません。而して戰士の教育は意志の教育、忠誠と犠牲、自信と責任の教育でなければなりません。即ち自信と責任とを以て自己の任務を果し、全體の爲に進んで自己を犠牲にする戰鬪的な人物の養成こそ教育の中心課題であります。かくの如き戰士の教育は單なる知識の傳達に成るのではなく、政治的な意志と實行力との形成に主力を注がねばなりません。そしてその爲には啓發よりも訓練が重視されます。一般に文化の停滞せる時代には行爲よりも理論が重んぜら



れ、観念的・理論的な教養が理想とされ、訓練よりも啓發が重んぜられ、所謂精神生活が尊重されて身體は單なる手段視され、従つて出来るだけ早く精神の教育に専心すべきであるとされます。然るに國民社會主義にあつては、理論的・観照的な人間の代りに心身一體的な現實的・政治的・行爲的な人間を理想とします。そしてそれは訓練によつてのみ養成されます。此の訓練は民族への訓練でありまして、結局民族的性格の陶冶であります。そしてそれは人間の主要なる存在様式であり、缺くべからざる教育方法である處の勤勞・遊戯・祝祭を通じて行はれます。私は今此處に是等のことに關して立入る餘裕がありませんから、次のアルバイツディーンストに就いて述べる時に又觸れることに致しますが、唯一つ、祝祭に重要な意義が認められてゐる點だけを特に注意して置きます。即ち祝祭は勤勞と等しく民族的な生活、従つて眞の人間的な生活の維持と發展に缺くべからざるものとされ、全體及びその成員の生命の源泉と民族精神とは祝祭に表現せられ、祝祭に於て生動すると見られるのであります。そして祝祭に於て社會の成員の精神に共鳴し、共に高められ且又

統一され強化擴充されます。かゝる祝祭は嚴肅な形式とそれに伴ふ音樂とによつて人々を感動させ又結合します。律動的に働きかける音樂は精神を直接に動かし成員を社會に有機的に結合致します。

さて以上の素描によつても窺はれます様に、民族精神の相異、國柄の相異に由る根本性格や理想の相異はありとしましても、かゝる民族的政治的教育は我が國の國民教育とその方向に於て同一なものがあり、その民族の訓練を重んずる點は吾々が國民鍊成を教育の根本基調とする點と相通するものがあるのを見るのであります。唯彼等にあつては鬭争的な民族主義に終始するのに反し、吾等にあつては皇道の宣布即ちもつと平和な廣大な遙かに高い道義的な八紘一字の聖業の達成が目ざされてゐるのであります。そして集團勤勞作業がかゝる皇國民鍊成の方法として全國的に行はれる場合、從來の作業科に於て目ざされてゐたものとは相當に距離がある様に思はれるのであります。勿論或點から見れば作業教育の延長であるとも見えるかも知れませんが、然し吾々はもつと新たな見地に立ち皇國の



高遠なる理想と日本人としての絶大の氣魄とを以て進まなければ集團勤勞作業の目ざしてゐる所は十分に理解も達成も出来ないと思ひます。唯集團勤勞作業はその性格もその方法もその目的も從來の作業教育とは異なる所があるとはいへ一種の作業教育であるには違ひありませんから、從來の作業科の訓練はやはり一種の基礎訓練として十分に尊び活かして行かなければなりません。従つて作業實施に際しては勿論上述の精神の下に校長自ら陣頭に立ち全職員が所謂師弟一體となつて働かなければなりません。然し從來の作業主任の人は新精神に立つて是迄の體驗を生かして指導して戴かねばならないのであります。

## 第四講 獨逸労働奉仕團制度

### 一 アルバイツディーンストの精神

集團勤勞作業實施の當初これを白眼視する主知主義的自由主義的な人達からよく聞いた反感を含んだ質問は、「集團勤勞作業は獨逸のアルバイツディーンストの眞似ではないか」といふのであつて、一時相當に我が國のインテリ層を支配してゐた人民戦線の空氣さへも含んだナチス嫌惡が、本作業にもその儘移されて來るのを感じたのである。尤もさうした非難をする人達に對して、「それではあなた方は一體自己自身に、それもあなた方が其處から生まれて其處に育ち而も又その生命の延長として生きてゐられる處のものに、しつかりと立つて純粹にそれを守り育ててゐられますか。あなた方自身ナチスよりもつと舊くて



もつと生氣のない徴が生えて腐りかけた、もつと吾々自身のものと相容れないものの眞似をしてゐられはしませんか」と反問することも出来るのでありますが、然し私は此處では私が昭和十四年の五月初旬興亞青年勤勞報國隊派遣を執行するか否かの問題の最後の調査の爲、牡丹江・佳木斯・黒河等の北滿地方を飛行機で飛び廻つて、五月四日でしたか黒河から齊々哈爾へ飛んで其處の軍の本部を訪問して參謀長池田大佐と會談した時に、同大佐から聞いたかと思はれる左の言葉を印象深く思ひ起すにとゞめて置きませう。即ち「いゝことなら何でも何處からでもどしどし眞似たらいいではありませんか」

集團勤勞作業は決してアルバイツディーンストの單なる模倣ではないし又その儘の眞似事に終つてはならないのですが、然しアルバイツディーンストが吾々に多くの示唆と刺戟とを與へることは事實ですから、集團勤勞作業の日本の特性を明らかにすることは暫く後に譲つて、此處に私はアルバイツディーンストの素描を試みて何等かの参考に供したいと思ひます。

アルバイツディーンスト即ち獨逸の勤勞奉仕團制度は前の歐洲大戰に芽生え、大戰後ブリーニング内閣の時に失業救済の形で出發したものが一九三五年義務制確立して獨逸國民鍊成の偉大な組織となつたと見ることが出来ると思ひます。而して此の制度は開墾等による食糧問題の解決、その他植林事業や水陸路修理建設等經濟的・國防的意味があり且失業對策にもならないことはないでせうけれども、その主目的は獨逸青年層の勤勞精神を通じて獨逸民族の更生を計る獨逸國家の根本的建設的大運動であります。即ち勤勞奉仕團の目的は、民族精神を作興し階級的對立觀念を打破し協同精神・奉仕精神を涵養し殊に勤勞の尊さを自覺せしめ、かくて祖國更生のための捨石となる強靱な青年思想を涵養するにあるのであります。勤勞により國家に奉仕することは青年の義務としてあるのであります。此の點我が集團勤勞作業と目標を同じくするものであります。而して昭和十三年にありましては、男子の勤勞奉仕團に對しては千四百以上の營舎、女子に對しては六百の營舎が、全國に配設されて居り、男子は一營舎に約百五十人、女子は三十五人乃至五十人を收容し、



彼等は全く同一の條件の下に六ヶ月間完全な自炊自營の共同生活を致します。男子に就いて見ましても、團員自ら營舎を建てることは勿論、炊事も洗濯も皆自分でやり、食料も自ら耕作して必要なものを穫ると云ふ風であります。而して豫め指導者として鍛へ上げられた而も團員と餘り年配の違はない青年が、一緒に仲間として指導するのです。一年を二分して何れも冬から夏に跨るやうにして六ヶ月間づゝ奉仕生活をさせますが、その仕事は職業労働者の職を奪はぬ様なもので普通の經濟では算盤に合はないやうなのを選びます。例へば獨逸には非常に濕地が多く全面積の約八分の一を占め、濕地の爲六百萬町歩が耕作されずにあります。それを労働奉仕團の手で耕地とし農村を開くのです。かゝる六ヶ月の奉仕生活を終へた青年が一年に四十五萬人づゝ出ますが、その費用は一人一日宛男子一マルク五十ペニツヒ、女子一マルク十ペニツヒ、その財源は一部分は奉仕された土地の住民から寄附させ、月々三十ペニツヒ乃至一マルクと云ふ極めて小額の金を納付させるのであります。他は國家が一年約二億マルクづゝ支出してゐます。

尙この奉仕期間中は家庭と全く絶縁し、家庭から一切送り物も小遣錢も取ることを許されず、如何なる家庭の者も同一生活をさせます。それは國家の爲に労働の奉仕をするのみならず、階級的反感所謂階級意識は打破し、而も階級認識は與へる爲でありまして、それをこの協同生活によつて最も自然に解決するのであります。而して男子は強制で、十八歳から二十五歳迄の間に如何なる家庭の青年も入團しなければならず、且兵役につく前の條件であり、學生も大學入學前に此の義務を果さなければならぬのであります。而して此の生活を終了した者は既に二百萬以上に上り、今日の現役兵の全部及び少壯士官の殆ど全部が労働奉仕を終へナチス魂を鍊成された者ばかりです。尙その際注意すべきは獨逸の青年はかゝる生活に入る前に既にヒットラーユーゲントに入つて訓練されて居り、而も一九四〇年からは國內の全青年の加入を義務としてゐるのであります。かくの如く幾重にも訓練された青年が、更に獨逸の教育の最後の最高の段階であり且「最も強力な學校」でもある軍隊に入つて、秩序を重んずる精神・清廉・従順・義務・責任觀念・決斷力・同志的精神



神・指揮者及び祖國に對する獻身等の徳を養はれるのです。獨逸軍の強いのは偶然ではありませんが、女子は十七歳から二十八歳迄の未婚者が志願により入團するのですが、今次歐洲大戰勃發と同時に義務制が布かれ、今年四月現在に於て二千三十五ヶ所の宿舍が設けられ、十萬人の義務奉仕女子青年が數へられるに到りました。そして彼女等は一日七時間農民とその家庭の爲に過してゐます。而も大戰勃發前自由制であつた時期に於てすら彼女等は好んで此の生活に入り、大戰の始まる前月即ち昨年八月でも五萬人を數へたのであります。それはこの生活を終へて歸るとその健康・舉動等入團前と全く別人の如くなり、職業婦人としても妻としても最良の條件となり資格となるからでありました。そして又女子の指導者の養成も行はれて來ました。女子の仕事としては貧しくて人手の足りない家庭の手傳ひや病弱な主婦の援助や幼稚園の手傳ひ等であります。特に又新耕地に移住した家族が新しい農場を作つて行く最初の一年は之に力強い援助の手を差し伸べます。其の他耕作や輕易な工場労働に於て男子労働の補填等も致します。今や戦時下彼女等は如何に雄々しく

銃後の務めに勵んでゐることです。

以上私はアルバイツディーンストの大要を素描して見ましたが、然し翻つて今後の時局及び我が集團勤勞作業の將來に於ける使命及び發展を考へます時に、その精神及び理想に於て我が集團勤勞作業は遙かに高遠なものがあることは既述せる處によつて明らかであります。その制度・その組織・その遂行力及びその實績に於て吾々は獨逸に多くの學ぶべきものがあると思ひます。それ故に幾分上述せる處と重複する處もありますが、私は今少しアルバイツディーンストに就いて學んで見たいと思ひます。

先づアルバイツディーンストの經濟的意義とでも云ふべき側面から眺めて見ますと、獨逸に於ける失業者は一九二九年には二百六十二萬八千二百五十三人、一九三一年九月三十日には四百三十五萬五千人、一九三二年九月二十日には五百十萬三千人、一九三三年二月十五日には六百四萬七千人（全人口の一割）に達し、此の他、右失業者の妻子眷屬、福利施設に委ねられてゐる幾百萬の福利無職者、其の他幾百萬の隱匿失業者が考へられるので



ありました。そして是等失業者の生活は頹廢的となりそれにより経済的な浪費も行はれ、一九三〇年の煙草消費額二十二億五百萬マルク即ち獨逸人一人當り百本の割(世界第二位)となり、一九二六—二七年の酒精含有飲料品五十億マルク(國家收入の1/12)即ち一分間に八千四百十六マルク支拂ふに到り、一九二六年獨逸人一人のビール消費高は七六・三リットルに當り、従つて不道德な行爲が行はれ又國民の健康は損はれ、職業能力も義務意識も喪失し各種犯罪の温床となり、その一例を挙げれば一九二七年正常産兒五、九〇〇件に對し墮胎六、一〇〇件に上り、國家・民族の危機に直面しました。單に國家の經濟からのみ見ましても、一九二八年には失業保險のための支出十五億マルク、福利失業者のための支出八億マルク、即ち十萬人の失業者につき一億マルクの負擔となり、此の分で進めば一九三〇年、一九三一年度の失業者五百萬人に對しては約五十億マルクの負擔となりかくては獨逸經濟は全く破綻し、移住や産兒制限の様な彌縫策では到底切り抜けられなくなつたのでありまして、此の最難關を突破する唯一の方法として考へられたのは、幾百萬の肉體

的・精神的「有閑労働者」を社會福祉の爲動員することでありました。かくて百萬に上る青年男女を奉仕者として糾合したのであります。そして農地排水、農地灌漑、土地掘返作業、沼澤地開墾、荒蕪地開墾、氾濫防止、耕地整理等により食糧問題の解決となり、又國內移住を行はしめて人口の都市集中による失業者の激増や住居缺乏やその他の惡を防止し、其の他植林や水陸路の修理並に開墾、國境防衛、山崩防止、飛行場・防空壕・運動場の建設構築、害虫驅除等々の作業によりて次に述べる様な教育的な又思想史的な意義を持つて参りました。

獨逸國政府はアルバイツディーンストのために莫大な國費をかけて、それで経済的な成果があるかといふ事には相當な問題があるやうですが、これは一年や二年の結果で計算する事も出来ませんし、又これ迄の個人主義的・自由主義的・營利主義的企業經濟の立場で見るときではありませんから從來の經濟觀で早急に非難してはならないのでありますが、そして又實際今迄の個人の營利的企業では到底着手さへもされなかつた様な資源が奉仕勞



働によつて大いに開發されて居り、又開墾や水路の改修その他により獲得される新耕地は年産二十億マルクに上ると云はれてゐますが、然し勤勞奉仕が單なる經濟問題ではない事は明らかなのであります。即ちそれは民族精神の陶冶であります。即ち既述の政治教育の具體的な方法であるといふことです。此の間の消息は朝比奈策太郎氏（現在教學局企畫部長）が大日本青少年ドイツ派遣團長としての獨逸に於ける見聞及び體驗記である「若きドイツ」に擧げてゐられる左のアルバイツディーンストに従事する團員の心得十二ヶ條によつてもよく覗はれると思ひます。即ち

(一)アルバイツディーンストは二つの目的をもつてゐる。その一は教育的使命であり、他の一は經濟的の目的である。

(二)しかもこの兩者の中ドイツ青少年をしてドイツ民族の眞の一員たらしむべく創り上げるところの、教育的使命がその主となるものである。従つてアルバイツディーンストは國民の訓練所だともいへる。

(三)アルバイツディーンストは經濟的には土地の改良、干拓による新耕地の獲得、道路の建設等により經濟四ヶ年計畫に協力し、以て食料の自給自足を確立せんとするものである。

(四)しかしながら教育的並びに經濟的使命の兩者は相互に結び合つてゐる。即ち鐵をつて親しくドイツの土地に働きかけ、額に汗して開墾に精根を傾け、進んでドイツ民族に奉仕することによつて、教育的目的は遺憾なく達成されるのである。

(五)ドイツ民族の眞の一員となるためには、青年は先づ總べての階級的觀念を打破しなければならぬ。即ち學生・商人・労働者・農村青年等の區別なく、全くドイツ青年を一つに集めて何等の差別をも設けず、勤勞と協同の生活をさせる。アルバイツディーンストは階級觀念を打破し、統一ある眞の民族協同體形成のために、最も有力なる訓練所でなければならぬ。

(六)アルバイツディーンストによつて青年は労働の意義と喜びを體得する。かくて總べての青年達は労働並びに労働者に對し尊敬をはらふに至り、そこに國民的融和が生まれて



來るのである。

(七) またアルバイツディーンストによつて同志的精神が涵養される。労働に馴れたるものは不馴のものを助け、強き者は弱きものの仕事を分擔し、労働を通じて自然のうちに同志的精神が育成せられ、かくて民族的統一は將來に向つて益々強化されるのである。

(八) アルバイツディーンストの指導者・團員は次の如き心掛を持たねばならぬ。即ち下の者に對しては、自分が上の者から取扱はれたいと希望する通りに取扱ひ、また上の者に對しては、自分が部下に對してかうあつて欲しいと思ふやうな態度をとらねばならない。

(九) 同志に對し誠實を缺くものは、他人に對し誠實を要求する権利がない。また服従することを欲せぬものは、他人に對し服従を期待する権利はない。同志的精神を抛棄するのは何時か裏切られ、孤獨となり、他人から顧みられぬ日が來ることを豫期しなければならぬ。

(十) 誠實、服従、同志的精神の三者は常に生々と保持されてゐなければならぬ。

(十一) 指導者も團員も常に同志の模範となるやうに心掛けねばならぬ。しかして模範となるとは先づ公のために利己心を全く棄て去ることなのである。

(十二) 最後にアルバイツディーンストはドイツの土地と民族に對する尊き奉仕である。故にこれに参加することは、ドイツ青年にとつて最も大なる名譽である。

右によつても明らかである様にアルバイツディーンストはその教育的意義に最も重點が置かれてゐるのでありますから、此の點尙二三繰り返して置きませう。即ち(一)労働奉仕によつて青年の性格や情操が最もよく陶冶され、國土や民族に對する反省・自覺が行はれ國民意識が昂揚されます。(二)労働奉仕は肉體的労働にのみ限られてゐますが、それは若き世代をして先づ身體を鍛練すると共に肉體労働に對する尊敬の念を抱かしめ精神的労働者の傲慢を清算せしめんとするのであります。そしてそこには更に机上の空論からの脱却の意圖も含まれてゐます。(三)仕事の場所は原則として田舎若しくは海岸に位置すべきであつて、止むを得ざる場合には小都市でも宜しいが決して大都市であつてはならないの



は、一方では肉體的訓練の必要からであります。他方には都會生活者を六ヶ月間田園生活を通じて母土に近づかしめんとするのであります。更に又一方、誤つた教育のために都會の悪傾向に流れんとする農民に改めて強固な郷土精神を植ゑつけんとするのであります。(四)ネオンサインに光を奪はれた星影をのみ見る都會人は、偉大な自然から離れて唯物的感覺の塊となり、自然に對する溫い宗教的情操は失はれ、ゆとりのない不健康な機械的唯物論に墮して利己主義者になり、祖先への崇拜も忘れ、母國への郷土愛からも遠ざかり、無味な人間の型に作られる。然るに農業による勤勞は土に對する信仰を人の心に植ゑ付けて敬虔な人間本來の面目に歸らしめる。それ故に鋤鋤を持つて耕す一介の農夫は決して單なる労働者ではなくて、獨逸本來の精神的表徴であります。(五)女子の労働は男子の労働の補填(食料や果物栽培・家畜飼育・牛乳製造等)と同時に遠大なる國民經濟を理解せしめる。かゝる國民的自覺の下に労働を通じて子女の教育や家政を教へ込み、かくて健全なる母の教育が行はれると同時に又一方次代の母としての娘子移民軍をも準備します。

(六)不撓不屈の精神が養成されるのであります。ヒットラーの所謂「決斷と意力に充ち、強い性格を備へた身體の健全な人間」は農業によつて最もよく鍛へられます。獨逸國民はフリードリッヒ大王の「土地が悪い状態であればある程それだけ益々耕作せねばならぬ」以前一本の穂が生えてゐた所に今後その二本を生えしめる人こそその國民に對して大戦争に勝利を得た大將軍以上の功績をなすものである」といふ言葉を身に體すべきであります。(七)奉仕労働の義務を遂行したことは民族最高の名譽であり、民族の利害の共同の責任の名の下に置かれた彼等は終身國家民族に奉仕するのであつて、労働奉仕免狀はかゝる奉仕觀念の國民的表現として大なる教育的意義が存するのであります。(八)アルバイツデー・インストは結局既に述べた如く政治的教育でありまして、ヒットラー總統への信頼を鼓吹し、國民社會主義の政綱を明確に知らしむるのであります。その教育方針は本部より全國に向つて發せられますが、個々の勤勞上の郷土性を生かす趣旨より一律に流れるのを避け、成るべく地方指導部の意向に準ずるやうに努めてゐます。



尙既に述べた處であります。アルバイツディーンストの思想史的意義を今一度顧みて見ませう。先づ第一に注目すべきは新なる労働倫理の確立であります。抑、自由主義的猶太的労働観によりますと、労働は人格と切り離された單なる財産獲得の手段に過ぎず、従つて最小限の労働によつて最大限の財貨を獲得せんとし所謂功利的になり、又自己一身の利益の爲に他人を出来るだけ安い賃銀で出来るだけ多く働かせんとし所謂搾取が行はれることになります。かゝる歪められた労働観は眞に新鮮な獨逸的労働感情によつて置き換へられねばなりません。前者の様な労働観からすれば、労働は重荷であり苦痛であり賤しき耻辱であります。然るに後者によれば全くその正反對でありまして、労働は神の賜物であり恵みであります。獨逸人の希望は「働かなくてすむ」人間になることではなくて、労働の恵みに與ることの出来る喜びであり、忠誠と旺盛な労働力によつて國民の有爲なる一員たるべき名譽にあるのであります。従つて何人と雖も己が労働力を任意の目的の爲に用ふる権利はなく、又労働評價の規準は賃銀の多寡や労働の種類にあるのではなく、國家から

課せられてゐる課題を如何に果すかといふ點になければならぬ。かくて働く者のみが國民の一員たる資格を有し、不勞所得者は浮浪者に等しいといふ新しい労働の倫理が生まれ来るのであります。かくの如くにして個人主義や營利主義を克服すると同時に又、新なる友愛や同胞愛に基づいた眞の協同社會の根源力が養はれるのであります。即ち各階級の人が、學生も工場労働者も、都市の青年も農民も各自の生活を離れて數ヶ月間に寢食を共にして國家公共の爲に働く事によつて健全なる團體精神を體得するのであります。個人主義や階級對立の人生觀や生活態度克服にこれ程適切な方法はないであります。

## 二 アルバイツディーンストの組織

以上本書の性質及び分量上ふさはしくない迄にアルバイツディーンストに關して述べて來ましたが、それは時局を大觀し日本の將來を考へる時多くの教訓と示唆を與へると信ずるからであります。そして同じ理由によつて今少しアルバイツディーンストの制度や組織



やその生活振り等を述べて見たいのでありますが、紙数の都合上極めて簡単に若干の輪郭だけ申述べて置きます。先づ労働奉仕行政組織であります。全国の組織は全国労働奉仕指揮局（ベルリン）によつて統率され、全国労働統監指揮の下に、組織部・人事部・司法部・管理財政部・保健部・教育訓練部・労働指揮部・情報部の八つの部に分れてゐます。その中の一二の内容を見ますと、保健部では、労働量と食事との關係の調査、又青年が前に従事した職業より生じた身體上の缺陷、或は經濟不況や失業等の與へた缺陷を除去して國民體位の向上を計るのでありまして、各營舎に醫務官が置かれてゐます。教育訓練部では奉仕道場の日課中の授業、「團樂の夕」の指導、並びに體育・編隊訓練の指揮等を掌ります。情報部は出版・映畫・ラヂオ等の施設により相俟つて教育效果の全きを期してゐます。労働指揮部では労働奉仕が行ふべき仕事を調査計畫して、その仕事を割當てるのでありまして、一九三五年中期の發表によりますと、各労働奉仕團の行ふべき仕事は少くとも二十年を要する分量があり、その仕事の分量は、耕地獲得が六〇パーセント、道路建設一五パ

ーセント、山林事業一〇パーセント、植民準備五パーセント、其他一〇パーセントでありまして、仕事の中には收穫援助や奉仕道場バラックの建設や先史民族遺跡の發掘等も含まれてゐます。尙アルバイトディーンストの生みの親、育ての親であるコンスタンチン・ヒールル統監は、獨逸労働奉仕團の誇として「八十五年の大事業計畫を有する」とさへ明言してゐるさうであります。

次に指導者の養成及びその組織に關してであります。これに立入るのは避けまして、此處には唯指導者の資格とされてゐる點を二三擧げて見ませう。即ち（一）先づ第一に國民社會主義の精神を體して、此の精神が最も正當にして時代に即した獨逸精神なりとの自覺を有する者たること。（二）指導者は狂信的に己の義務の遂行を希求する者でなければならぬ。併しそれは奉仕生活中の自己の實例に於て爲さねばならぬ。その際階級的自負の痕跡さへもあつてはならない。而して共働はその絶對條件である。（三）指導者は青年でなければならぬ。勿論茲にいふ青年とは年齢上のことだけではないが「青年は青年によつてのみ



指導せらるべき」である。而して指導者は青年に労働を命ずるのではなく、彼自身が青年の同僚として、その生活を共にする中に指導教育することが出来なければならない。このことは夜の自由時間（團樂の夕）に際して特に重要である（これに關しては後出の日課の項参照）。（四）指導者は安易な市民生活を享受しようとする者であつてはならない。労働奉仕は斷じて小市民化してはならないのである。（五）指導者はあらゆる部門の問題に就いて是非の判断を下すことが出来なければならない。奉仕團體の精神は指導者の精神によつて定まるのである。

尙其の他参考となる二三の點を擧げて見ますと、労働奉仕法によれば、奉仕義務者は満十八歳より二十五歳迄であり（以下男子の分だけを記す）、召集人員は總統これを定め、一九三七年には二十三萬人、一九三九年には三十萬人の筈でありましたし、男子十九歳に達した曆年に於て四月一日又は十月一日に召集され六ヶ月奉仕する。召集前の志願も可能であり、召集延期は、一身上の都合、國外旅行の場合には二ヶ年迄、止むを得ざる職業上の理

由ある場合は五ヶ年迄、而して上級學校入學の理由の場合は延期出来ません。次に隊の組織は全國三十の労働大管區に分れ、その下に六乃至九の群團あり、全國で二百七の群團があり、各群團下に五乃至八の分團があり、全國で千四百十の分團があります。此の分團が一單位となつて仕事に割當てられ、一分團は三小隊、九班、百五十六人より成り、一つの労働營舎で生活致します。尙一班は十五人より成つてゐます。奉仕道場である労働營舎は多くは荒野の孤獨な場所に立てられたバラックであつて、一地方の仕事が終ればそのバラックと共に他地方に移動するのであります。最後に日課表の一例を擧げて見ますと、

- 六、〇〇分 起床（夏は五時）
- 六、〇五—六、一五 早朝體操
- 六、二〇—七、一五 水浴、洗面、寢具整頓、朝食
- 七、一五 集合
- 七、二〇 團旗掲揚



七、三〇	作業場へ行進
七、四五—一〇、〇〇	労働奉仕
一〇、〇〇—一〇、三〇	第二朝食
一〇、三〇—一四、〇〇	労働奉仕
一四、〇〇—一四、一五	歸營
一四、三〇—一五、〇〇	晝食
一五、三〇—一七、〇〇	スポーツ・體操
一七、一〇—一八、〇〇	國政教育（題目の一例ヒットラーとその忠友）
一八、〇〇—一八、四五	長靴點檢
一八、五五	集合
一九、〇〇	命令傳達
一九、一五—一九、四五	夕食

一九、四五—二〇、一五	整容・修繕の時間
二〇、一五—二二、四五	團樂の夕
二二、〇〇	消燈

右の中自由時間（團樂の夕）は労働奉仕生活中最も重要な意義を持つて居りまして、アルバイツディーンストが要求する青年は己の義務を完行すると共に、その仕事の終つた後には心から楽しむことの出来る青年です。演奏・手工・讀書會・寫眞・映畫・合唱・舞踊・芝居等に彼等は興するのでありまして、指導者の側からは此の時間こそ眞に自由にして美しき訓育・指導の期待さる可き時間であり、彼等は命ずるのではなくして青年を勵まし、青年の持つ小さい才藝能力を伸ばし趣味を涵養させ、而して現實の仕事にぶつつかる生活の眞只中から生まれて来る新鮮な自由時間は、各人の一生の思ひ出となる労働奉仕生活に貴い一頁を加へると共に、新しい健全な文化の誕生が其處に期待されるのであります。而して營舎生活の効果は、同志愛・責任感・服従心等その他數多い中に、特に注意さるべ



きは營舎に於ける平等な共同生活の結果として、筋肉労働者と頭腦労働者との相互理解であります。かくて獨逸民族の政治教育の最も根幹が養はれるのであります。

尙他に、「労働感謝」の組織があり、これは労働奉仕を終了した者の爲にあり、全國労働奉仕指揮局の外にあつて、労働奉仕が與へた訓練陶冶を再び社會に戻つた人々に繼續せしめ、これを實踐に移さしめんとする目的でありまして、一九三五年に設立され、労働奉仕終了者の就職保證、技術補習再教育、労働奉仕によつて獲得された新耕地への移民定住等此の組織の掌る所であります。

最後に労働奉仕に對して上層の人が如何に考へてゐるかの實例として、伍堂卓雄氏の「獨逸の勤勞奉仕運動」の一節を引用して参考と致します。「二年前に私はベルリンの近郊ナウエンと言ふ所の男子の労働奉仕團の實況を見に行きましたが、その動機は、ドイツの産業王と言はれるクルップ社長クルップ・フォン・ボーレンの家庭に招ばれて行きました。時に、自分の次男も今労働奉仕に行つてゐるから、行つて見てやつて呉れと云ふ話があり

ましたので視察に参りましたが、丁度十一月の末で雪の降りしきる荒天の下に、ドイツ第一の富豪の息子が鶴嘴を振つて排水工事に従ひ土管を埋めたりして居りましたので非常に感激してその次男に感想を聞いて見ましたところ、こんな愉快な生活はないと言つて少しも屈託のない様子でありました。ところが今度又クルップの家へ招ばれて参り玄關へ着きますと目下アメリカへ留學中である筈の三男が出て参りましたから、どうして歸つてゐるのかと聞きますと、母が、お前は労働奉仕する歳になつたから歸つて來いと云ふので、留學を中止して歸つて來ました。親父は知つて居つたのかと聞くと、親父は知らなくて、ただ母が頻りに歸つて來いと言ふので歸つて來たと申しました。斯ういふ考へ方に上層の人がなつてゐるのであります。外國に留學してゐれば必ずしもその期間に歸らなくてもいいのであります。それをわざ／＼母親が一存で呼び寄せて労働奉仕をさせるといふ、この氣持こそドイツの湧き上る力の源泉であると私は思ふのであります。即ち獨逸のアルバイツデー・インストはその制度や組織に學ぶべきものがあると同時に、それに対する獨逸國



民各層の理解と自律的服従或は自發的協力に頭の下るものがあり、吾々の大いに學ぶべき點があると思ふのであります。

## 第五講 集團勤勞作業の精神

### 一 集團勤勞作業の日本的性格

獨逸の勤勞奉仕の制度は慥に世界に誇るに足るべきものであり、殊にその組織の周到なる、又獨逸が大戦後國歩艱難にして經濟的にも窮乏せるにも拘らず、否本質的に見ればそれ故にこそ、全國的に營舎等の施設をなし、又前述の如き巨額の費用を惜しげもなく費して居り、又此の義務を果すことが大學等の教育を受ける爲にも必須條件とされてゐる如き、何れも吾々に多大の刺戟と示唆を與ふる事は既述の通りではあり、そしてその點に於て吾等は虚心坦懐に多くのことを學び習はなければならぬのであります。然し吾々の集團勤勞作業の根本精神は決して舶來のものではなく、ましてアルバイツディーンストの翻譯



ではありません。それは世界無比の我が國體に由來し、我が日本國民精神の太古よりの傳統の復興に外ならないのであります。私は此の事に就いて縷々説明する必要がないと信じますが、唯吾々の信念を裏付ける爲に日本書紀の卷第十一（仁徳天皇）の一節を謹んで引用することに致します。

四年春二月、己未朔。甲子（甲）群臣に詔して曰はく、朕高台に登りて遠く望むに、烟氣域中に起たす。以爲ふに、百姓既に貧しくして、家に炊ぐ者無きか。朕聞く、古の聖王之世には、人人詠徳之音を誦げ、家家に康哉之歌有りきと。今朕億兆に臨みて、三年になりぬ。頌音聆えず、炊烟轉疎なり。即ち五穀登らず、百姓窮乏しからむを知りぬ。封畿之内すら尙給がざる者有り。況や畿外諸國をやと。三月、己丑朔。己酉、（三叶）詔して曰はく、自今之後、三載に至るまで、悉に課役を除めて、百姓の苦を息へよと。是の日より始めて、黼衣鞋履、弊盡きずば更に爲らず、温飯煖羹、酸饒らずば易へす。心を削くし志を約めて、以て従事乎無爲。是を以て、

宮垣崩るれども造らず、茅茨壞るれども葺かず。風雨隙に入りて衣被を沾し、星辰壞より漏りて牀蓐を露にせり。是の後、風雨時に順ひて、五穀豊穰なり。三稔の間へて、百姓富寛なり。頌徳既に満ちて、炊烟亦繁し。七年夏四月、辛未朔。天皇台上に居しまして、遠く望みたまふに、烟氣多に起つ。是の日皇后に語りて曰はく、朕既に富めり、豈に愁有らむや。皇后對語へたまはく、何をか富めりと謂ふ。天皇曰はく、烟氣國に満てり、百姓自ら富めるか。皇后且言さく、宮垣壞れて修むることを得ず、殿屋破れて衣被露にうるほふ。何ぞ富めりと謂ふや。天皇曰はく、其れ天の君を立つることは、是れ百姓の爲なり。然らば君は百姓を以て本と爲す。是を以て、古の聖王は、一人も飢ゑ寒ゆれば顧みて身を賣めき。今百姓貧しきは則ち朕が貧しきなり。百姓富めるは則ち朕が富めるなり。未だ百姓富みて君の貧しきこと有らじとのたまふ。秋八月、己巳朔。丁丑（九）大兄去來穗別皇子の爲に壬生部を定む。亦皇后の爲に葛城部を定む。九月諸國悉に請して曰さく。課



役並免されて、既に三年に経る。此に因りて宮殿朽壞れて府庫已に空し。今黔首富饒ひて遺を拾はず。是を以て里に饑寒無く、家に餘備有り。若し此の時に當りて税調を貢りて宮室を修理るに非ずば、懼らくは其れ罪を天に獲むかと。然れども猶ほ忍びて聽したまはず。

十年冬十月、甫めて課役を科せて、宮室を構造る。是に於て百姓領されずして、老を扶け幼を携へて、材を運び簣を負ひ、日夜と問はずして、力を竭して争ひ作る。是を以て幾時も經ずして、宮室悉に成りぬ。故れ今に聖帝と稱めまをす。」(大倉精神文化「神典」四〇三—四〇五頁)

吾々は日本書紀の右一箇所だけに於ても最も明らかに我が國の集團勤勞作業の精神と姿とを仰ぐことが出来るのでありますが、これは實に御歴代の天皇の大御心に答へ奉る吾々忠良なる臣民の何時の代にも變りなき生活振りであるのでありまして、或は代々伊勢神宮御遷座に際し、或は又近くは明治神宮御内苑の御造營に際し、又最近は或は樞原神宮

や宮崎神宮の御神域御擴張に際し、或は宮城外苑の聖化作業に於て、三千年來變ることなき日本の姿を仰ぐことが出来るのであります。殊に明治神宮御内苑御造營の際の勤勞奉仕こそは前述の獨逸アルバイツデーニスト制度誕生の源泉をなしてゐるとさへ聞くのであります。而もかゝる尊き奉仕の精神はその大體を學ぶことは出来ましても、我が國民の心に流れて變らぬ敬虔極まりなき奉公の精神、殊にその基底をなす國體は、到底他國民の眞似ることの出来ない實に世界無比のものであることを吾々は誇ることが出来るのであります。そしてそのことは今日吾々の行ひます宮城遙拜といふ一行事にも十分に表れてゐるのであります。尙仁徳天皇の大山陵は御歴代の御陵の中最も規模の大なるものの一つであるのを拜する時、如何に又「百姓領されずして、老を扶け幼を携へて、材を運び簣を負ひ、日夜と問はずして、力を竭して争ひ作り奉つたかを想像して、吾々も又その作業に共に奉仕しつゝあるの感が致すのであります。

次に又勤勉と報恩とは實踐的な我が國民の特性でありまして、それも自然な素直な心で



行ぜられ來つたのであります。支那の百丈禪師は「一日作さざれば一日食はず」と云つたさうであります。支那人としてはかうした心得の人は稀なのではなからうかと思ひます。然るに本來の日本人は労働を愛好し又座食する事は「罰が當る」と信じ且耻として來たのであります。今日でも健全な農民や労働者はかく信じ且かく感じて勤勞に勤んでゐるのであります。然るに今日高い教育を受けた所謂教養ある人を以て自任する人達の間には却つて労働よりも讀書や音楽や繪畫やその他の娛樂等に耽る閑暇のある生活の方がより尊いと已惚れてゐる者があるのではないでせうか。然し吾々は決してギリシヤ人、歐米人ではない筈です。二宮尊徳先生は「天つ日の恵みつみおく無盡藏歟でほり出せ録でかりとれ」と歌はれ、又「たとひ明日食ふべき物なくとも、釜を洗ひ膳も椀も洗ひ上げて餓死すべし、是今日迄用ひ來りて、命を繋ぎたる、恩あればなり、是恩を思ふの道なり」(二宮翁夜話)と云つてをられます。そしてそれは二宮先生だけの特別なお心掛けではなくて我が國民一般の心持であつたと云ひ得ると思ひます。せつせと土用の中炎暑の日も星を戴いて出で星

を戴いて歸つて田を作り、而も一粒のお米も勿體ないとして決して疎かにしなかつたのが日本の農民であり、年中終日孜々として創造的に働き續けて而も自然を征服する處か却つて自然を尊び隨順し、又茶碗一つ洗ふのも明日食ふ爲よりも寧ろ今日迄用ひ來りし恩に報いんとしたのが、吾々の祖先の生活振りでありまして、そこに最も日本人らしい實踐的な生活振りを見ることが出来るのであります。然るに教育が普及し精神が養はれた筈の近頃の傾向はどうであつたでせうか。少くともかゝる點に於ては我が國民の精神はあまり向上したとは云はれない様に思はれます。

吾々に今日課せられた問題は、上述の如き祖先傳來の忠良なる臣民としての心、又敬虔な勤勉な心を思ひ起して、これ等の心が一つになつて日常の生活に顯現する様に養成し鍛へることにあります。そしてかくの如くに國民精神が鍊成された時こそ、全世界を八紘一字の偉大なる天業を以て如實に光被し給ふ皇運を扶翼し奉ることの出来る時なのです。そしてその時こそ吾々は眞に忠良なる臣民となつたと云ふことが出来るのであります。而し



て國民の各層をそれぞれに皆かくの如く鍊成する爲には、我が國の教育制度の全面的刷新が絶対に必要なのでありますが、然し吾々は吾々の集團勤勞作業の精神を一層徹底させ、その組織と施設とを整備し、その實施に萬全を期することによつて今日只今から直ちにその理想の實現に踏み出すことが出来るのであり、否吾々は既にかく踏み出し前進し始めてゐるのであります。そして又此の意味に於て吾々は興亞勤勞報國隊が更に大規模に大陸に派遣され徹底的な訓練と勤勞によつて皇國民としての魂を具體的に鍛へ上げられんことを切望し又その實現を期するものであります。

## 二 興亞勤勞報國隊

集團勤勞作業の目的が實踐的精神教育即ち皇國民の鍊成にあり、それがやがて又教育刷新の具體的方法でもあり、同時に又聖戰遂行の時局に處する最も本質的な方策であることは繰り返し述べ來つた處であります。そのことは文部省教育調査部編纂の「集團勤勞作

業の概況」第一章「集團勤勞作業の類型」中にも覗はれてゐるのであります。それによれば集團勤勞作業は勤勞作業を通して團體的訓練を積みしめ心身を鍛鍊し國民的性格を鍊成する等教育の實踐化を圖るにあるが、その實をあげるためには各地方・各學校は特殊な事情に照應して作業の具體的な目標乃至方法・組織を立てねばならず、その爲に實施状況を見るにそれ／＼独自の地方的特色を現してゐると云つて、次の様に代表的な類型に分けてあります。その第一類型は神奈川縣の學校報國團に現れたもので、これは「縣下の専門學校・男女中等學校の生徒を對象とする運動であることと關聯して、集團勤勞作業の目標を教育、特に學校教育の缺陷を是正するといふことに重點を置いてゐる。」従つて學校報國團の設定趣旨中に「各學校は……偏知教育乃至は教壇教育の憾なしとしない。依つて之を實踐躬行に導き勤勞愛好の慣習を育成し團體的訓練を積みしめ以て身心を鍛鍊し國家社會に奉ずるの信念を體得せしむるは現下内外の情勢に鑑み又學校教育の完成を圖る上から最も緊要の事と考へられる」と述べてあり、かくて「學校報國團は學校教育を學校の外の



生きた社會活動との實踐的接觸のうちに導き入れ、學校内の修養に限られた從來の狭い學校教育を廣く國家公共的修養の實踐にまで擴大する役割をつとめる。」従つて「既設の男女青年團なども聯絡し提携しながら國家的社會的體験を與へ得るやうにしなければならぬとしてゐる。」「しかしこれは集團勤勞作業の實踐躬行による教育の機會が學校の外の社會公共の生きた活動の中に求められただけであつて、それを通して目指されてゐる目的は飽くまで學校教育本來の任務達成といふことに在る。」尙このことは、縣下の學生・生徒を共同宿泊せしめ、森林治水事業を根基とする勤勞奉仕作業を實踐せしむるを目的とする箱根報國寮の精神にもよく現れてゐるのであつて、此の寮は神奈川學校報國團の主要事業であるが、その設立の趣旨に「森林は精神を養ふに最も適し、山野は心身の訓練に最良の道場たり。従つて、學生・生徒を大自然の裡に誘致し愛郷愛國の至情を培ひつゝ心身を修練せしむるの效果は今更吹々を要せざる所なり。更に勤勞を通して學生・生徒を教化訓練するは從來の教育の弊を矯め眞に人格を養成し得る所以にして今後學校教育上大いに力を

注ぐべき重要事項たるべきを信ず」とあります。

第二の類型は石川縣青少年勤勞報國隊に現れて居り、これは「縣下の青少年全體を包含する運動であるが、その著しい特徴は……現下の重大なる時局に即應し盡忠報國の赤誠と奉仕とを示現すべき銃後青少年の國民運動として集團勤勞作業をとりあげてゐることである。」このことは同報國隊設立の趣旨に明らかで、「今や我が國は肇國の大理想を實現せんとして舉國一致曠古の聖業達成のため邁進しつゝあり、この秋に當り國運伸張の源泉たる大日本青少年は神國に生をうくるの光榮に感激し欣然驟起して八紘一字の大打進に参加し全生命を捧げて大業を翼賛し奉ると共に愈々各自の資質を鍊成して來るべき國難に備へ以て皇國を磐石の安きに置くの覺悟なかるべからず」と宣明してあり、尙同報國隊三綱領に、一、「我等は皇國に生を享けたるの光榮に感激し 至尊に對し盡忠の赤誠を捧げ奉らん」二、「我等は勤勞の實踐により心身を鍛鍊し肇國理想の實現の原動力たらんとす」三、「我等は協同一致國土を開發して國運の進展に貢獻する所あらんとす」とあり、かゝる三



綱領を高唱し、これが實現に邁進せんとする青少年運動が石川縣の青少年勤勞報國隊であります。

第三の類型は宮崎縣の祖國振興隊に現れた集團勤勞作業の方向です。祖國振興隊はその信條として三箇條を掲げてゐますが、その中「我等は盡忠報國の精神に滿ち盡忠奉公の赤誠に燃ゆ」「我等は勤勞を倍加し誓つて祖國振興の柱石たらん」の二箇條は前述石川縣青少年勤勞報國隊と同型の精神を表してゐますが、信條の第一條「我等は 皇祖發祥の聖地に生まれ天業翼贊の皇民の裔たるに感激す」に第三類型の特徴が現はれるのでありまして、「これは集團勤勞作業の意義を郷土独自の歴史的事情に結びつけ、體驗的に最も親近な郷土への自然的感情に訴へつゝ實踐的奉仕を通して郷土に對する認識と尊敬の念を高め、郷土即祖國、祖國即郷土の熱烈な郷土的感情を中心にして集團勤勞作業を行はしむるのである。」これと同型の例を尙求むれば奈良縣の主宰する建國奉仕隊や三重縣の青年勤勞報國隊などでありませう。これは檜原神宮や神宮の御鎮座といふ郷土の歴史的特殊性に眞の生命の根源を置いてゐるのであります。

命の根源を置いてゐるのであります。

上述した様な縣單位の集團勤勞作業に現れた三類型を集團勤勞作業の「教育性」・「時局性」・「郷土性」と呼んでゐますが、それは又各學校の集團勤勞作業の中にも窺はれます。然し實際に行はれる集團勤勞作業は程度の相異こそあれ三種の類型を包含してゐると云へませう。而して此の「三種の類型を通して學び得ることは、集團勤勞作業には三つの方向、三つの課題があるといふことである。三つの方向とは、第一には教育運動乃至教化運動としての方向、第二には喫緊なる時局の認識に基づく國民運動としての方向、第三には郷土との特殊な精神的關聯に基づく國民運動としての方向であり、これと聯關して三つの課題とは、第一には教育殊に學校教育本來の任務達成てふ課題、第二には國民的赤誠の發露とその實踐による國民的本質の體驗てふ課題、第三には郷土の愛護と郷土の資源の開發てふ課題である」と「集團勤勞作業の概況」中には述べてあります。然し究極に於ては右三方向・三課題を通して皇國民の鍊成をなさんとするものであります。而して此の精神が發し



て東亞大陸の天地に働き興亞の大業翼贊の赤誠となつて成つたものが即ち興亞勤勞報國隊でありまして、今夏は學生生徒の方は興亞學生勤勞報國隊の名稱の下に約二千五百人が滿洲・蒙疆・北支・中支に渡つて勤勞奉仕をなしたのでありまして、これは人類の歴史始つて以來の尊い偉大な事業であります。そしてそれは東亞大陸に日本精神による新秩序を建設する礎石であると同時に又神代の昔より傳はり來れる日本精神そのものの鍛錬でもあるのであります。そしてそれは又昭和十四年五月二十二日青少年學徒に賜はりたる勅語を奉體する最も規模の大にして意氣の盛な方法でありまして、これは東亞及び世界の青年・學生に對する呼びかけであると同時に又將來の日本を背負つて立つべき國士の養成なのであります。従つて此の選に選ばれたる學生生徒諸君は日本青年學徒の代表として、心を空しうし一切の我を捨て盡忠報國の精神に立ちて氣節を尙び禮儀を重んじ氣宇を濶大にし以て大御心に副ひ奉ると共に、又東亞及び全世界の青年學徒の模範たらんことを期してゐる次第であります。

故にその綱領に曰く。

「我等興亞學生勤勞報國隊ハ

聖旨ヲ奉戴シ

身ヲ挺シテ興亞ノ大業ヲ翼贊シ

以テ

大御心ニ副ヒ奉ランコトヲ期ス」

### 三 興亞教育の根本義

我が國の教育が恒に「教育ニ關スル勅語」の御聖旨に則つて行はるべきは言を俟たず、克く忠に克く孝なる忠良の臣民を鍊成すべきことは昔も今も將來も變りのあるべき筈なく、日本人の行とか實踐は結局盡忠の誠を致す事に歸すべきことも自明なことであります。然し皇國の道は無窮に變らねども國民の行が歴史的實踐である以上、時の課題があり従つて



又その時勢に應じた教へがなければなりません。そして教育が歴史的實踐である以上その時代に課せられたる使命遂行上それに適切なる方法が行はれねばなりません。而して集團勤勞作業は現代の日本に課せられたる使命遂行に適し得る國民鍊成の適切なる方法であります。これを遂行する上に於て吾々の服膺すべき御教へとして絶えず拜誦すべきは、「青少年學徒ニ賜ハリタル勅語」であります。その意味に於て私は此處に此の勅語を謹誦致します。

國本ニ培ヒ國力ヲ養ヒ以テ國家隆昌ノ氣運ヲ永世ニ維持セムトスル任タル極メテ重ク道タル甚ダ遠シ而シテ其ノ任實ニ繁リテ汝等青少年學徒ノ雙肩ニ在リ汝等其レ氣節ヲ尙ビ廉恥ヲ重ンジ古今ノ史實ニ稽ヘ中外ノ事勢ニ鑒ミ其ノ思索ヲ精ニシ其ノ識見ヲ長シ執ル所中ヲ失ハズ嚮フ所正ヲ謬ラズ各其ノ本分ヲ恪守シ文ヲ修メ武ヲ練リ質實剛健ノ氣風ヲ振勵シ以テ負荷ノ大任ヲ全クセムコトヲ期セヨ

吾々が集團勤勞作業によりて企圖する處のものは實に國家隆昌の氣運を永世に維持する

重遠なる任務を雙肩に負ひ得る國民を鍛鍊せんとするのであります。その爲には我が國家の本質と使命を體認し、大日本國民としての使命遂行に適する心身を鍛へ出さねばなりません。而してその爲には氣節を尙び廉恥を重んずることが大切であり、而も此の點現代の青少年には最も缺くる處があるのを猛省しなければなりません。其の他古今の史實に通ぜしめ中外の事勢を知らしめ、思索を精にし識見を長ぜしめ、中を執り正に嚮はしめ、以て各々の本分を盡さしめる様、作業を通じ又作業と共に導くことを心掛けねばなりません。而して現代青少年の情弱を克服するやうに作業を通して鍛鍊し以て質實剛健の氣風を大いに振勵しなければならぬのであります。青少年の氣風にして若しも質實剛健ならずばその國は危いことを爲政者・教育者は勿論青少年諸君ももつともつと眞劍に反省して見ることは、現在の我が國家及び青少年の實情からして最も喫緊の事であり、殊に大學・高等専門學校の學生生徒諸君に此の點劃期的な轉回を最も要望する次第であります。もつと素直に申しますと、現在の様に上は大學生から下は小學兒童に到る迄質實剛健の氣風に缺け



てわたのでは、現代日本に課せられた大使命の遂行が覺束ないのみならず、肇國以來吾々の祖先が大御稜威の下盡忠報國以て今日に到りました光輝ある歴史を汚し、又今次事變に身を獻げた尊い英靈に對しても顔むけのならない結果に陥り、不忠不孝の臣子とならぬとも限らぬことを警告したのであります。

さて我が大日本の國家の隆昌とは、大御稜威が全世界に光被し衆生をしてその所を得その生を完からしむることでありまして、かゝる負荷の大任を全うし得る國民を鍊成するところ今日吾々が最も意を用ひなければならぬことは云ふ迄もありませんが、集團勤勞作業がその爲の最も適切な一方法である以上、國家はよろしく制度を確立し組織を整備し施設を充實すべきであり、作業の直接指導者たる教育者は己が心を修練し計畫を精密にし精魂を籠めて指揮すべきであり、學生生徒諸君は己を空しうし禮節を尊び而も氣魄を盛にして常時非常時を問はず分に應じて七たび生まれて國恩に報いるに足る心身を鍊磨すべきであります。かく聖旨を奉體する最も根本的にして且具體的な適切な方策として吾々は我

が集團勤勞作業の發展を祈つて止まないものであります。そしてその作業の道場は大日本國土は勿論廣く東亞大陸の天地であることを特に申上げて置きたいと存じます。

集團勤勞作業の精神 終



昭和十五年十二月廿五日  
昭和十五年十二月三十日  
印發

行刷

定價五十錢(B)Ⓜ

興亞教學研究會

代表者

編者 志水義暉

發行者 目 黑甚七

東京市神田區駿河臺三ノ一

發行所 目 黑書店

東京市神田區駿河臺三ノ一  
振替口座東京二八〇九番  
電話神田(25) 〇〇五五九番

印刷者 白井赫太郎

東京市神田區錦町三ノ二

印刷所 精興社

一喜屋長

神精の業作勞動團集

有所權作著

(本製間三)



# 書新學教

編會究研學教亞興內局學教省部文

- |      |  |         |
|------|--|---------|
| 輯一   | 文學博士 西晋一郎著                               | 送價 四十錢  |
| 輯二   | 廣瀨 豊著                                    | 送價 三十錢  |
| 輯三   | 竹岡勝也著                                    | 送價 四十錢  |
| 輯四   | 經濟學博士 木村増太郎著                             | 送價 三十錢  |
| 輯五   | 金子大榮著                                    | 送價 五十錢  |
| 輯六   | 池崎忠孝著                                    | 送價 三十錢  |
| 輯七   | 文部大臣 橋田邦彦著                               | 送價 四十錢  |
| 輯八   | 理學博士 近重眞澄著                               | 送價 三十錢  |
| 輯九   | 文學博士 近藤壽治著                               | 送價 四十錢  |
| 輯十   | 文學博士 諸橋徹次著                               | 送價 三十錢  |
| 輯十一  | 醫學博士 永井潜著                                | 送價 四十錢  |
| 輯十二  | 長屋喜一著                                    | 送價 四十錢  |
| 輯十三  | 支那事變の本質                                  | 送價 三十錢  |
| 輯十四  | 支那と新生活運動                                 | 送價 三十錢  |
| 輯十五  | 復古思想                                     | 送價 四十錢  |
| 輯十六  | 聖徳太子                                     | 送價 五十錢  |
| 輯十七  | 我が國の精神を高揚し、皇國の眞姿を明示し尊皇報國の實績を説く水戸學の示唆大なり。 | 送價 一・五〇 |
| 輯十八  | 水戸學要義                                    | 送價 一・五〇 |
| 輯十九  | 日本國民教育史                                  | 送價 四・〇〇 |
| 輯二十  | 教育勅語の本義闡明                                | 送價 三・四〇 |
| 輯二十一 | 小川正行著                                    | 送價 三・〇〇 |
| 輯二十二 | 學級教育學                                    | 送價 三・〇〇 |
| 輯二十三 | 本を務めよ                                    | 送價 一・四〇 |
| 輯二十四 | 國家教學教育                                   | 送價 二・五〇 |

行刊・店書黒目・京東

# 選著名書圖育教

- |            |           |         |  |
|------------|-----------|---------|--|
| 文學博士 深作安文著 | 水戸學要義     | 送價 一・五〇 | 我が國の精神を高揚し、皇國の眞姿を明示し尊皇報國の實績を説く水戸學の示唆大なり。   |
| 文學博士 乙竹岩造著 | 日本國民教育史   | 送價 四・〇〇 | 國民教育と云ふ重大なる觀點に立ち著作せられたるもので國民學校の沿革的背景をなす。   |
| 小野正康著      | 教育勅語の本義闡明 | 送價 三・四〇 | 「教育勅語」御下賜滿五十周年を記念して出版せられ質問應答式に依り眞髓を究む。     |
| 小川正行著      | 學級教育學     | 送價 三・〇〇 | 我が國に學級教育學が行はれてより既に半世紀を経て初めて公にされた系統的述作である。  |
| 文學博士 諸橋徹次著 | 本を務めよ     | 送價 一・四〇 | 孔孟を經とし諸子百家を緯とし複雑なる儒教思想中より其中心をとり平易に論述す。     |
| 文學博士 西晋一郎著 | 國家教學教育    | 送價 二・五〇 | 世界の諸聖に道を尋ね、我が立國の精神よりして國民的自覺の大準を明示するの好著である。 |

行刊・店書黒目・京東



選著名書圖育教

文學博士 吉田熊次著  
**教育目的論**

文學博士 福島政雄著

**國體教育史論**

文學博士 入澤宗壽著

**日本教育の傳統と建設**

佐藤熊治郎著

**全體觀と國民教育**

岩垂憲德著

**國民精神の大本**

佐々木秀一著

**日本教育の將來**

菊 定價二・八〇判  
送料一・一四

本書は純教育學的見地より教育目的論を究明斯界に於ける大指針書たるを失はぬ。

菊 定價二・八〇判  
送料一・一四

新しき内面意義を日本の融化性に摺み聖徳太子の御認識を取上げ日本の眞實を明かにす。

菊 定價二・二〇判  
送料一・一四

日本教育の傳統を明確に後づけ當面我が教育界の變革に關する方針を提起せるものである。

四 定價一・九〇判  
送料一・一四

全體主義の觀念を是正し、皇道教育の礎石となり教學刷新上に大きな示唆を投げた名著。

四 定價二・五〇判  
送料一・一四

諸先賢の遺著、東洋諸國の典籍を涉獵し、是が得失を皇道に考へ、邪正を國史國典に徴す。

菊 定價三・〇〇判  
送料一・三八

日本教育の方途は如何にすべきであるかの組織、建設の具體案を教育界全般に問へるの書。